日本大辭典

大和田建樹編

い　ゐ

喉音の一つにしてきしちにひみりの子音を助けて發音せしむるもの。之を單母音と稱し。此單母音を含み持つ子音をい列音と稱ふ。或地方にては。えと混じて同音となり又はいをえの如くえをいの如く訛りて唱ふることあり。「いろは」の順にてゐの字よりは前にある故「口のい」とも呼ばれ。又五十音圖によりて「あ行のい」とも呼ばる。喉音の一つにして元はういの二音合して成りたるもの。故に之を複母音と稱す。始はういの如き發音なりしが今はいと異なる處なし。地方の訛りにてえと相混ずる事もいに準ず。いろはの順にていの字よりは後にある故「奥のゐ」とも。字形によりて「丸ゐ」とも。又五十音圖によりてわ行のゐとも稱へらる。

い　寢。寐(名)

い　(名)

い　意(名)

い　醫(名)

い　異(名)

い　膽(名)

い　移(名)

い　五(數)

い　五十(數)

い　(助辭)

眠り。●寢入ること。○「朝寢」。「熟寢」。「安寢」。「寢もねず」(雅)

蜘蛛の糸。●蜘蛛の網。●蜘蛛の巣。○順集「下なる草にかける蜘蛛のい」(雅)

〔一〕こゝろ。●望み。●好み。〔二〕意味。

〔一〕病を愈すこと。〔二〕醫を業とする人。

なみならぬ事。●通例とことなる事。

きも○「熊の膽」

昔し諸官省間に往復の文書。(延喜式)

いつゝ。○「五十」「五百」(雅)

ごじふ。○「五十日」「五十鈴」(雅)

名詞の下に添へて云ふ詞。○記「玉い盌に

つきて」○謡葉「家なる妹いいぶかしみせむ」○續紀宣命「此二人の禪師等い同じく」を以て」(三百)

い(接)　動詞の上に添へて云ふ詞。○「い行く」「い翔る」「い渡る」(三百)

ゐ　井(名)　(一)田の用水をたくはへおく處。(二)地を鑿りて飲料水を得るところ。

ゐ　猪(名)　獸の名。■ゐのしゝに同じ。

ゐ　亥(名)　十二支の一つ。……ゐの時は夜の十時。ゐの方角は西北の北によりたるかた。……猪の字に對して亥の字を日よみのゐ(亥の日)などよみかうふる時用ふるの意にて)と云ふ。

ゐ　蘭(名)　草の名。水草にて庭園などに進るもの。

ゐ　皆(名)　内膳の一つ。食物を受けて消化する機關。

ゐ　鴛(名)　箏の第十二の糸の名。

ゐ　威(名)　いきほひ。■ゐくわう。■げんまく。

ゐ　位(名)　くらゐ。

ゐ　偉(名)　大いなること。

ゐ　難(名)　とばり。■かたびら。■室内に下げたる幕。

ゐ　遺(名)　殘し置きたるもの。■忘れおきたるもの。■捨てたるもの。○「路に遺を拾はず」。

ゐ　違(名)　たがひ。■ちがひ。

ゐ　粟(名)　集めたるもの。○「字彙」「文選」

いひ　飯(名)　米を炊きたるもの。■めし。■ぼん。

いひ　樋(名)　■とひ。■水門。■堰より池の水を流れ出でしむる處。○拾遺「池をほりこめたる水の多かれば いひの日より餘るなるべし」

いひ　言(名)　言ふ事。○「人の物言ひ」「言ひのまゝに」

いひ　飯(名)　いはれ。■わけ。○「此の謂なり」

いひいひ　言々(名)　繰返し言ふ事。■さまざまに言ふ事。○拾遺「世の中をかくいひ〳〵のはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん」

いひいひて(句)　繰返し言ひて。■かたり〳〵して。■話し〳〵して。○源氏「あはれなる世をいひ〳〵て打ち泣きなども給ひけり」

いひいる　言入(他動下二段)　言ひ込む。○枕「夜一夜いひつる事の殘りを女の耳に言ひ入れ」

いひいだす　言出(他動四段)　言はんとする事を口に出だす。■發言する。

いひいづ 言出(他動下二段) 言ひ出だす。

いひばち 飯鉢(名) 飯櫃。

いひはる 言張(他動四段) 我説を主張する。

いひはつ 言果(他動下二段) 言ひ遂ぐる。●言ひおほせる。○夫木「いなば用いなさし遂にいひはてば流れて世にもすまじさう思ふ」

いひはなつ 言放(他動四段) 言うて仕舞ふ。●心中を殘さず言ふ。

いひはなす 言放(他動四段) いひはなつに同じ。

いひはやす 言囃(他動四段) 興あらしむるやうに言ふ。●喝采する。

いひぼ 飯粒(名) めしつぶ。

いひぼ 疣(名) いぼの原語。人の皮膚に生ずる贅肉。◎かたち飯粒を着けたるに似たる故に云ふ。

いひぼぐく (他動四段) 辯解する。●言譯する。

いひぼする 言通(自動四段) 辯舌よく語る。●筋道をよく心得て言ふ。○源氏「世のすきものにて物よくいひぼされるを」

いひぼす 言通(他動四段) 我意の達するまで言ふ。

いひどのふ 言調(他動下二段) 言葉を掛けて制御する。○源氏「わつかなる下人をも言ひとゝのへ」

いひとる 言取(他動四段) 思想を言語に寫し取りて表はす。

いひとよ 言散(他動四段) 梟の古名。(紀)

いひちらす 言散(他動四段) こゝかしこに言ひふらす。

いひぬける 言拔(名) いひぬける事。(俗)

いひぬける 言拔(他動下二段) 言語によりて危きを免かるゝ。(俗)

いひおとす 言落(他動四段) 惡く言ふ。●蔑視して言ふ。●言ひ下す。

いひおく 言置(他動四段) 言ひのこす。●跡に言葉を留むる。●遺言する。

いひおくる 言送(他動四段) 言ひやる。●申し遣はす。

いひおこす (自動下二段) 言ひ越す。●言うてよこす。●申し來る。

いひおき 言置(名) 言ひのこし。●遺言。

いひおもふ 言思(自動四段) 言ひもし思ひもする。●且つ思ひ且つ言ふ。

いひわたる 言渡(他動四段) 同じ事を言ひつゝ月日をわたる。○落窪「絶えずいひわたり給へど」

いひわたし 言渡(名) 申渡。●命令。●傳令。●宣告。

いひィわたす　言渡(他動四段)　目下の人に物を言ひ聞かす。●命ずる。●下知する。

いひィわづらふ　言煩(他動四段)　言ばんとして心を煩はす。●言ひ出し兼ぬる。○後撰「いひわづらひて止みにける人に」

いひィわく　言分(他動下二段。又四段)　言葉にて物の道理を分くるの意。●判斷する。●利害を附くる。○窓穢「我領ずる庄々はた多かれど誰かはいひわく人あらん」

いひィわけ　言譯(名)　いひひらき。●申譯。●辨解。

いひィわぶ　言詫(他動上二段)　言ばんとして心に窮する。●言ひ出し兼ぬる。

いひィがひィ　飯匙(名)　飯を盛る匕。●杓子。○伊勢「手づからいひがひ取りて食ごの器物に盛りけるを見て」(雅)

いひィがひィなし　(形。形狀言ク活)　言ひても詮のない。●役に立たぬ。●ふがひない。●うちのあかぬ

いひィかはす　(他動四段)　互に言ひ合ふ。●語り合ふ。●言葉にて約束する。

いひィかかり　言掛(名)　言ひ掛けたる勢に乘じて物事の進むを云ふ。○「いひがゝりになりて」

いひィかよふ　言通(自動四段)　文を以て情を通ずる。●艶書のやりとりする。○源氏「此姫君はかく人うとき御辭なれば睦ましくもいひかよひ給はず」

いひィかたらふ　言語(自動四段)　話し合ふ。●相談する。●雑談する。○大和「一日一夜よろづの事をいひかたらひて」

いひィかく　言掛(他動下二段)　(一)言ひ起す。●人に對して言ふ。●他人の無き事を有るやうに言ひなす。(二)二つの意味を一語に兼ねさせて言ふ歌學上の詞……たとへば「秋の野に人まつむしの聲すなり」といへば。人待つの待つを松虫の松に言ひ掛けたる詞なりといふの類。

いひィかくす　言隱(他動四段)　言葉を以て秘密をつくろふ。●其事の知れぬやうに語る。○源氏「見る人おくれたる方をば言ひ隱し」

いひィかまへ　言構(他動下二段)　色々と趣向を立てゝ言ふ。●前より思ひたくんで言ふ。○源氏「とかくいひかまへて尋ねてあひたり」

いひィかけ　言掛(名)　言ひ掛くる事。(一)言ひ起す事。

●人に對して言ふ事。●他人の無き事を有るやうに言ひなす事。(二)二つの意味を一語に兼ねさせて言ふ事。○「人まつむしは待と松とを言掛にしたる詞なり」

いひかへす 言返(他動四段) 繰返し言ふ。●日答へする。●返論する。●抗論する。

いひよる 言寄(他動四段) 語りつゝ近づく。●戀人に言葉をかはして接近する。○源氏「物やいひよらましとおぼせど」

いひたつ 言立(自動四段) 言ひ起す。●企て言ふ。

いひたつ 言立(他動下二段) 其事が成就するやうに言ふ。●專に其事を述ぶる。

いひたて 飯蛸(名) 蛸の種類。

いひたて 言立(名) 述べ立つる事。●目實にして言ふ事。

いひたゆ 言絶(自動下二段) 言ひ掛りたる事の中絶する。……おもに男女の間の疎遠になる事に云ふ。○詞花「いひたゆてのち年月を經て」

いひだす 言出(他動四段) いひいだすの近體。

いひそむ 言初(他動下二段) 言ひはじむる。●初めて發言する。○枕「さばれいひそめてし事は さて固うあらがひつ」

いひそやす (他動四段) いひはやすに同じ。

いひそす (他動サ變) そすは進むの意とも過すの意とも いひ。愁殺などいふ殺の字音より出でたりともいひて語原詳ならず。唯言ふを強めたる詞と見るべし。○源氏「我だけくいひそし待るに」

いひつたふ 言傳(他動下二段) 昔から今まで語り傳ふる。●甲から乙に傳言する。

いひつたへ 言傳(名) 言葉にて語り傳へたる事。●傳說。●傳聞。

いひつづく 言續(他動下二段) 絶えずに語る。●のべつに話す。●一々に語り立つる。○源氏「又西の國の面白き浦々磯の上をいひつゞくるものありる」

いひつらぬ 言列(他動下二段) 言ひならぶる。●一々語り立つる。○千載「心に思ふ事を詞にまかせていひつらぬる」

いひづらふ (他動四段) 論ずる。(萬葉)

いひつむ 言詰(他動下二段) 極點まで言ひ述ぶる。

いひつのる 言募(他動四段) 言ひ張る度の高まって來る

いひィつく

言附(他動四段)　言ひ寄る。●話しかくる。○古今「道にあへりける人の車に物をいひつきて別れける所にて」

いひィつく

言附(他動下二段)　(一)命令する。申し附くる。(二)告口をする。●いっつける。

いひィつぐ

言繼(他動四段)　(一)昔から今まで語り傳ふる。(二)甲から乙に傳言する。(三)語り續くる。

いひィつけ

言附(名)　命令。

いひィなほし

言直(名)　言ひ改むる事。

いひィなほす

言直(他動四段)　言ひ改むる。●よき方に言ひかふる。

いひィながす

言流(他動四段)　語り廣むる。●世に言ひふらす。○狹衣「此事により山林に入りにけりといひながされん世の音聞もいと物ぐるほし」

いひィなづけ

(名)　(一)幼少の時より男女互に婚姻を約しおく事。(二)未來の婚姻を約したる男もしくは女。

いひィならはし

言習(名)　いひならはす事。

いひィならはす

言習(他動四段)　世人一般に言ひ慣らす。●誰も皆言ふ。

いひィならぶ

言並(他動下二段)　あれやこれやと並べ立て語る。●比較して言ふ。

いひィなぐさむ

言慰(他動下二段)　言葉を以て人を慰むる。

いひィなす

言成(他動四段)　左も無き事を言語にて其れにして仕舞ふ。○源氏「度々の御方たがへに事づけ給ひしさまを。いとよう言ひなし給ふ」

いひィむかふ

言逆(他動下二段)　言ひさからふ。●抵抗する。●さかねぢをくはす。○狹衣「かくな當にいひむかへ給ひそ。時々は我だにあはれとのたまへ」

いひィののしる

言騷(他動四段)　言ひさわぐ。○源氏「いよ〳〵聞きものにいひの〳〵しる」(雅)。

いひィくろむ

言黑(他動下二段)　言ひまぎらはす。●言葉でごまかす。

いひィくたす

言朽(他動四段)　言ひこなす。●他の話を茶にする。●罵詈する。○枕「物語などするに我知りたりけるほふと出で言ひくたしなどする。いとにくし」

いひくだす　言下（他動四段）　悪く言ふ。●言ひ落す。

いひくらぶ　言比（他動下二段）　比較して言ふ。

いひくらす　言暮（他動四段）　言うて日を暮らす。●朝から晩まで其事のみを言ふ。

いひくんず　言屈（自動サ變）　言葉にあらはして屈托する。●ふさいで語る。○枕「昨日さばかり有りけんものを。夜の程に消ねぬらん事を言ひくんずれば」

いひくむ　言ひくんずれば」（他動下二段）　小兒の口へ食物を嚙みてくゝまするやうに言ひ聞かす。

いひぐさ　言草（名）　〔一〕言ふことの種。〔二〕ことわざ。

いひやる　言遣（他動四段）　言うて遣る。●言ひ送る。●申しつかはす。

いひやぶる　言破（他動四段）　說破する。●論破する。●言伏する。

いひばし　言廻（名）　言ひまはす事。●工夫したる言葉の使ひ方。

いひまはす　言廻（他動四段）　うまく言ふ。●言ひ方を工夫して語る。

いひまつはす　言纏（他動四段）　附きまとひて口を出し世話をする。○空穗「誰かいひまつはし知らせん」

いひまへ　言前（名）　言ひ方。●口實。

いひまず　言交（他動下二段）　言葉を交ふる。●他人の言の中に口を出す。○源氏「かゝる事にはにくさかしらも言ひ交ぜて」

いひけ　飯笥（名）　飯を盛る古代の器。……今の飯櫃。

いひけつ　言消（他動四段）　いひけすに同じ。

いひけす　言消（他動四段）　他の話を語り消す。●人の言ふ事を無にする。

いひふるす　言舊（他動四段）　言うて舊き話にする。○狹衣「かれてよりめづらしかるべき事に天の下いひふるしつれど」

いひふらす　言觸（他動四段）　言うて世の中に廣まらしむる。

いひぶん　言分（名）　論じ言ふべき點。●申分。

いひふくむ　言含（他動下二段）　小兒の口に食物を嚙みて含ませるやうに言ひ聞かす。

いひふす　言伏（他動下二段）　言葉でやりこめる。●論破して相手を屈伏さする。

いひごと　言事（名）　言ふ事柄。●いひぐさ。●話の種。

○大鏡「其頃のいひごとにしけるは」謠曲「うたての人のいひごとや。あの松こそは行平よ」

いひこしらふ（他動下二段）　すかしなだめて平和ならしむる。●機嫌を取る。●だまして置く。○源氏「はてくは腹立つな萬に言ひこしらへて」

いひあひ　言合（名）　言ひ合ふ事。●口論。●口喧嘩。

いひあり　飯蟻（名）　飯にたかる蟻の意。◎赤蟻の一名

いひあはせ　言合（名）　言ひ合する事。●相談。●熟議

いひあはす　言合（他動四段）　相談する。●相議する。

いひあかす　言明（他動四段）　語り明かす。●終夜語る

いひあつ　言當（他動下二段）　言ひ當てる。

いひあつかふ　言扱（他動四段）　朝晩取り扱ふ言葉を爲る。●言ひぐさにする。●世の評判ばなしにする。○榮花「世の人口やすからず。さまざまいひあつかふもいかゞと」

いひあらはす　言顯（他動四段）　言葉に出して言ふ。●秘密を顯はして語る。●明言する。●說明する。

いひあふ　言合（他動四段）　互に言ふ。●口論する。●口喧嘩する。

いひあさむ　言騷（自動四段）　言に出だして驚く。●驚き語る。

いひさわぐ　言騷（自動四段）　騷がしく言ふ。●大そうらしく言ふ。

いひざま　言樣（名）　言ひやう。●物言ふ樣子。

いひさす（他動四段）　言ひかけて中止する。○伊勢「いひさして止みにけり」

いるき　異域（名）　外國。

いいざり（名）　虫の名。……秋の半より壁の間などに居て。雄は鳴き雌は鳴かぬ虫。こほろぎの異名。

いひざり　飯桐（名）　桐の種類。◎昔し此葉にて飯を包みたる事あるによりて名づく。

いひきる　言切（自動四段）　斷言する。

いひみだる　言亂（他動四段）　言ひ亂す。●論破する。●妨げ言ふ。●まぜかへす。○源氏「かばかりにしそめつるをいひみだるも物しと思ひて」（雅）

いひしろふ（他動四段）　互に言ひ合ふ。●語り合ふ。○源氏「いかに聞ねんなどいひしろふべかめれど」

いひィしる　言知(自動四段)　言ひ方を知る。●よく言ひ吐ふる。○年中行事歌合「右もたけ高く詞いひしりて宜しく侍れども」

いひィしたたむ　言認(他動下二段)　口を出して取りまとめる。●處置を附ける。●手ぬけなく世話をする。○源氏「かの人の有るべきさまにいひしたゝめて」

いひィしたみ　飯蘿(名)　昔し飯を炊く時に甑(こしき)の底に敷きたる竹の簀。(和名抄)

いひィしらぬ　言ひ知らぬ(形)　言ばうやうもなき。●言ひやうも知らぬ。●言ばん方もなき。●名狀も出來ぬほどの。●言外なる。○千載「をしみかねけにいひしらぬ別れかな」

いひィしらず　言ひ知らず(副)　言ばうやうもなく。●言ひやうも知らず。●言ばん方なく。●名狀も出來ぬほど。●言外に。○空穗「藤の花の繪かきたる御屏風ども立てわたしいひしらず清げなり」

いひィひろぐ　(他動下二段)　言ひ廣むる。●言ひふらす。●ばっと言ひ散らす。

いひィびつ　飯櫃(名)　めしびつ。

いひィひらく　言開(他動四段)　言うて子細を明白にする。●申譯をする。

いひィひらき　言開(名)　言ひ開く事。●言譯(いひわけ)●申譯。

いひィもよほす　言催(他動四段)　言葉にてそゝのかす。●誘導する。

いひィもてゆけば　(句)　段々と言うて見ればの意。○源氏「いひもてゆけば只みつからの意りになん侍る」

いひィすつ　言捨(他動下二段)　言ひたる儘に捨ておく。……答を要せざるを云ふ。○謠曲「げに言ひ捨つる言の葉までも心ありげに聞ゆるゞや」

いひィすぐ　言過(他動上二段)　言ひ過ぎる。●言ひすごす。●餘計に言ふ。

いひィすぐす　言過(他動四段)　いひすごすに同じ。

いひィすごし　言過(名)　いひすごす事。●いひすぎ。●過言。

いひィすごす　言過(他動四段)　餘計に言ふ。●言ばでもよき事まで言ふ。

いひィすて　言捨(名)　言ひ捨つる事。●言ひたるまゝに捨ておく事。

いひィすぎ　言過(名)　言ひ過ぐる事。……いひすごしに

同じ。

いひイずし　飯鮓(名)　飯にて作れる鮓。……魚の鮓なとに對して云ふ。

いろ　色(名)　〔一〕光線の作用に因りて目に映ずる青黄赤白黒等の類。〔二〕顔の色。○宇治「女うち見るまゝに色をたがへて」〔三〕いろつや。●美麗。○夫木「花を見る道のほとりの古狐かりの色にや人まよふらん」△(形)—いろなる。○濱松「髪は少し色なるが」(副)—いろにて。○源氏「御ぐし色にて柳の糸のやうに」〔四〕赤き色を云ふ。……おもに裝束などに云ふ。○「色入りの唐織」「色なしの扇」〔五〕色情。●男女の愛情。○「色を好む」「色の道」〔六〕好色。●あだっぽい心。○源氏「またきより色におはしまして忍びありきいみじうせさせ給ふ」空穗「色なる娘」〔七〕定式の色あるが故に◎喪服を云ふ。●又その服の鈍色(にびいろ)。○源氏「女房もかの御形見の色かへぬもあり」清輔集「美福門院うせ給ひて後さるべき人々みな色になれる事を思ひて」〔八〕昔は其位官により勅許を得ざれば着用せられざる服色あり。之を云ふ。—禁色(きんじき)に同じ。○伊勢「昔し朝廷おぼして仕う給ふ女の色ゆるされたるありけり」〔九〕品。●種類。○新古今「おしなべて思ひし事の數々になほ色まさる秋の夕ぐれ」

いろ　(名)　〔一〕身内の親しきものを呼ぶ詞。○「いろは」(母)「いろせ」(兄)「いろど」(弟)「いろれ」(姉)「いろも」(妹)〔二〕色男。●情郎。●色女。●情婦。●戀人。○「色を一人持つ」

いろ　倚廬(名)　喪中引き籠り居る所。○徒然「諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ。倚廬の御所のさまなど。板敷を下げ葦の御簾をかけ云々」

いろいろ　色々(名)　〔一〕種々の色の混りたるを云ふ。○「秋の野の色々」〔二〕種々。●樣々。△(形)色々の。(又)—色々なる。(副)—色々に。(又)—色々と。

いろいろと　(副)　泣く聲。●ほろ〳〵と。●おい〳〵と。○宇治「僧都いろ〳〵と打ちなきて」

いろいろおどし　色々威(名)　色々の絲もて威したる鎧

の名。

いろいろごろも　色々衣(名)　はぎ〳〵の着物。◉ぼろぎぬ。

いろいろし　(形。形狀言シク活)　いろめきたる有樣。○十訓「いみじく色々しく」

いろいり　色入(名)　赤き色の交りたるものを云ふ。……おもに裝束等に云ふ詞。○「色入の唐織」

いろは　母(名)　いろ(親しき)母の意。◎ぱゝ。◉慈母。

いろは　以呂波(名)　〔一〕いろは假名の略。〔二〕いろは歌の略。

いろば　(名)　子供が手習の初歩にいろは假名を用ふるより起りて◎初歩◉入口。○「戀のいろば」

いろはぼたん　以呂波牡丹(名)　牡丹の一種。

いろはわけ　以呂波分(名)　頭文字をいろはうた四十七文字によりて分類する事。……字引などの如く多くの詞を分類する時に用ふ。

いろはがるた　以呂波加留多(名)　いろはだどへを書きたる加留多。

いろはがな　以呂波假名(名)　いろは歌を習ふ時用ふる文字ゆゑに◎平假名を云ふ。

いろはだどへ　以呂波喩(名)　以呂波の四十七文字を頭に置きて作りたる諺の文句。……「いぬもあるけば棒にあたる」「ろんより證據」「ばなよりだんご」の類。

いろばな　色花(名)　赤黃白紫などに咲きたる木草の花を云ふ。……榊樒等を神佛に手向くるをも花といふに對したる詞なり。

いろはうた　以呂波歌(名)　涅槃經といふ經文中の四句の偈を四十七文字に和譯せし歌。すなはち「いろはにほへと。ちりぬるを。(色葉香へど散りぬるをの意にて原語是生滅法の譯)わかよたれそ。つねならむ。(我世誰ぞ常ならんの意にて。諸行無常の譯)うゐのおくやま。けふこえて。(有爲の奧山今日越えての意にて生滅々已の譯)あさきゆめみし。ゑひもせす(淺き夢見じ醉ひも爲すの意にて寂滅爲樂の譯)是なり。此歌つひに世間に弘まりて子供の手本には必ず用ひらるゝ事となれり。作者は弘法大師なりと言ひ傳ふ。

いろはじゅん　以呂波順(名)　頭文字をいろはうたの順

番によりてならぶる事。……物の順序を立つる時一二三の番號の代りに用ふ。

いろはじびき　以呂波字引(名)　いろはうたの順序によりて頭文字を引くやうに仕組みたる字引。‖假名字引に同じ……畫字引に對して云ふ。

いろはびき　以呂波引(名)　いろはわけにもせよいろはじゅんにもせよいろはうたの順序によりて其頭字の在りごころを見出せるやうにする事。……五十音の引方もしくは番號の引方に區別して云ふ。おもに字引などに用ふるもの。

いろぼうしがみ　色奉書紙(名)　色を着けて漉きたる奉書の紙。

いろど(名)　弟。●妹。

いろどり　彩(名)　彩色。●着色。

いろどり　色鳥(名)　種々の鳥。

いろどりのこ　色鳥子(名)　色鳥子紙の略。

いろどりのこがみ　色鳥子紙(名)　色を着けて漉きたる鳥の子の紙。

いろどる　彩(他動四段)　色を取るの意。◎彩色する●着色する。●染むる。

いろどるつき(名)　陰曆九月の異名。◎木々の葉の彩色せらるゝ故に云ふ。

いろどころ　色所(名)　風俗の遙靡なる所●遊廓など多き地方。

いろり　圍爐裡(名)　床を切り下げて造りたる爐。

いろわけ　色分(名)　〔一〕彩色して區別する事。〔二〕種類を分くる事。●分類。

いろか　色香(名)　〔一〕よき色とよき香と。○古今「よそにのみあはれとゞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」〔二〕容色●美貌。○「色香に迷ふ」

いろがは　色革(名)　色つけたる革。‖染革に同じ。

いろがはり　色變(名)　〔一〕普通の色と變りたる事。〔二〕色變りの衣服。……婚義などに用ふるもの。

いろがみ　色紙(名)　種々の色に染めたる紙。……七夕祭の短册などに用ふる種類の紙にて赤きも青きも黄なるも綠なるもいろ〳〵あり。

いろがひ　色貝(名)　貝の名。〔一〕かうぶす。高麗貝。〔二〕紅貝の一名。横貝などいふ貝。

いろだま　色玉(名)　石榴の一名。

いろそふッ　色添(自動四段)　物事の重なり加はる。○玉葉「あはれもいとゞ色そふさまに言ひおこせて侍りける」

いろづく　色附(自動四段)　色の着きて見ゆる。●色が出る。○夫木「志賀の浦なちの濱田のかりしほに色づく見れば秋立ちにけり」謠曲「面も色づくか。赤きは酒のとがゞ鬼とな思しそよ」

いろつや　色艶　色と艶と。●つやゝしき色。

いろつけやき　色附燒(名)　醬油にて色を附けて燒く事。……料理の詞。

いろね　(名)　姉。●兄。

いろね　色音(名)　物の色と物の音と。……花鳥に多く用ふ。

いろなほし　色直(名)　婚禮の夜。式終りて嫁が白の小袖より色ある小袖に着替ふる事。

いろなぐさ　色無草(名)　松の異名。◎綠の外に色の變らぬ故に云ふ。

いろなし　色無(名)　赤き色の交らぬものを云ふ。……おもに裝束等に云ふ詞。○「色無の絹」

いろふッ　(他動下二段)　色合ふの意。●彩色する。●色美しく見する。○竹取「くさ〻の瑠璃をいろへてつくれり。○平家「いろへたる直垂」(雅)

いろふッ　(自動上二段)　前と同じ語原にて◉美しく見ゆる。●目移りがする。○源氏「何事にも目のまがひいろふ」(雅)

いろふッ　(他動四段)　手にて取扱ふ。●關係する。●口を出す。●いぢる。○正統記「今の莊園などゝて傳ふる如く國司にいろはれずして傳へける」

いろふッ　(他動四段)　いなむ。●辭する。

ゐろう　遺漏(名)　漏れのこる事。●脫漏せし事。

ゐらう　慰勞(名)　勞力を慰むる事。●いたはる事。○「慰勞の宴」△(動)―慰勞す。

ゐらう　遺老(名)　長く生きのこりたる老人。

ゐろく　位祿(名)　位によりて百官に賜はる祿。……中古の制なり。

いろくづ　鱗(名)　〔一〕魚のうろこ。＝うろくづに同じ。〔二〕魚類。○山家集「水ひたる池にうろほふ滴りを命に賴むいろくづや誰れ」

いろぐるひイ　色狂(名)　發狂するほど色に溺るゝ事。

いろくさ　色草(名)　種々の草。

いろくさ　(名)　いろ〳〵くさ〴〵のもの。◎樣々の種類。○源氏「秋の花を植ゑさせ給へる事常の年よりも見所おほくいろくさを盡して」

いろけ　色氣(名)　〔一〕色合に同じ。〔二〕色情。◎春情。

いろぶみ　(名)　好色上の手紙。◎艶書。

いろふし　色節(名)　晴れなる事。◎面目ある事。○徒然「萬の物の綺羅飾り色節も夜のみこそめでたけれ」(雅)

いろこ　鱗(名)　うろこの古言。＝いろくづに同じ。○記「いろこのごと造れる宮あり」〔二〕頭のふけをいふ古言。

いろごろも　色衣(名)　〔一〕種々の色の衣服。〔二〕美しき色の衣服。「三〔二〕正月元日の裝束。○源氏「あまた年今日あらためし色衣着てば涙ぐ降る心地する」

いろごと　色事(名)　色情の行爲。◎房事。

いろごとし　色事師(名)　〔一〕俳優の中にて專に艶事のみ演するものをいふ。……芝居の詞。〔二〕色情界の通人。

いろごがた　鱗形(名)　うろこがたに同じ。◎鱗の形の模樣。……北條家の紋。

いろごのみ　色好(名)　好色。◎女すき。○伊勢「天の下の色好み源のいたるといふ人」兄。

いろえ　(名)

いろゑ　色繪(名)　彩色したる畫。

いろあヤひイ　色合(名)　色の工合。◎色の配合。○枕「りんだうはいと花やかなる色あひにて」

いろあそび　色遊(名)　放蕩。◎遊興。

いろあげ　色揚(名)　褪めたる色を再び染め直す事。

いろざと　色里(名)　色を賣る里。◎遊廓◎花街◎遊女場。

いろざめ　色褪(自動下二段)　色のわるくなる。◎色のかはる。

いろざま　色樣(名)　色の有樣◎色合。(雅)

いろざけ　色酒(名)　色里にて飲む酒。

いろざくらぎ　色榮螺(名)　榮螺の一種。＝こしきさゝにに同じ。

いろざし　(名)　〔一〕色のさしたる加減の意。◎色の樣子。◎色合。〔二〕色をさし加へたるの意。◎着色。◎彩色。

いろぎ（名）刺木の意。◎棘のある木。（雅）

いろきちがひィ 色氣違（名）〔一〕色情に因りて發狂する事。〔二〕色情に因りて發狂する人。

いろきらず（名）雪の異名。雪花菜に似たるよりいふ。（吳竹集）

いろめ 色目（名）〔一〕色合。●色の配合。……おもに中古衣服の重ね色に云ふ。○〔二〕色氣を帶びたる目遣ひ。

いろめかし 色めかし（形。形狀言シク活）いろめきたる有樣。●あだっぽい。●うはゝしい。●色氣たっぷりな。○榮花「かの北の方は御形も心もをかしう。色めかしうさへおはしければ。かゝる事はあるなるべし」

いろめく 色めく（自動四段）〔一〕色美しく見ゆる。●色に出づる。●色づく。○隆信集「色めかん秋ちかくなる女郎花」保憲女集「もみぢ葉は色めく秋にあきりして」〔二〕色にあらはるゝ。●景色づく。●景氣づく。●樣子の見ゆる。○「色めき立つ」〔三〕好色らしく見ゆる。●うはゝしくしたる。○源氏「色めいたる御心には」

いろめき（名）好色らしく見ゆる事。●あだゝしき心。●うはき。○榮花「大納言殿は例の御心の色めきはむつかしきまで思ひ聞え給へれど」

いろじろ 色白（名）肌の色の白き事。

いろしな 色品（名）種々の品物。

いろも（名）女の兄弟を親しみて呼ぶ詞。……通例は妹をいひ時としては姉をも云ふ。（雅）男の兄弟を呼ぶ詞。……通例は兄をいひ時としては弟をも云ふ。（雅）

いろせ（名）

いろどり 色摺（名）〔一〕彩色を入れて模樣を染め出したるもの。……裝束に云ふ。◎もとは木草の花を摺りつけて模樣とせしより起りたる詞。○「色摺の裳」〔二〕彩色を入れて印刷せしもの。○「色摺の石碑」「色摺の柱曆」

いは イワと發音する詞はすべていわの順序の處にあり。

いば 射場（名）弓を射る場所。

ゐはい 位牌（名）死者の名を記して祭る木牌。●牌。

ゐばい 違背（名）そむく事。●命令。法則。誓約等に違ふ事。△（動）—違背す。

いはひィもどほる （自動四段）いに發語にて遣ひ廻るの

意。萬葉「鶏なすい這ひ廻ほり」

いはじめ　射場始(名)　射場殿にて年の始に弓射はじむる儀式。……中古禁中の御式の一つなり。

いばどの　射場殿(名)　中古禁中におかれし弓射る御殿。

いばり　尿(名)　ゆばりに同じ。●小便。

いばりぶくろ　膀胱(名)　ゆばりぶくろに同じ。●小便袋。

ゐばる　威張(自動四段)　強き風を示す。●勢を張る。●たかぶる。

いはかせ　醫博士(名)　中古の官名。典藥寮に屬して醫術を教授する役。

いばら　薔薇(名)　香ある花の咲く灌木の名。‖ばら。せうびに同じ。

いばら　茨(名)　刺ある灌木の總名。○「いばらからたち」

いばらはす　茨蓮(名)　草の名。鬼蓮の一名。

いばらぼたん　茨牡丹(名)　庚申薔薇の一名。◎花は牡丹に似て莖葉に茨を持つの意。

いばらたけ　茨竹(名)　竹の一種にして茨あるもの。

いばらきうどん　茨城饂飩(名)　細く切りたる饂飩の名。

いばらせうび　茨薔薇(名)　薔薇に同じ。

ゐはん　違犯(名)　法令に違ふ事。△(動)—違犯す。

いばん　夷蠻(名)　ゐびす。●東夷南蠻。‖夷狄に同じ。

ゐはく　威迫(名)　威し迫る事。△(動)—威迫す。

ゐばやし　居囃子(名)　すわりたるのみにて舞をせざる能樂の囃子。……囃子の處を見よ。

いばゆ　嘶(自動下二段)　馬のなくを云ふ。‖いなゝくに同じ。

ゐばしょ　居場所(名)　居る場所。

ゐねうう　圍繞(名)　取り圍む事。●とりまく事。△(動)—ゐねうす。○謠曲「釋迦如來獅子の座にあらはれ給へば。普賢文殊左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し。砂の上には龍神八部おの〳〵拜しゐねうせり。

ゐにん　委任(名)　委ね任する事。△(動)—委任す。

ゐにんじょう　委任狀(名)　委任する旨を記したる證書。

いにしへ　古(名)　往にし方の意。◎過去の時。●むかし。●往古。●古代。

いにしへまなび　古學(名)　古典の學問。●古史古文古歌等を研究する事。

いにしへぶり　古風(名)　〔一〕昔の風俗〔二〕古體の歌文

いにしへびと　古人(名)　昔の人。●こじん。

いほ　イホと發音する詞はすべていをの順の處に

いぼ 疣(名) あり。人の皮膚に生ずる小さき贅肉。◎其形の飯粒に似たる故の名。

いぼいし 疣石(名) 石の名。岩壺の事。

いぼにし 疣螺(名) 貝の名。＝岩螺に同じ。

いぼぢ 疣痔(名) 病の名。痔疾の一種にして肛門の邊に疣の如きもの〻出來るもの。

いぼり (名) 水蒸氣の雲霧を爲りて立ちたるもの。●靄。○視詞式「高山のいぼり短山のいぼりをかきわけて聞しめさむ」

いぼがへる 疣蝦(名) 體に疣ある蛙の一種。蝦蟇。

いぼたけ 疣茸(名) 菌の名。しめぢたけの一種。◎發生の初め疣の形に似たる故の名。＝いぼしめぢに同じ。

いぼだひ 疣鯛(名) 魚の名。形は鯛に似て背の上尖り疣の如く鱗は白く光りて稍や赤色あり。●異名は……ねぼだひ。●豆の葉鯛。●油子鯛。●いぼぜ。

いぼん 異本(名) 同物異種の本。●他の本●別本。●一本。

ゐぼん 違犯(名) 法津に背く事。

いぼむし (名) いぼむしりの略。

いぼむしり (名) 蟋蟀の異名。

ゐはう 位袍(名) 古代官吏の位階によりて定式の色に染めたる袍。……大寶令の定めは一位二位深紫。(茄子色)三位淺紫。(今の紫)四位深緋。(熟菓の色)五位淺緋。(今の緋)六位深綠。(松葉色)七位淺綠。(今の萌黃)八位深縹。(紺)初位淺縹。(今の空色)なりしが樣々の變遷ありて一條天皇頃より後は。四位以上みな黑く染めたるを用ひ。五位は赤となりたり。

いはう 異邦(名) よそのくに。●異國。●外國。

ゐはふ 違法(名) 〔一〕法式に違ふ事。〔二〕法令に違ふ事。

ゐばう 遺忘(名) 忘るゝ事。●失念。●忘却。

いはふぬの 異法布(名) 鎧を造るに用ふる一種の布。

いぼうじり (名) 蟋蟀の異名。◎いぼむしりの音便。○散木「ひきかへの手の殊の外に小さくて得ひかざりしかばいぼうじりとつけて笑ふほどに」

いはうじん 異邦人(名) 異國の人。●外國人。

いぼく 以北(名) 其處より北の方角。○「東京以北の地」

いぼく 異木(名) 珍奇なる樹木。

ゐぼく 遺墨(名) 死後に遺りたる筆跡。……書にても畫にても。

いぼくさ 疣草(名) 水邊に生ずる草の名。夏の頃薄紫の花さく草にて疣を治するの功あり。故に疣取草とも云ふ。

いぼくさぎ 疣鷺(名) 鳥の名。さやつきどりの一名。

いぼゆひィ 疣結(名) 繩紐などの結び方の名。先きを出して結びたる處が疣に似たる故に云ふ。

いぼじりむし (名) 虫の名。いぼむしりに同じ。

いぼしめぢ (名) 菌の名。疣茸に同じ。

いへ イエと發音する詞はいえの順序の處に出だす。

いへん 異變(名) 通例と變りたる事。

ゐへん 違變(名) 約束を違ふる事。●違背。●違約。

いへう ヒョウと發音する詞はいひの順序の處に出だす。

いと 糸(名) (一)細く長きものゝ總名。○「絹の糸」「木綿の糸」「麻の糸」「琴の糸」(二)絹糸の略○「糸入二子」「糸織」

いと (名) 豆納豆をいふ御殿女中の詞。◎粘液の糸を引く故の名なり。糸引納豆に同じ。

いと (名) いとしき人の意。◎京大坂などにて娘を云ふ。○「隣のいとさん」

いと (副) いたくと同じ詞に用法ては稍や輕し。◎甚だ。●よほど。●大そう。●ひどく。●えらう。●きつう。●至つて。●ごく。○伊勢「波のいと白く立つを見て」源氏「若君はいとも〳〵うつくしげにて」新千載「花だにも散らで別るゝ春ならばいとかく今日は惜まざらまし」

いど 異土(名) 異なりたる土地、●異鄉。●異國。●他鄉。●他國。

ゐど 井戸(名) もとは井處の意。今は唯井と同じ事に用ふ。

ゐど 緯度(名) 地理學上赤道に並行して東西に引きたる想像線。其數九十あり。赤道を零度とし。南緯幾度北緯幾度と數ふ。故に緯度の同じき地は寒暖の度大概相同じく。緯度高ければ從つて寒氣強しと知るべし。

いとひィ 厭(名) 厭ふ事。●いやがる事。●忌み嫌ふ事。

いといり 糸入(名) 絹糸入の意。◎木綿糸に絹糸を少し交ぜて作りたる織物。

いといんげん 絲隱元(名) 隱元豆の莢を細く刻みたる

もの。……料理の詞。

ゐどばた 井戸端(名)　井戸の傍。

いとはぎ 糸萩(名)　枝の細く枝垂れたる萩。

いとばす 糸蓮(名)　草の名。雪の下の一名。

ゐどほり 井戸堀(名)　井戸を堀る事を職とする人。

いとへん 糸偏(名)　紅。絹。綿。紀等の漢字の左半分を云ふ。

いとど (副)　いと(甚)を重れたる詞にはあれど用法は同じからず。物のあるが上に更に加はるの意。◎一層。●一しほ。●一きは。●一段。○源氏「もとより荒れたりし宮の内いとゞ狐のすみかになりて」新後撰「いとゞ又光や添ほん白露に月まちいづる夕顔の花」

いとどし (形。形狀言シク活)　いとゞに同じ意味。◎一層。●ひとしほ。●ひときは。●一段。●いやが上に。……此詞は句を隔てゝ意の續く事多し。下の第一第二の例を見よ。○伊勢「いとゞしく過ぎゆく方の戀しきに」羨ましくもかへる波かな」(左なきだに過ぎ來し故郷の戀しき處に一層羨ましさを添へて波が立ちかへるの意)「後撰いとゞしく物思ふ宿の萩の葉に」秋と告げつる風のわびしさ」(左なきだに物思ふ宿なるに一層かなしさを添へて風が秋を告げ來るの意)源氏「道いと露けきにいとゞしき朝露に」(是は直に下の詞に續きたり)

いとおどし 糸威(名)　糸もておどしたる鎧。……革威に對して云ふ。

いとおり 糸織(名)　絹のより糸にて織りたる織物。

いとおりめ 糸織女(名)　糸織を爲す工女。

いとおりひめ 糸織姫(名)　七夕に祭らるゝ女の神。●織女(しょくじょ)＝おりひめに同じ。

いとほし (形。形狀言シク活)　いたはしより來る詞。◎〔一〕あはれなり。●ふびんなり。●愍然なり。●氣の毒なり。●かわいそうなり。〔二〕愛らし。●かわゆし。●いとしい。●おいとしい。(雅)

いとほしむ (他動四段)　いとほしく思ふ。●かわいそうに思ふ。○山家集「我のみぞ我心なばいとほしむあはれむ人のなきにつけても」

いとわく 糸矍(名)　絲を捲きつくるわく。

いとばし 厭(形。形狀言シク活)　厭はるゝ有樣。●忌み嫌

はるゝ有樣。●いやに思はるゝ。○新古今「厭ひても猶いとはしき世なりけり吉野の奥の秋の夕ぐれ」

いとがひィ 糸貝(名) いとかけがひの一名。

ゐどがはッ 井戸側(名) 井戸のまはりの圍ひ。

いとがや 糸蚊屋(名) 草の名龍の鬚の事。

いとかけぼら 糸掛螺(名) 糸掛貝の一名。

いとかけがひィ 糸掛貝(名) 蜷に似て小さき貝の名。●又名見。をだまき。ねぢ貝等の名あり。

ゐどがへェ 井戸替(名) 井戸浚へ。

いとかさご 糸笠子(名) 魚の名。笠子魚の一種。

いとより (名) いとよりだひの略。

いとよりだひィ (名) 其形鯛に似て細く。尾の上端に長き絲ある魚。●異名は……糸魚。●いとめ魚。●べにさこ。●糸くり魚。●いとより。

いとよりぐるま (名) 絲によりをかくるための車。

いとよりめ (名) 絲をよるを務とする女。

いとたけ 糸竹(名) 琴琵琶の如き糸の樂器と笛篪篳篥の如き竹の樂器とを云ふ。◎管絃。●音樂。●雅樂。○夫木「立ちかへる雲井の庭の神あそび糸竹の音も月にすみけり」

いとだて 糸縱(名) 麻糸を縱にして織りたる筵。

いとだて 糸楯(名) 絲を入るゝ紙の袋。◎糸疊ずなはち糸を入るゝ疊紙の意か。

いとそこ 糸底(名) 茶碗皿などの底の外部のところ。—糸尻。糸切に同じ。……糸切の處を見よ。

いとつつみ 糸裏(名) 細き麻糸にて捲きつめ其上に漆を塗りたる弓の名。

ゐどなはッ 井戸繩(名) 釣瓶繩に同じ。

いとなむ 營(他動四段) 〔一〕爲す。●勞働する。●はたらく。○源氏「物縫ひいとなむ」〔二〕用意する。●準備する。○月清集「千世經べき松さへ山を出でにけり春をいとなむ賤にひかれて」

いとなみ 營(名) 〔一〕仕業。●營業。●職務。勞働。○「世のいとなみ」「朝夕のいとなみ」〔二〕支度。●用意。●準備。○「春のいとなみ」「明日のいとなみ」

いとなし 暇無(形。形狀言シク活) 暇のない。●多忙。●休む間の無い。○後撰「日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは秋夕ぐれになればなりけり」

いとら（名）　鶉を云ふ。……通音よりの訛りなり。

いとらん　糸蘭（名）　草の名。＝紐蘭に同じ。

いどむ　挑（自動四段）　爭ふ。●競ふ。●競爭する。●張り合ふ。○源氏「人に挑む心にはあらで」「いどみ給ひし女御更衣」

いどむ　挑（他動四段）　催促する。●誘ひ出す。●おびきだす。○「戰を挑む」「女を挑む」

いとむし　糸蟲（名）　蟲の名。＝こほろぎの事。

いとふ（他動四段）　勿れと願ふ詞。●いやに思ふ。●いやがる。●愚み嫌ふ。●疎んじ嫌ふ。

いどう　異同（名）　異なると同じきと。●異なるか同じきか。○「異同を正す」

いたう　醫道（名）　醫學。●醫師たるの道。

いとうち　糸打（名）　絹糸にて組み合せたるもの。○「糸打の紐」「糸打の帶」

いとうり　糸瓜（名）　へちまの一名。

いとうを　糸魚（名）　魚の名。＝いさよりだひに同じ。

いとのたれ　糸垂（名）　芝居に用ふる鬘の名。

いとのくつ　糸沓（名）　しかいに同じ。

いとのきて（副）　いとゞしくに同じ。●一層。●あるが上に。○萬葉「いとのきて痛き傷に辛鹽を注ぐちふが如」

いとく　威德（名）　〔一〕威權と德望と。〔二〕威光と功德と……神佛に用ふ。○謠曲「威德ゞめでたかりける」

いとぐち　糸口（名）　〔一〕絲の一端。〔二〕物事の最初。●とりつき。●端緒。○「糸口を開く」

いとくり　糸繰（名）　糸を繰る業。又は其人。

いとぐり　糸栗（名）　栗の實を細く刻みたるもの。……料理の詞。

いとくりうを　糸繰魚（名）　糸より鯛の一名。

いとくりぐるま　糸繰車（名）　紡績器の一つ。糸を繰り取る車。

いとぐるま　糸車（名）　紡績の具。綿より糸を引き出し。又はよりをかくるに用ふる車。

いとぐつ　糸鞋（名）　糸にて造れる中古貴族の靴。＝糸鞋に同じ。

いとぐら　糸座（名）　三味線の糸卷を捲く所。

いとくらべ　糸競（名）　琴、琵琶。三味線の類を競爭して彈く事。○空穗「侍從の朝臣と糸くらべして」

いとや　糸屋（名）　絲類を賣る家。又は人。

いとや　井戸屋(名)　井戸堀に同じ。

いとやなぎ　糸柳(名)　糸の如く枝垂れたる柳。＝しだりやなぎに同じ。

いとやもの　糸屋者(名)　糸屋に召仕はるゝ職人。

いとま　暇(名)　〔一〕ひま。●閑暇　●用のなき時。○「半日のいとまを得て」〔二〕其事のために費すべき時間。○「いとまが入る」〔三〕免官。○免職。●退職。○「いとまを乞ふ」「いとまを取る」〔四〕忌服によりて引籠る事。●忌引。○空穂「御ぐしおろし給ひてかくれ給ひぬ。云々。かくて殿の公達大臣も御いとまになり給ひぬれば」〔五〕告別。○玉葉「鳥羽院に出家のいとま申し侍るとて」

いとまぶみ　暇文(名)　暇を乞ふ書面。●辭職の願書。

いとまごひィ　暇乞　〔一〕暇を乞ふ事。〔二〕別を告ぐる事。●辭表(雅)

いとまき　糸柾(名)　糸筋に似たる柾目。

いとまき　糸卷(名)　〔一〕糸を捲き置く道具。〔二〕三味線の糸を卷くところ。棹の上部にありて轉(てん)軫(しん)とも云ふ。〔三〕婦人の髪の結ひかた。櫛卷に似たるもの。

いとまきひとで　糸卷人手(名)　海産動物の名。角(かど)が五つありて人の手にも似。また糸卷にも似たる故に云ふ。

いとまし　(形)形狀言シク活)　桃み合ふ有樣。○源氏「よそよそにてこそはかなき事につけていとましき御心も添ふべけれ」

いとまごなし　暇申(名)　暇乞。●告別。(雅)

いとげ　糸毛(名)　〔一〕糸毛の車の略。〔二〕糸毛の鎧の略。

いとけ　幼氣(名)　をさなげなる事。△(形)—いとけなる。(副)—いとけに。

いとけなし　幼(形)形狀言ク活)　をさなし。●あどけなし。●幼稚な。

いとげのよろひィ　糸毛鎧(名)　糸にて威したる鎧の總名。緋おどし。卯の花おどし等の類。……革おどしに對して云ふ。

いとげのくるま　糸毛車(名)　昔し皇族貴族の用ひたる牛車の名。屋形に絲を茸きて飾とせしもの。

いとけし　幼(形)形狀言ク活)　いとけなしに同じ。

いとこ　從兄弟。從姉。從妹(名)　父母の兄弟姉妹の子人を親しみて呼ぶ詞。●愛らしき人。……英語のマイ、デヤに似たり。○萬葉「いとこ

汝兄の君」

いどころ 居所(名) 居る場所。●住居。

いとこに 從弟煮(名) 小豆の汁ににんじん・こんにゃく豆腐など入れて煮たるもの。◎おこさに(おことじる)の訛りにや。

いとこちがひ (名) 父母のいとこ。

いとこなば (名) 父母の從姉妹。(女性)

いとこなぢ (名) 父母の從兄弟。(男性)

いとこたほなば (名) 祖父母の從姉妹。(女性)

いとこたほなぢ (名) 祖父母の從兄弟。(男性)

いとこよめ (名) いとこの妻。

いとこんにゃく 糸蒟蒻(名) 蒟蒻を糸の如く細くせしもの。

いとごけ 糸苔(名) 深山の木に生じて毛の如く垂れ下る苔の名。……一名を霧藻とも云ふ。

いとこめ 從姉妹(名) いとこにあたる婦人。

いとこせ (名) 愛らしき夫の意。(神樂歌)

いとざより 糸鱞(名) 鱞を細く切りて糸の如くせしもの。……料理の詞。

ゐどざらへ 井戸浚(名) 井戸の掃除。●井戸替。

いとざくら 糸櫻(名) 糸の如く枝の垂れたる櫻の名。枝垂櫻に同じ。

いとさき 糸先(名) 糸の初物。……伊勢神宮に奉る時に云ふ詞。

いとさめ 糸雨(名) 糸の如き雨。●小雨。●細雨。(雅)

いときり 糸切(名) 糸底。糸尻に同じ。茶碗。皿などの底の外部をいふ。◎これを造る時轆轤より糸にて切り取りたる痕なればなり。

いときりば 糸切齒(名) 前齒と奥齒との間に位する齒。◎糸などを嚙み切る働きを爲す故に名づく

いときりだんご 糸切團子(名) 糸にて切りたる團子の名。糸切餅ともいふ。

いときりもち 糸切餅(名) 糸切團子に同じ。

いとけう 一團嬌(名) 雅樂の曲名。

いときなし (形。形狀言ク活) いとけなしに同じ。◎をさなし。●幼稚なり。●あどけなし。○源氏「いときなき初元結に長き世を契る心はむすびこめつや」

いとぎきやう 糸桔梗(名) 細く小さき花の咲く桔梗。姫桔梗に同じ。

いとゆふ 糸遊(名) 春日の晴れわたりたる時水蒸氣のちら〳〵と立ちあがりて糸の如く空に見ゆ

るを云ふ。●遊糸。●あそぶ糸。●陽炎。◎もとは漢語の遊糸より來れる詞なり。○六百番歌合「春くればなびく柳の友顔に空にまがふや遊ぶいとゆふ」

いとゆふ　糸結(名)　色々の糸の結び合はせたるもの。……中古貴女の裝飾に云ふ詞。

いとめ　糸目(名)　〔一〕糸の筋目。〔二〕凧の釣合を取る爲め骨に結び附くる糸。

いとめ　糸女(名)　糸繰り女。●糸取り女。○謠曲「綾女糸女の女婦を添へ」

いとめうた　糸目魚(名)　糸の名。…いとよりだひの事。

いどみ　挑(名)　爭ふ事。●競ふ事。●競爭。●張合。○榮花「劣らん勝らんのいどみ胸さわがしかるべし」

いどみわざ　挑業(名)　いどみごと。●爭ひごと。●競爭。(雅)

いどみつ　糸水(名)　糸の如く垂るゝ水。●雨滴。○堀川「五月雨の晴れせぬ頃は葦の屋の軒の糸水たえせざりけり」

いどみごと　挑事(名)　爭ひ。●競爭。●張合事。

いどし　(形。形狀言シク活)　いとほしの略。◎かわゆし。●愛らし。

いとしば　糸芝(名)　葉細くして絲の如き芝を云ふ。…姫芝に同じ。

いとじり　糸尻(名)　茶碗などの尻のところ。…糸切。糸底に同じ。……糸切の處を見よ。

いとひば　糸檜葉(名)　檜の一種。其葉細く下に垂るゝもの。故に一名を枝垂檜葉とも云ふ。

いとびん　糸鬢(名)　德川時代に流行したる男子の髮の結ひ方。兩鬢を細く殘して引きつめに結びたるもの。

いとびんやっこ　糸鬢奴(名)　〔一〕髮を糸鬢に結びたる男。〔二〕糸鬢に結びたる髮をも云ふ。

いとひきなっとう　糸引納豆(名)　納豆に同じ。◎一つづつ引離せばその粘液糸を引くもの故に云ふ。

いとすぢ　糸筋。縷(名)　糸の筋。●纖維。●小さき筋。

いとすぎ　糸杉(名)　杉の一種。枝葉の細く下に垂るゝもの。

いとすすき　糸薄(名)　葦葉花ともに細く糸の如き薄。

いち　市(名)　〔一〕商人の集りて賣買する事。〔二〕市をなす場所。●市場。●町。

いち（名）

いち 一（名）

齋女の略稱より來れる詞。◎神樂を舞ふ女。頭の髮の元結にて括りたる所より後の部分。○「いちが出すぎた」

いち（名）

草の名。いちぐさの略。

いち 一。壹（數）

〔一〕ひとつ。〔二〕或る。○「一日友を訪ひしに」〔三〕全體の意。●同一の意。○「平家の一門」「平等一樣……續く詞によりていつと變音す。○「一統」「一山」〔四〕樂器の絲の一番太き物。○「義太夫の一の糸」

他に擢んですぐれての意。○「いち早し」

いち 逸（形）（副）

ゐち 位置（名）

其物のあり場所。●其物のあるべき適當の場所。

いぢ 意地（名）

〔一〕こゝろ。●心意。〔二〕自信。●主我心。〔三〕剛愎。●我慢心。●强情。

ゐぢ 維持（名）

持ち續くる事。●保存。△（動）—維持す。

いちひィ 櫟。赤櫟（名）

いちゐ 一位（名）

櫟に似たる喬木の名。葉は樅柏に似て高さ一丈餘に達する木の名。あらゝぎ やまびゃくだん きゃらぼく等の名あり。昔は笏に作り又扇の骨にも作れり。

いちゐ 一位（名）

第一の位階。

いちいち

一一（副）

一つ毎に。●一つ〳〵に。●各個に。●おのおの。△（又）—いちゝに。

いぢいぢ（副）

いぢける有樣。●小心翼々たるさま。

いちひィがし 櫟樫（名）

木の名。櫟の事。

いちひィのかさ （名）

木の名。櫟に同じ。

いちら。ふ。 一薦（名）

其官の上席。●第一位を占むる人。

いちろうらく 壹弄樂（名）

雅樂の曲名。

いちろく 一六（名）

月の中の一と六との日。すなはち。朔日と六日 十一日と十六日。廿一日と廿六日を云ふ。維新前は此日を以て休日とせり。

いちは

一半（名）

雙六の目の名。○拾遺「すぐろくのいちばに立てる人妻のあはでやみなんものにやはあらぬ」

市場（名）

市の立つ場所。

いちは 一八（名）

いちはつに同じ。

いちはち 意地張る（自動四段）

意地を張る。●我意を通さんとする。

いぢばる

いちはつ 一八（名）

葉はひあふぎに似て花の形杜若に似て白く。紫色の斑點ある草の名。

いちばん 一番（名）

〔一〕一つがひ。●一組。○「相樸一

番」「歌合一番」……〔轉じては〕一曲。○能一番」〔二〕第一の順序。●最初。○謠曲「先づ一番には新開の次郎」△(副)「一番おもしろき話」△(又)一番に。○「一番に馳せ參じ」

いちばんどり 一番鳥(名) 〔一〕夜明けに第一に鳴く鷄。〔二〕一番鳥の鳴く時刻。

いちばんちゃ 一番茶(名) 最初に摘みたる茶。●最良の茶。

いちばんがっせん 一番合戰(名) 最初の合戰。

いちばんがけ 一番駈(名) 第一に敵中に突進する事。●先陣。●卒先。

いちばんぞなへ 一番備(名) 第一の備へとなしたる軍隊。

いちばんのり 一番乘(名) 第一に敵の陣兵線内に馬を乘り入るゝ事。●先陣。●一番乘。

いちばんぐさ 一番草(名) 第一回目の田の草取り。

いちばんくび 一番首(名) 最初に得たる敵の首級。

いちばんやり 一番鎗(名) 第一に敵陣中に鎗を突き入るゝ事。●先陣。●先登。

いちばんて 一番手(名) 第一に敵に對戰する兵。●先鋒。●先手。

いちばんめ 一番目(名) 第一番。○俗曲「一番目には壹岐の松」

いちばんず 一番酢(名) 釀造して最初に搾りたる酢。

いちはやぶ (自動上二段) 荒ぶる。●強くなる。

いちはやし (形。形狀言ノ活) 心にても所作にても極めて速きを云ふ。鋭敏。果敏。性急。火急。神速。迅速。などの意。○散木「ねち川に岩こす棹のとりもあへず落す筏のいちはやの世や」源氏「后の御心いちはやくてかたゞく思しつめたる事どもの報いせんとおぼすべかめり」

いちにち 一日(名) 〔一〕朝から晩まで。●終日。〔二〕一晝夜。

いちにち 一日(副) 終日。

いちにちのさい 一日齋(名) 一日間のものいみ。

いちにょ 一如(名) 眞如は一にして二ならざるの意。○謠曲「邪正一如と聞く時は色即是空そのまゝに」(佛)

いちにん 一任(名) 一任期。●任限中。○延喜式「凡そ一任の內」

いちにんたうせん 一人當千(句) 一人以て千人に敵し得る事。

いちにんまへェ 一人前(名) 〔一〕一人分。一人に對する量。〔二〕一人分たるの資格を具ふる事。○「一人前の男」

いちにんす 一任(他動サ變) 一切委任する。●ひたすらに任する。●全權を與へて處理せさする。

いちべい (名) 茜麻(いちび)の俗稱。

いちべいがら (名) いちびからに同じ。

いちべついらい 一別以來(句) 一度別れてより以來。

いちど 一度(名) ひとたび。●いっぺん。●一回。

いちどに 一度に(副) 同時に。●いちどきに。

いちどう 一同(名) 全體。●總體。●悉皆。

いちどき (名) 同時。

いちどきに (副) 同時に。●いっしょに。

いちぢ 市路(名) 〔一〕市を立つる場所。〔二〕市に通ふ路。

いちぢャウ 一定(名) 必定。屹度。確實。△(形)—一定の。(副)—一定。

いちでウ 一條(名) 一件。總べて其事をいはずにそれとさして云ふ詞。

いちぢん 一陣(名) 風の一吹(ひとふき)。○「一陣の凉風」

いちにごにさんわノう 一兒二山王(句) 一に恐るべきは小兒。二に恐るべきは山王權現との意。小兒の權幕には親も叶はぬの意を神に比して云へるなり。泣く兒と地頭にば叶はぬなどいふと同意。(謠曲)

いちり 一理(名) ひとつの道理。

いちりづか 一里塚(名) 街道筋の一里毎に土を盛り上げ木を植ゑて往來の旅人の目標(めじるし)としたるもの。

いちりんさうッう 一輪草(名) いちげさうとも云ふ草の名春の頃梅に似たる白き花さく。

いちりうリュう 一流(名) 〔一〕一種の流義。●一派。〔二〕一樣の流義。●同流。〔三〕同流の人全體。

いちりふリュウ 一粒(名) ひとつぶ。

いちりふリュウまんばい 一粒萬倍(句) 〔一〕穀物の種を一粒播きて萬粒の收入あるを云ふ。〔二〕僅の元手にて多くの結果を得るのたとへに用ふ。

いぢる (他動四段) 手を付けて弄ぶ。(俗)

いちるゐ 一類(名) 〔一〕同種類。●仲間。〔二〕一族。●一門。○謠曲「西海に沈みし平家の一類」

いちおう 一應(副) ひと～ほり。◆ひとわたり。

いぢわる 意地惡(名) 〔一〕意地のわるき性質。〔二〕意地のわるき人。

いちがい 一概(副) 一つに概括して。◆ひきくるめて。△(又)—一概に。(形)—一概なる。

いちがん 一眼(名) 一つ目。◆片目。◆獨眼。◆めっかち。

いちがのながれ 一河流(句) 同じ河の流れ。……同じ河の流れた二人が汲み合ふも前世よりの因緣づくなりとの意に用ふ。○謠曲「一河の流れ汲みて知る。其心淺からめや」

いちがのみづ 一河の水(句) 一河の流に同じ。

いちやう 一樣 同樣。◆同一の有樣。△(形)—一樣なる。(又)—一樣の。(副)—一樣に。

いちえふ 一葉(名) 〔一〕一枚の葉。〔二〕小舟。◆舟を浮べたるさまの木の葉に似たる故に云ふ。……又漢土にて黃帝の臣下貨狄といふ人。柳の葉の上に蝟蝟の乘りて流れゆくを見て始めて舟を造り出だしたる故なりとの傳說もあり。

いてう 異朝(名) 異國。◆外國。

いてふ (名) 木の名。葉は扇なりにて秋の末美しく黃色に染むもの。◆銀杏のなる木。

いてふば (名) 鴛鴦の思羽といふ。形いてふの葉に似たるが故に。

いてふあし (名) 膳などの足の廣がりていてふの葉の形をなしたるもの。

ゐちく 違勅(名) 勅命に違背する事。

いちだい 一代(名) 〔一〕其人が主人である間。〔二〕一生涯。

いちだいき 一代記(名) 一生涯の傳記。

いちだいじ 一大事。(名) 或る重大なる出來事。○狂言「是は一大事のことを仰せ出だされた」

いちだん 一段(名) 〔一〕一層。◆ひとしほ。〔二〕最上。◆結構。△(形)—一段の。(副)—一段。(又)一段と。

いちだんのはたらき 一段活。(名) 文法上の語。見見る見れ着着る着れの如くイ列音は決して變化せざる詞の種類。

いちだんくわつよう 一段活用(名) 一段のはたらきに同じ。

いちれい 一禮(名) 一度じぎをする事。◆一拜。……

再拜などに對して云ふ。

いちれい 一例(名) 一つのためし。●或る例證。

いちれつ 一列(名) ひとつら。●ひとならび。△(形)—一列の。(副)—一列に。

いちれんたくしゃう 一蓮托生(句) 死後同じ蓮臺の上に生れんとの意。……男女互に未來をかけて契る詞に用ふ。

いちぞん 一存(名) 一人の存じ寄り。

いちぞう 一族(名) いちぞく。●一門。(雅)

いちぞく 一族(名) 同族。●一門。一家親類中。

いちづ 一圖 一向。●ひたすら。●一心。△(形)—いちづの。(副)—いちづに。

いちづく 意地づく(名) 意地の競爭。

いちねん 一念(名) 一圖に思ひ込みたる念力。○「最後の一念」

いちねん 一年(名)(副) 一月より十二月まで。●ひとせ。●終年。●終歲。

いちねんぢゅう 一年中(名) 年中に同じ。●一月元日より大晦日まで。●終歲。●終年。

いちねんぐさ 一年草(名) 毎年莖枯れて根より新に芽を出す草の總名。

いちなん 一男(名) 第一の男子。●長男。

いちらん 一覽(名) 一通り見る事。●一見。●一讀。△(動)—一覽す。

いちらく 一樂(名) 〔一〕いちらくおりの略。〔二〕いちらくあみの略。

いちらくおり 一樂織(名) 糸を浮かせて織り出したる最上の絹織物。◎和泉の人土屋一樂といふ人の織り初めたる故に名づく。

いちらくあみ 一樂編(名) 一樂織のやうに編みたる籐細工の一つ。

いぢらし (形。形狀言シク活) いぢらしして居る有樣。●憐れなり。●かわゆらし。

いちう 一宇(名) 一つの建物。●一軒。●一棟。○「一宇の伽藍」

いちのろく 一の六(名) 一寸六分の縫針。

いちのはち 一の八(名) 一寸八分の縫針。

いちのはな (名) 木か草か詳ならず(萬葉。夫木)

いちのところ 一の處(名) 攝政關白の事。……第一等官の所の意。○源氏「世の中の一の所も何とも思ひ侍らず。此殿を頼み聞えてなん過し侍りぬる」

いちのかたな　一の刀(名)　最初に下す庖刀をいふ。……料理に用ふる詞。

いちのかみ　一の上(名)　左大臣の事。太政官の事務を統轄する上官故に云ふ。

いちのだいじん　市正(名)　市の司の長官。

一の大臣(名)　左大臣の事。◎太政大臣は別格として其以下の大臣中第一席を占むる役故に云ふ。

いちのつかさ　(名)　市の高さところ。(記)

いちのつかさ　市司(名)　京都の町を支配する官の名。……中古の制。京都を東西に分ちて左、右京職之を管す。其下に東市司西市司ありて。財貨の交易。器物の眞僞。度量の輕重。賣買の估價。非違の禁察等の事を掌る。一ケ月の中。上十五日は東の京にて市あり。下十五日は西の京にて市あり。下十五日は西の京にて市ありしなり。

いちのつづみ　一鼓(名)　雅樂の樂器。横に置きて小さき撥にて打つ鞨鼓の種類。

いちのく　一句(名)　短歌の初の五文字。●初句。

いちのくに　一の國(名)　其國司と爲るべきに第一の好き地方。……除目の時に云ふ詞。○枕「したりがほなるもの。除目に其年の一の國得たる人。

いちのま　一の間(名)　一番目の間。●第一室。……間數のある家に云ふ詞。(雅)

いちのまひ　一舞(名)　舞樂の二段以上ある曲に第一段目の舞を云ふ。○枕「一の舞のいとうるはしく袖を合はせて」

いちのまつ　一の松(名)　能舞臺の橋掛(はしがかり)の外に植ゑたる松の舞臺に最も近きのを云ふ。是より數へて樂屋の幕に近づくに從ひ二の松三の松と稱ふるものあり。

いちのご　一の五(名)　一寸五分の縫針。

いちのて　一の手(名)　〔一〕第一等の手段。〔二〕第一等の手段を爲したる人。

いちのきさき　一の后(名)　第一の后の意。◎皇后陛下。……女御などに對して云ふ。

いちのみや　一宮(名)　〔一〕其國中にて第一の神社。〔二〕第一の皇子。或は皇女。

いちのみこ　一皇子(名)　第一の皇子。或は皇女。

いちのひと　一の人(名)　攝政關白。一の所に同じ。○

いちのひれ

枕「めでたきもの一の人の御ありき」

一の鰭(名)　魚の鰭際の肉をいふ。……料理人の詞。

いちぐ

一具(名)　道具の一揃。

いちぐわち

一月(名)　いちぐわつの古言。〔一〕年の最初の月。◉正月。〔二〕ひとつき。

いちぐわちのさい

一月齋(名)　一箇月間のものいみ。

いちぐわつ

一月(名)　年の最初の月。◉正月。

いちぐら

市倉(名)　市中の倉庫。

いちぐら

市座(名)　市場にて賣物を並ぶる臺。

いちくらずみ

一庫炭(名)　池田炭の一名。一庫産の炭。

いちぐさしかけ

一具差掛(名)　いちぐゆがけに同じ。

いちぐゆがけ

一具轅(名)　兩手に掛くる軍用の轅(ゆがけ)。

いちや

一夜(名)　〔一〕日沒より日出までをいふ。◉終夜。◉夜すがら。〔二〕或る夜。◉ある晩。○「一夜月下に逍遙して」

いちやかた

市屋形(名)　市のもの賣る家○謠曲「蘆火たく屋も市やかたも」

いちゃつく

(自動四段)　男と女と見苦しき程に戯るゝを云ふ。◉ふざける。

いちやづくり

一夜作(名)　一夜の間に作る事。……當に急ぎて匆卒にせし事のたとへに云ふ。○一夜作りの文章」

いちやづま

一夜妻(名)　一夜だけ妻とする女。◉遊女。◉娼妓。

いちゃつき

(名)　いちやつく事。(俗)

いちやくさう

一藥草(名)　草の名。〔一〕異名は……鈴蘭(すずらん)。◉鏡草(かがみぐさ)。◉野葵(のあふひ)。◉愛宕苦(あたごだけ)。◉鼈甲(べつかう)草。〔二〕辨慶草の一名。

いちやぐさ

一夜草(名)　辨慶草の一名。

いちやざけ

一夜酒(名)　一夜造りの酒。

いちまい

一枚(名)　德川時代の頃金子銀子に云ふ詞。金にては七兩二分。銀にては四十匁。

いちまいかんばん

一枚看板(名)　〔一〕劇場にて俳優の名を看板に掛くる時普通は連名なれども殊に一名を一枚に記したる看板。〔二〕總べて主(おも)なる事。又は主(おも)なる物。

いちまいかんばん

一枚看板(名)　一枚より外になき衣類を云ふ。

いちまいだな

一枚棚(名)　一枚板にて造りたる棚舟の意。◎田の水に泛ぶる小舟。◉田舟。

いちまいぐろ

一枚黑(名)　〔一〕全身混り毛のなき黑皮。

いちまいゑ　〔二〕犬などの全身黑き事。

いちまいじろ　一枚繪(名)　續き繪ならぬ錦繪。
一枚白(名)　〔一〕全身混り毛のなき白皮。〔二〕狗などの全身白き事。

いちまつ　市松(名)　市松摸樣の略。

いちまつこもん　市松小紋(名)　市松摸樣の小紋。

いちまつもやゝう　市松摸樣(名)　白黑の一つおきになりたる碁番摸樣をいふ。いしだゝみに同じ。◎元文年間の名優佐野川市松の好みて用ひたる摸樣ゆゑ此名あり。

いちまんぢゅうじころ　一饅頭鍔(名)　一の板を饅頭形にし二の板以下は日根野流にせし兜の鍔。

いちげ　一夏(名)　佛門にて四月十五日より七月十五日までの九十日間庵室に籠居して佛道修行する事ありこれを夏と云ふ。夏を一回。即ち一年分勤むるを一夏と名づく。○謠曲「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候」

いちげい　一藝(名)　一つの藝術。

いちげける　(自動下二段)　畏れて小さくなる。

いちげさゝう　一花草(名)　〔一〕一輪草の一名。〔二〕まんねんぐさの雄をいふ。〔三〕いへにれといふ草の一名。

いちげつ　一月(名)　〔一〕一箇月。◉ひと月。〔二〕いちぐわつ。

いちげんきん　一絃琴(名)　琴の一種。絲一筋なるもの。……須磨琴ともいふ。……歌などには一つなの琴とも云ふ。

いちぶ　一分(名)　史生の異名。史生は國府の下役にて公廨と稱する正税以外の配當を受くる時全額分の十五分の一分を得る故に云ふ。草の名。＝黃廉。商黃に同じ。

いちぶ　(名)

いちぶつじゃうど　一佛淨土(名)　同じ佛の淨土。●二人同一の淨土に至りて成佛するの意。○落窪「衞門、少納言一淨佛土に生れたるにやあらんと覺ゆ」

いちぶん　一分(名)　本分。●義務。○いちぶんがたゝぬ」

いちぶめし　一分召(名)　史生の任命。……一部の處を見よ。

いちぶしじゅう　一部始終(名)　其事の起りより落着まで。●本末。

いちこ　市子。巫女(女)　齋子の意。◎弓を鳴らして神お

ろしを行ふ女。●あづさみこ。●くちよせ。

いちご 覆盆子。苺(名) 花白く實赤く莖に刺ある草の名。花は春の末に咲き實は夏の始に熟す。味甚だ美なり。草いちご。木いちご。鮫いちご。田植いちご。西洋いちご。など種類多し。

いちご 一期(名) 一生涯。●一代。○謠曲「一期の思ひ出な」

いちこち 壹越(名) いちこつに同じ。

いちこちでう 壹越調(名) いちこつでうに同じ。

いちこつ 壹越(名) 壹越調に同じ。

いちこつでう 壹越調(名) 雅樂の調子の名。

いちがごう 一毫(名) 〔一〕一本の毛。〔二〕一本の毛程のもの。

いちがごうも 一毫も(副) 一本の毛ほども。●少しも。

いちこく 一刻(名) 中古の頃一時間(今の二時間)を四つに割りて稱ふるとき其第一の刻限。……「子の一刻」「丑の一刻」などいふ。又「子一つ」「丑一つ」などもいへり。

いちごやまひ 一期病(名) 生涯の病氣。●不治の病。

いちごもどき (名) 覆盆子に擬するの意。◎蜜柑の實に大根おろしを加へて作りたる料理の名。

いちぜん 一圓(副) 全體。●悉皆。●總じて。

いちあし 逸足(名) 他に擢んでたる足取り。●急ぎ足。○「いちあし出して」

いちざ 一座(名) 〔一〕第一等の座席。●正席。●上座。〔二〕一番目の座席。……說法などの最初講座に上りてするを云ふ。〔三〕同座。●同席。……〔轉じて〕連中。●同團體。○「觀世一座」「川上一座」

いちざかき (名) 榊の種類。●びじゃかきと云ふ木なりともいへど詳ならず。(紀)

いちざのせんじ 一座宣旨(名) 第一席に着席すべき旨の宣旨。

いちぎ 一義(名) 〔一〕一つの義理。●一つの意味。〔二〕一件。●一條。

いちぎ 一議(名) 一つの異議。○「一議に及ばず」

いちゅう 意中(名) 心の中。●心中に深く思ふ事。

いぢゅう 移住(名) 家を移して住む事。△(動)—移住す。

いちゅうのひと 一意中の人(名) 心の中に戀ひ慕ふ人。●戀人。●懸想人。

いぢゅうみん 移住民(名) 其地に家を移し住む人民。

いちめ 市女(名) 市の女。●女商人。

いぢめ (名) いぢめる事。●「弱いものいぢめ」

いちめい 一命(名) 一つの命。●一人の生命。

いちめい 一名(名) 別名。●異名。●又の名。

いぢめる (他動下二段) 強き者が弱き者を苦しむるを云ふ。(俗)

いちめがさ 市女笠(名) 朝鮮人の帽子の如く項上の處凸出して大なる塗り笠。……中古近古の頃女のかぶりたるもの。◎もとは市女の如き卑しきものゝ用ひたる故に云ふ。

いちめん 一面(名) 滿面。●一ぱい。●見ゆる所殘らず。△(副)○一面に。

いちめんしき 一面識(名) 〔一〕一度面會せし事。〔二〕一度面會せし人。

いちみ 一味(名) 〔一〕一つのあぢはひ。●同一の甘味。〔二〕一味方の意。◎味方。●同志者。●同意者。

いちみゃうミョウ 一名(名) 別名。●異名。●又の名。═いちめいに同じ。

いちみのあめ 一味の雨(名) 一般にゆきわたる雨。●佛の慈悲の平等なるを云ふ。◎もとは法華經に「佛平等説如一味雨。隨衆生性受不同。」とあるより來れる詞にて。此意味は佛の平等一樣なる教説は一味の雨の如く。衆生の受くる處に隨つて同じからずとなり。○新拾遺「もろともに一味の雨はかゝれども松は緑に藤は紫」

いちじ 一時(名) 〔一〕時刻の名。一晝夜を二十四に分ちたる其第一と第十三にあたる時。〔二〕ある時。●一頃。○「一時は危篤なりしが」〔三〕僅かの間。●しばし。○「かれも一時これも一時」

いちじ 一寺(名) 寺ぢゃう。●寺中一圓。○謠曲「一寺の賞翫ひまを得ず」

いちじろし (形。形狀言シク活) いちじるしに同じ。

いちじに 一時に(副) 同時に。●いちどきに。●いっしょに。○「双方一時に攻め立てゝ」

いちじるし 著(形。形狀言ク活。又シク活) 目立ちて。●はっきりと。●あきらかに。

いちじゃういちげに（副）　一度は上段に一度は下段に斬り結ぶの意。刃にて戰ふ時の詞。

いちじょうののり　一乘法（名）　佛の法華經中に說きたる教を云ふ。此經の方便品に「十方佛土の中には唯一乘の法のみ有り」と見えたり。乘とは佛乘すなはち佛書の事。この法華經一書に限るとの意なり。

いちじょうめうてん　一乘妙典（名）　法華經を云ふ。

いちじつ　一日（名）　〔一〕月の最初の日。〔二〕終日。〔三〕或る日。

いちじん　一人（名）　天皇陛下。

いちじく　無花果（名）　木の名。葉は梶に似て大きく夏の頃花見えずして實を結ぶ。中に赤紫の甘き肉あり。

いちじゅのかげ　一樹蔭（名）　同じ樹の蔭。……同じ樹の蔭に宿り合ふも前世よりの因緣つくなりとの意に用ふ。○謠曲「一樹の蔭の宿りも他生の緣と聞くものを」……「一樹の蔭一河の流れ」と對して用ふる事も多し。

いちび　蔴麻（名）　草の名。此草の皮は脛巾（はゞき）に造り又繩になふ。●異名は……桐麻。●いちべい。

いちび　黃麻（名）　草の名。海邊に植ゑ其皮を以て多く船の繩を造るもの。●異名は……綱麻（つなのを）。●かなびきを。

いちびはばき　市日（名）　市の立つ日。

蔴麻脛巾（名）　いちびの皮にて作りたる脛巾。昔し衛府の從者などの多く用ひたるもの。

いちびと　市人（名）　市を立つる人。●市に住む人。●商人。

いちびがら　蔴麻稈（名）　いちびの稈（から）なり。蒸燒きにしてほくちとなす。……訛りていちべいがらと云ふ。

いちびこ　蓬藁（名）　草の名。覆盆子（いちご）の古名。

いちびめ　市姫（名）　市を掌る女神の名。○夫木「ある處の展風。市姫のかたなどかけるところ」爲賴。市姫の神のいがきのいかなれやあきなびものに千代をつむらん」

いちもち　逸物。一物（名）いちもつに同じ。○空穗「舞人は世の中に名高きいちもちのものども」

いちもつ　逸物。一物（名）　衆に拔け出でゝすぐれたる物。○宇治「乘りたる馬いみじき逸物にて

ありければ」

いちもつ 一物(名) 意中の惡計。○「胸に一物」

いちもん 一門(名) 同族。◎一族。●一家。○謠曲「西海にほろびし平家の一門」

いちもんじ 一文字(名) 一といふ文字。

いちもんじに 一文字に(副) 一と云ふ文字の如くに。●直線に。◎眞直に。○謠曲「腹一文字にかききって」

いちもんぜに 一文錢(名) 一文の錢。●些少の金錢。(言)

いちもんせん 一文錢(名) 一文の通用錢。

いちもく 一目(名) 一見。●ひとめ見る事。○「一目亮然」

いちもく 一目(名) 碁石一つを云ふ。……「一目おく」とは他人よりも一目餘計に置きてかゝるの意にて一歩讓るを云ふ。

いちもくさんに 一目散(副) 一心不亂。●一目不散。○「一目散に駈け出す」(俗)

いちぜんめし 一膳飯(名) 一膳幾錢と定めて賣る飯。

いちす 市す(自動サ變) 市を立つる。●商賣する。○空穗「市しあきなはいこそかしこからめ」

いり 圦(名)

いり 入(名) 樋の口に同じ。〔一〕はいる事。●入込む事。○「いでいり」「入のある芝居」〔二〕入りて隱るゝ事。○「月の入」「樂屋入り」〔三〕入費。○「物入り」

いりほが (名) 思想の込み入り過ぐる事。●意味の錯雜なる事。△(形)―いりほがの。(又)いりほがなる。(副)いりほがに。(雅)

いりとり 煎鳥(名) 鳥肉に味を付けて油に煎り付けたるもの。

いりどうふ 煎豆腐(名) 豆腐に味を付けて煎り付けたるもの。

いりちがひ 入違(名) 入り違ふ事。

いりちがふ 入違(自動四段) 甲の入る時乙の出づるやうになるを云ふ。●ありやこりやになる。●ぐれはまになる。●とんちんかんになる。

いりかはり 入代(名) 入りて代る事。●交代。

いりかはる 入代(自動四段) 入りて代る。●交代する。

いりかよふ 入通(自動四段) 其所を入りて往來するを云ふ。

いりがく 入角(名) 丸くしたる角に一つぎざを入れたるを云ふ。「ノ」の如き形これなり。又入角さ

も云ふ。

いりよう 入用(名) 〔一〕にふよう。●要する事件。●つかひみち。●需要。〔二〕入費。●にふよう。

いれうりょう 醫療(名) 病を直す事。●醫者の療治。

いりょく 威力(名) 威權と勢力。

いりだひイ 煎鯛(名) 鯛を燒きて細かくむしりたるもの。

いりたち 入立(名) 入り立つ事。

いりたつ 入立(自動四段) 〔一〕入り込む。●入りひたる。○空種「あそびの道にも入り立ち給へる。○源氏「都にはまだ入り立たぬ秋のけしき」〔二〕其中にはいりて交際する。●親密にする。○枕「山の井の大納言は(別腹なれば)入り立たぬ兄にて」

いりたまご 煎玉子(名) 鷄卵に味を附けて煎りたるもの。

いりつく 煎付(自動四段) 水氣のなくなりて鍋にひっつく。●煮詰まる。●煎じ詰まる。

いりつく 煎付(他動下二段) 煎り付かしむる。

いりつけ 煎付(名) 煎り付けたる食物。

いりつけまめ 煎付豆(名) 煮豆の一種にして堅く煮たるもの。

いりなべ 煎鍋(名) 食物を煎るに用ふる鐵製又は土製の鍋。

いりなみ 入波(名) 沖より磯へ入り來る波。

いりむこ 入婿(名) 婿となりて其家に入りたる男。

いりむぎ 煎麥(名) 麥こがしに同じ。

いりうど 入夫(名) 入婿(いりむこ)。●入夫(雅)。

いりうのはな 煎卯花(名) 豆腐の糟を煎りたるもの。……料理の詞。

いりうみ 入海(名) 陸に入り込みたる海。●灣。

いりくち 入口(名) 内に入るべき所。

いりくりうた (名) 言葉の錯雜して意味の通ぜぬ歌。(定家卿消息)

いりくむ 入組(自動四段) 混雜する。●込み入る。

いりあひイ 入相(名) 〔一〕日没の時。●黄昏。○伊勢「けふの入相ばかりに絶ゑ入りて」〔二〕入相に撞く鐘を云ふ。●晩鐘。○夫木「入相のおとのみならず山寺は書よむ聲もあはれなるかな」

いりあひイのかね 入相の鐘(名) 入相の時刻に寺にて撞く鐘。●晩鐘。●暮鐘。○拾遺「山寺の入

相の鐘の聲ごとに今日も暮れぬと聞くぞかなしき」

いりあひやま 入合山(名) 一つの山にして持主を甲村と乙村とに有する山。●村と村との共有の山。

いりまひ 入舞(名) 舞樂の名稱。舞臺より舞ひつゝ入るを云ふ。—入綾に同じ。

いりまめ 煎豆(名) 煎りたる豆。

いりぶち 入淵(名) 海河などの入込みて淵をなしたる所。

いりふね 入船(名) 港に入り來る船。

いりふす 入伏(自動四段) 寢所に入りて臥すを云ふ。

いりこ 煎粉(名) 米の粉を煎りたるもの。……菓子種に用ふ。

いりごひ 煎鯉(名) 鯉の肉を鹽燒にして煮したるもの。……料理の詞。

いりこむ 入込(自動四段) 内へ全くはいる。

いりごめ 煎米(名) 燒米に同じ。

いりごみ 入込(名) 秩序も分界も無しに多人一度に入る事。○「入込の湯」「入込のさじき」

いりえ 入江(名) 岸に包まれたる河または海。

いりえん 入緣(名) 緣談の申込。

いりあや 入綾(名) 舞樂の手の名。曲終らんとして更に再び舞ひ返すを云ふ。◉舞臺より樂屋に入る時にあやの如く面白き手を見するの意

いりさだまる 入定(自動四段) 即ち佛教上にて死ぬるを云ふ。○謠曲「入り定まれる高野の山」

いりき 威力(名) 威光と功力。……神佛に云ふ。○「不動の威力」

いりめ 入目(名) 入費。●入用。●費用の金高。

いりめく (自動四段) 氣のいられるを云ふ。●いらゝ〳〵する。●せか〳〵する。

いりみ 入身(名) 相撲の手の名。四十八手中の其一にして身體を入れこめて勝を得る手。

いりしほ 入汐(名) 引汐。○玉葉「浦あれて風よりのぼる入汐におろさぬ舟ぞ波に浮きぬる」

いりしほ (名) 月の入時を云ふ。○玉葉「なにはがた朧月夜の入しほに明方かすむ淡路島山」

いりじほ 煎鹽(名) 燒鹽に同じ。

いりひ 入日(名) 入りつゝある太陽。●夕日。●夕陽。●斜陽。●落日。

いりびやうし 入柏子(名) 打ち入るゝ拍子。……俗樂の太鼓に云ふ詞。

いりひなす (枕) 入日の如くの意。故に隱るゝを崩るゝ(かく)、薨る(かく)ゝ死る(かく)ゝなどにかけて云ふ。

いりもむ (自動四段) もみにもむ。●氣をもむ。○源氏「いりもみつる風のさわぎに」宇治「いりもみ思ひければ」

いりもの 煎物(名) 汁なく煎り付けたる食物。

いりもみ (名) もみにもむ事。……人が氣をもむ事にも云ひ。風が草木をもむにも用ふ。○源氏「いりもみする風」

いりもみぢ (名) 紅葉の一入色濃きを云ふ。(雅)

いりずみ 入角(名) 入角(いりかく)に同じ。

いりずみ 煎炭(名) 火にあぶりて水分を去り。火のおこり易き樣にしたる炭。

いぬ 犬。狗(名) 家畜の名。

いぬ 戌(名) (一)十二支の一つ。(二)方角の名。西北の北によりたる方。(三)時刻の名。夜八時にあたる。

いぬ 犬(形) 物を卑しめ落して云ふ詞。……人間界以下もしくは通常以下といふ意味。……人間の食ふまじき意味にて「犬蔬菜」「犬蓼」通常の死方ならぬ故に「犬死」人間社會に列せられぬを以て「犬ざむらひ」など云ふの類。

いぬ 寢(自動下二段) 眠る。●寢入る。○夙に起き夜半にいぬ」

いぬ 往(自動ナ變) 去る。●立ち去る。●往く。●過ぎ去る。●去んぬる。……「いにぬ」いにぬるなどいふべきをば常に略して「いぬ」「いぬる日」「いぬる月」「いぬる年」「いぬるついたち」「いぬる十日」「いにし頃」「いにし年」「いにし春」などいふ。

いぬいたどり 犬虎杖(名) 草の名。虎杖(いたどり)の小さきもの。

いぬゐ 戌亥。乾(名) 方角の名。戌の方と亥の方の中間すなはち西北。

いぬばりこ 犬張子(名) 張子にて犬の形を造りたる玩弄物。小兒の誕生、宮參、婚禮等に用ふる祝の品なり。もとは枕元に置きて魔除の呪とせしものと云ふ。

いぬばこ (名) 犬張子に同じ。

いぬばへ 犬蝿(名) 犬の血を吸ひて生活する蝿の種類。

いぬばしり 犬走(名) 中古貴族の家の外圍なる築地(ついぢ)と

堀この間に細く餘地の殘しある場所。⊙犬の走り得るだけ明きてあるの意。○新六帖「くづれそふ破れ築地の犬ばしり踏まへどころも無き我身かな」

いぬはじかみ　犬薑(名)　草の名。薑の類にして赤き花あり。其茎を鹽漬にして食用に供す。

いぬほほガ　(名)　木の名。葉の形人參に似て大木となるもの。異名は……人參。●犬棒。

いぬほほガ**づき**　犬酸醬(名)　酸醬の種類にて劣等なるもの。

いぬぼえ　犬吠(名)　大嘗會の時。御門守の隼人が御門の左右に立ちて有司の參内する毎に犬の吠ゆる如き聲を發するを云ふ。もと太古の遺習に出でゝ中古までも行はれたり。

いぬどくさ　犬木賊(名)　草の名。杉葉に似て大く夏の頃花咲く。●異名は……朝鮮木賊。●濱木賊。●水木賊。●杉木賊。●杉葉木賊。●河原木賊。

いぬぬのびき　犬布引(名)　菌の名。布引に似て味は苦し。

いぬおふッもの　犬追物(名)　鎌倉時代に盛に行はれたる騎射術の名。竹垣を繞らしたる馬場に犬を放ち。數人馬上にて之を追ひまはし臺目の矢にて射るの法なり。

いぬおもだか　犬澤瀉(名)　草の名。なまぬの一名。

いぬわらび　犬蕨(名)　草の名。柴朶の一種。異名は……鬼蕨。●山蕨。

いぬわし　犬鷲(名)　鳥の名。熊鷲の事。

いぬかひィ　犬飼(名)　〔一〕〔鷹狩に用ふる犬を飼ふ事。〔二〕鷹犬を飼ふ役の人。

いぬかひィぼし　牽牛(名)　星の名。七夕に祭らるゝ男性の星。●牽牛星。●彦星。(和名抄)

いぬかひィびと　犬飼人(名)　犬飼の〔二〕に同じ。○山家集「あはせつる木居のはし鷹招きそらし犬飼人の聲しきるなり」

いぬかば　犬樺(名)　木の名。いぬほほの一名。

いぬがらし　犬辛子(名)　草の名。辛子の一種にして春の頃黄色の花咲く。●異名は……狐辛子。●田辛子。●野辛子。●畔辛子。●畔大根。

いぬがんそく　(名)　草の名。草蘇鐵の一種。●異名は……へびがんぞく。●蛇の雪駄。

いぬがんぴ　犬雁皮(名)　雇皮の一種。根は皮を取つて紙を漉く原料に用ふ。

いぬがや 犬榧(名) 榧の一種。其實よりは油を搾りて燈油に用ふ。

いぬかご 犬籠(名) 草の名。こがんびの一名。

いぬがみ 犬神(名) 犬の靈魂を使役すといふ魔術の一つ。九州四國邊に行はるゝもの。

いぬかし 犬樫(名) 木の名。春の頃赤色の花咲く。藪肉桂に似て大なるもの。香木犀。松浦肉桂などの異名あり。

いぬよもぎ 犬蓬(名) 〔一〕草の名。岩蓬の一名。〔二〕草の名。ひきよもぎの一名。

いぬだら (名) 木の名。はりぎりの一名。

いぬたうがき 犬唐柿(名) 木の名。無花果の一名。

いぬたぶ (名) 草の名。いたびの一名。

いぬたで 大蓼(名) 〔一〕草の名。蓼の一種にして大なるもの。秋の初め淡紅色にて穂を下に垂れて花さく。●異名は……鬼蓼。●朝鮮烟草。●大毛蓼。●唐蓼。●螢蓼。〔二〕草の名。野の蓼の一種にして辛味のなきもの。一名を鬼蓼と云ふ。

いぬそらまめ 犬蠶豆(名) 草の名。鴉豌豆の一名。●野豌豆。

いぬつばき 犬椿(名) 木の名。ねずみもちの一名。

いぬつづら 犬葛(名) 草の名。蕺葉葛の一名。

いぬつつじ 犬躑躅(名) 草の名。きつつじの一種。

いぬつげ 犬黄楊(名) 木の名。黄楊の一種。

いぬうど 犬獨活(名) 草の名。うどの食すべからざる種類。

いぬのはなひげ 犬鼻髯(名) 草の名。其穂は犬石菖に似たり。

いぬのはぎ 犬萩(名) 萩の一種にして莖及葉に毛のあるもの。

いぬのたま 犬の玉(名) 稀に犬の腹中にある玉の如きもの。

いぬのふぐり 犬睾丸(名) 草の名。紫色の花咲き青色の實を結ぶ。葉は鋸齒に似たり。

いぬのひげ 犬髯(名) 草の名。ほしぐさの類。

いぬのしり 犬尻(名) 草の名。猪の尻草の一名。

いぬくひィ (名) 犬を嚙み合はせて樂しむ事。●鬪犬。○增鏡「朝夕好む事とては犬くひ田樂」

いぬぐはワ 犬桑(名) 木の名。柘の一名。

いぬくぐり 犬潛(名) 犬の出入の爲めに設けたる垣塀などの穴。

いぬぐこ　犬栒杞（名）　木の名。栒杞の一種。

いぬぐさ　犬草（名）　草の名。ゐのこぐさの一名。

いぬくさそてつ　犬草蘇鐵（名）　草の名。犬ゐんぞくの一名。

いぬくす　犬楠（名）　木の名。楠の一種にして秋豆の如き實を結ぶもの。●異名は……山楠。●青楠。

いぬくず　犬葛（名）　草の名。蔦漆（つたうるし）の一名。

いぬまき　犬槙（名）　夏の頃葉の間に實を結ふ常磐木の名。異名は……草槙。●羅漢松。

いぬげいとう　犬鷄頭（名）　草の名。うまさくの一名。

いぬげり　犬蜆（名）　鳥の名。蜆の一種。又頭に鍋の如き冠あるを以て鍋蜆（なべげり）ともいふ。

いぬげやき　犬槐（名）　木の名。秋楡の一名。

いぬぶだう　犬葡萄（名）　野生の草の名。葉も蔓も實も葡萄に似て食ふべからざるもの、

いぬぶんどう　犬文豆（名）　草の名。藪豆（やぶまめ）の一名。

いぬふせぎ　犬防（名）　佛前の隔てに立て置く低き格子。○更科「清水觀音の）御帳の方の犬ふせぎの内に」

いぬころ（名）　犬の子。

いぬかうたけ　犬革茸（名）　菌の名。革茸（かうたけ）に似て食すべからざるもの。

いぬかうぞ　犬楮（名）　草の名。姫楮（ひめかうぞ）の一名。

いぬごま　犬胡麻（名）　木の名。野生にして夏の頃白き花咲き秋赤き實を結ぶ。又胡麻（ごま）の木とも云ふ。

いぬごせう　犬胡椒（名）　草の名。こなすびの一名。

いぬえ　犬荏。香需（名）　草の名。莖は方形にして秋の頃長刀（なぎなた）に似たる花咲き後實を結ぶ。大小の二種あり。●異名は……長刀香需（なぎなたかうじゅ）。●犬あらゝぎ。●鼠油（ねずみあぶら）。

いぬあらゝぎ（名）　草の名。いぬえの一名。

いぬさいき（名）　草の名。あしたぐさの一名。

いぬさゝ（名）　草の名。犬虎杖（いぬいたどり）の一名。

いぬさんせう　犬山椒（名）　野生の草の名。山椒に似て惡臭あるもの。

いぬざくら　犬櫻（名）　櫻の種類。花は白くして莖長く下に垂れて咲く。

いぬき（名）　家の昇り口の敷石。（雅）

いぬぎり　犬桐（名）　木の名。油桐（あぶらぎり）の一名。

いぬゆり　犬百合（名）　草の名。鬼百合の一名。

いぬゆづりは（名）　木の名。楪（ゆづりは）の一種。

いぬしばゐ　犬芝居（名）　犬を役者にして演ぜしむる芝居。

いぬじに　犬死（名）　無益にする死樣。

いぬじゅろ　犬棕櫚（名）　棕櫚の種類。葉の下に刺あるもの。

いぬしゅろちく　犬棕櫚竹（名）　棕櫚竹の一種にして劣等なるもの。

いぬじもの　犬自物（副）　犬の如くの意。故に「道に伏す」など犬の所爲に似たることの形容に用ふ。（古）

いぬゑんどう　犬豌豆（名）　草の名。雀の豌豆の一名。

いぬゑんじゅ　犬槐（名）　木の名。槐の一種にして夏の頃黄色の花咲くもの。又大槐とも云ふ。

いぬびはッ　犬枇杷（名）　夏の頃無花果に似たる實を結ふ小さき木の名。●異名は……鴉枇杷。●猿柿。●山枇杷。●牛の舌。●牛の額。●乳の木。●龍眼。●猿の尻。●豆木。●豆蔻。

犬雲雀（名）　鳥の名。田雲雀の事。

いぬひばり

いぬびと　犬人（名）　犬吠をなす役の隼人を云ふ。……いぬぼえを見よ。

いぬびえ　犬稗（名）　稗の一種にして野生のもの。

いぬぜんまい（名）　草の名。ぜんまいの一種なれども食用にならざるもの。

いぬぜきしゃうショウ　犬石菖（名）　草の名。石菖に似て田の畔などに生ずるもの。●異名は……笄草（かうがいぐさ）。●笄石菖（かうがいせきしやう）。

いる

名（自動四段）　〔一〕はいる。●入り込む。○「湯に入る」「佛道に入る」〔二〕入りて隱るゝ。●姿を隱す。○「月西に入る」〔三〕入用である。○「金が入る」〔四〕はまる ●「適する」●專になる。○「氣に入る」「身が入る」〔五〕他の自動詞に續けて其動の專になる事を示す。○いたみ入る」「恐れ入る」「絶ね入る」「めで入る」〔六〕來るの敬語。○「昨日ハ入らせられ」

いる

名（他動下二段）　〔一〕はいらしむる。●入り込ましむる。●入れる。○「人を湯に入る」「肉を鍋に入る」〔二〕入れて隱す。○古今「あかなくにまだきも月のかくるゝか山の端にげて入れずもあらなん」〔三〕受納せしむる。●納むる。○「證文一通入れ置く」「半金を入る」

〔四〕はむる。●適さする。●事にする。○「身を入る」「力を入る」〔五〕受け入るゝ。○「動議を入る」「忠告を入る」〔六〕他の他動詞に續けて其働の事になる事を示す。○「見入るゝ人なければ」

いる

射(他動一段)　弓から放つ。●的をねらひて中つる。○「弓を射る」「矢を射る」「的を射る」

いる

射(他動四段)　他動一段のいるに同じ。古言雅言には此活用を用ひず。

いる

鑄(他動一段)　金屬を鎔かし型に入れて其物の形に作るを云ふ。○「鐘を鑄る」「彈丸を鑄る」

いる

沃(他動一段)　そゝぎかくる。●あぴせる。●ぶっかける。○榮花「水などいさせ給ひて」源氏「火取をとりよせて殿のうしろによりてさといかけ給ふ」

いる

煎(他動四段)　食物を鍋炮烙の類にて炙り焦すを云ふ。○「豆を煎る」「豆腐を煎る」

ゐる

居(自動一段)　〔一〕をる。●すわる。●其場所に在る。●住居する。〔二〕あつまる。●たまる。……多くは雲、露、塵、水草などに云ふ。○萬葉「みよしの、御舟の山にゐる雲の」源氏「蓮葉に玉ゐる露の」小大君集「塵のみゐるといふぞあやしき」神樂歌「板井や板井の清水里遠み人し汲まれば水草ゐにけり」〔三〕凝る。……氷などに云ふ。○千載「いつくにか月は光をとゞむらん宿りし水も氷ゐにけり」同「つらゝゐてみがける影の見ゆるかな」〔四〕舟の底の土に着きて動かぬを云ふ。○散木「舟はゐれども波は立ちけり」

ゐる

率(他動一段)　ひきゐる。●引き連れる。○召し運れる。○引率する。○空穗「もろこしにゐておはしれ」土佐「車ゐて來れり」

いるゐ

衣類(名)　着物。●衣服。

いるゐ

異類(名)　〔一〕　普通と形の異なりたるもの。……仙人妖怪の類。〔二〕人間に非ざるもの……鳥獸の類。

ゐるゐ

遺類(名)　跡にのこりたるもの。●他に漏れたるもの。

いるか

海豚(名)　海獸の名。鯨に似てよく肥ゑ。赤口く皮厚く潮を吹く。肉は食ふべく脂肪は燈油に製せらる。

いるさ

(名)　いるさまの意にて名りがけの道を云ふ。○

「月の入るさ」「尋れ入るさ」「入るさの山」（雅）

いを 魚（名） うをに同じ。○榮花「鵜のいを」職人盡歌合「いを賣」

いほ 庵。廬（名） 假小屋。●草の屋。●あん。●庵室。いほりに同じ。……秋の田の番するために作りたる假屋の類。○「柴庵」「松の庵」「星花の庵」「小田の假庵」「月もる庵」

いほ 五百（數） 〔一〕ごひゃく。〔二〕多くの數。

いほばた （五百）機（名） 多く掛けて織る機。○萬葉「七夕の五百機立てゝ織る布の秋さり衣たれか取り着ん」

いほつ 五百箇（數） いほつに同じ。（萬葉）

いたり 伊織（名） 東百官の中の一つ。

いほり 庵。廬（名） 〔一〕假小屋。●草の屋。●庵室。——いほに同じ。……庵を作る事をさす又はむすぶとも云ふ。○萬葉「おしてるや難波の小江にいほりつくり」夫木「よそにてや霞むと見ましよしの山峰にいほりをむすばざりせば」玉葉「いほりさす外面の小田に風すぎて」〔二〕軍中の陣屋を云ふ。和名抄には營の字を訓めり。

いほりかんばん 庵看板（名） 芝居などの看板の上の處に家根の如き形を造りたるもの。

いほる （自動四段） 庵を結ぶ、●庵を作りて住む、●小屋掛する。○曾丹集「山里の梅のこはらに春ばかりいほりて居らん花も見がてら」

いほつ 五百箇（名） 五百なり、つは二つ三つなどいふつに同じく數を算ふるに添ふる詞。○記「五百箇みすまるの玉」

いをうり 魚賣（名） 魚を賣る商人。

いわう 流黄（名） ゆわうに同じ。

いわう 以往（名） 以後。●よりのち。●よりさき。

いわう 醫王（名） 醫王佛に同じ。

いわうぶつ 醫王佛（名） 藥師如來の一名。

いほのり （名） 五百箇入の意。箇は矢竹にて即ち五百本の矢の入りたるを云ふ。○記「背にはいほのりの靫をつけ。

いをぐし 魚串（名） 魚を燒くに用ふる竹の串。

いほえ 五百枝（名） 枝葉の多く茂りたる枝。

いをめ （名） 疣の事。◎其形魚の目に似たる故に云ふ。

いほしろだ 五百代小田（名） 限なく廣き田。……代

は昔の面積を量る名にて。方六尺を一歩と爲し。七十二歩を十代と爲す。○堀川「五百代小田に種まきてけり」

いをすき　魚鋤(名)　草の名。夏花咲きて小さき實を結ぶこれを用ひて水氣を治するの功あり。●異名は……唐牛蒡。●犬牛蒡。●山牛蒡。

いはヲ　岩。磐(名)　〔一〕石の大きなるもの。〔二〕石。

いはヲひィ　祝(名)　祝ふ事。●祝儀。●祝言。

いはヲひィ　齋(名)　神祭を司る人。●神官。(紀)

いはヲる　岩井(名)　岩もて圍まれたる井戸。石の井戸。○朗詠「松陰の岩井の水を結びあげて」

いはヲひィばし　祝箸(名)　正月三ヶ日祝儀の膳に用ふる箸。

いはヲひィべ　齋瓮(名)　上古神に捧ぐるための酒を盛りたる瓶。〈圖〉

いはヲひィなの　齋斧(名)　いむなのに同じ。神事に使用する斧。

いはヲひィそす　(他動サ變)　祝ふに同じ。そすはたゞ強めて云ふ詞。

いはヲるづら　(名)　水に這ひ廣がる蔓草の名。實物は古來確說なし。(萬葉)

いはヲひィつま　(名)　大事にする妻。●秘藏の妻。

いはヲひィつき　齋槻(名)　神社にある槻の木。○萬葉「あまとぶや輕のやしろのいはひつき幾世まであらむ隱妻ぞも」

いはヲひィうた　祝歌(名)　君をも御世をも父母をも他人をも總べて祝ひ稱へてよむ歌。

いはヲひィのいと　祝の糸(名)　鎧の威の糸の一名。たくぼくおどしに同じ。

いはヲひィのかがみ　齋の鏡(名)　神體として祭る鏡。●神鏡。

いはヲひィのつゑ　祝杖(名)　昔し正月初卯の日に佳例として人に賜りたる杖。卯杖に同じ。○枕「山とよむ斧のひゞきをたづぬればいはひのつゑの音にぞありける」

いはヲひィのみや　齋宮(名)　いつきのみやに同じ。

いはヲひィのみてぐら　齋の幣帛(名)　清淨にして神に奉る幣帛。

いはヲひィぐそく　祝具足(名)　元服の時造りて祝儀に用ひたる具足。(武家)

いはヲひィや　祝矢(名)　合戰の最初敵味方互に放つ第一の矢。……神前に祈禱して放つより起れる名。

いはひご（名）　大事にする子。●愛兒。○萬葉「錦綾の中に包めるいはひ子も。

いはひびと　齋人（名）　神祭る役の人。●神官。●神主。●社人。

いはひすぎ　齋杉（名）　神木の杉。○夫木「御幣とる三輪の祝部に事とはん幾世か經ぬるいはひすぎむら」

いはろくしゃう　岩綠青（名）　礦物質の繪の具の一つ。綠青にして白みがゝりたるもの。……岩の點など打つに用ふ。

いはざま　岩間（名）　岩の間。

いはばし　石橋（名）　〔一〕岩にて造れる橋。●石橋。〔二〕淺瀨の川に石を疎に置き並べ橋に代用せしもの。●飛石。

いはばしる　岩走る（自動四段）　岩の上を走り流るゝ。○古今「岩走る瀧なくもがな櫻花たをりても來ん見ぬ人のため」

いはばしる（枕）　瀧の意味よりたきにかけて云ふ。○萬葉「岩ばしるたきの都」

いはばしの（枕）　まちかし　あふみなどにかけて云ふ。○岩橋は飛石の事にて其石と石との間相接したる故に間近しといひかけ。又離るゝ反對にて逢ふといひかけたり。……いはばしの〔二〕を見よ。

いはにし　石螺（名）　貝の名。螺の一種にして味甚辛し。●異名は……疣螺。●辛螺。●いばがた。

いはど　岩戸（名）　〔一〕岩屋の門。●岩屋の戸。〔二〕天の岩戸の略にて昔し天照大神の籠り給ひし岩屋の門または戸の意味。○謠曲「岩戸の前にて之を嘆き。神樂を奏して舞ひ給へば」

いはとり　岩鳥（名）　鳥の名。鵜の鳥の一名。

いはとかぐら　岩戸神樂（名）　神代に天照大神の天の岩戸に隱れ給ひし時。八百萬の神その前に集まりて奏し給ひし神樂を云ふ。

いはとがしはゞ（名）　石の異名。……但し萬葉集を始め古來この詞をよみ來れるもの皆吉野川の歌なるは。特別にかゝる名のつきたる石ありしにや猶よく尋ぬべし。○千五百番歌合「瀧つ波立つかと聞けば吉野川いはとがしはに時雨ふるなり」

いはとのまひ　岩戸の舞（名）　岩戸神樂に同じ。

いはとくわんをん　岩戸觀音（名）　三十三體觀音の一つ

岩屋の中に蹴座するもの。

いはゞどくさ　岩木賊(名)　草の名、少彦のくすねとも云ふ草。

いはゞどこ　岩床(名)　〔一〕岩の平らかになりて床の如き所。〔二〕岩にて成りたる床。即ち人を埋葬したる所。

いはゞちどり　岩千鳥(名)　鳥の名。全身黑色にして只胸のみ白く尾は燕の如し。

いはゞぬいろ　(名)　黃色。◉くちなし色といふより口の無きに寄せて物言はぬ色と戯れ云へるなり。

いはゞほ　巖(名)　大なる石。●見あぐる程の石。○古今「我君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」

いはゞほろ　(名)　いはほに同じ。……ろは助辭なり。(萬葉)

いはゞおこし　(名)　おこし米を飴にて堅め岩の樣にしたるもの。

いはゞをし　岩鴛鴦(名)　鳥の名。鴛鴦の一種にして最も小さきもの。

いはゞおもだか　岩澤瀉(名)　深山に生ずる烏芋に似たる草。

いはゞほすげ　巖菅(名)　草の名。山菅の一種にして岩に生ずるもの。

いはゞわた　岩曲(名)　岩のまがりたる處。○新撰六帖「山川のあたりは氷る岩わたに流れもゆかず鴛鴦ぞ鳴くなる」

いはゞかど　岩門(名)　〔一〕岩にて自然に出來たる門の如き處。●石門。〔二〕天照大神の籠り給ひし天の岩戸を云ふ。○堀川「しらにきて手草の枝にとりかさね歌へば明くる天の岩門」

いはゞかど　岩門(名)　岩の尖りたる端。

いはゞかがみ　岩鏡(名)　草の名。紫色にして茶筌に似たる花咲くもの。●異名は……茶筌草。●嫁の皿。●愛宕酸醬。

いはゞかた　(名)　具の名。いはにしの一名。

いはゞがね　岩根(名)　岩の根元。●又たゝ岩といふに同じ。

いはゞがらみ　(名)　深山に生ずる鋸葉の草の名。

いはゞかんしつ　(名)　石の名。烏石の一名。

いはゞがくる　岩隱(自動四段)　御陵墓の岩に隱れ給ふを云ふ。◉貴人の身まかり給ふを云ふ。●崩ず。●薨ず。(古)

いはゞがくる　岩隱(自動下二段)　四段の岩がくるに同じ。

いはがくれ 岩隱(名) 岩の陰。○源氏「岩がくれの苔の上になみぬて」

いはかげ 岩蔭(名) 岩の蔭の處。

いはがさ 岩傘(名) こでまりの類にして花は白く。一枝に數多の球の如き花咲く灌木の名。又岩手鞠とも云ふ。

いはがき 岩垣(名) 垣の如く岩にて圍まれたる處。○源氏「見し人もなき山里の岩垣に心ながくもはへる葛なか」

いはがきぬま 岩垣沼(名) 垣の如く岩にて圍まれたる沼。(萬葉)

いはがきぶち 岩垣淵(名) 垣の如く岩にて圍まれたる淵。(萬葉)

いはがきもみぢ 岩垣紅葉(名) 岩垣の處に生じたる紅葉。○古今「奥山の岩垣紅葉ちりぬべし照る日の光見るなくて」

いはがみ 石神(名) いしがみに同じ。神として祭らるゝ岩。

いはがしは 岩粕(名) 草の名。いはのかはの一名。

いはよもぎ 岩蓬(名) 草の名。ひきよもぎの一名。

いはたいげき 岩大戟(名) 大戟の一種にして暖國の海邊に生じ夏の頃花咲く草の名。

いはたばこ 岩烟草(名) 谷間に生ずる草の名。夏薄紫の花咲く。●異名は……岩高苣。●岩菜。●水烟草。

いはたおび 岩田帶(名) 祝肌帶の意。◉婦人懷胎五月に及びて吉日を撰び腹に結ぶ帶を云ふ。

いはたたす 岩立(自動四段) 〔一〕岩の如く立つ。〔二〕轉して常磐堅磐に鎮坐し給ふの意。○記「常世にいます岩立たす少御神の」

いはだたみ 岩疊(名) 岩の幾重も重なりて疊み上げたる如くなれる所(萬葉)

いはたけ 岩茸(名) 岩に生ずる菌の一種。其形木耳に似たり。食用に供すべし。又岩苔とも云ふ。

いはたき 岩瀧(名) 岩の上を落つる瀧。

いはれ 所以(名) ゆゑん。◉由緒。●わけ。●子細。

いはれんげ 岩蓮華(名) 古き瓦葺の屋根などに生ずる草の名。葉の形蓮華に似たり。

いはそそぐ 石注(自動四段) 岩の上を流るゝ。

いはつばき 石椿(名) 木の名。石南天の一名。

いはつぼ 岩壺(名) 岩の凹みたる處。

いはつぼ (名) 石の一種、はつたいいしの一名。

いはづたひ 岩傳(名) 岩より岩へと傳はり歩く事。

いはつつじ 岩躑躅(名) 〔一〕岩に生ゐたる躑躅。〔二〕躑躅の一種にして紫の小さき花咲くもの。

いはつなの 〔三〕衣の重の色目の名。……表紅に裏紫。

岩綱の(枕) 岩は岩蔦の轉にて。岩に這ふ蔦は一たび這ひゆき岩を纏ひては再びもとの處へ歸り來るものなれば。たちにかけ。又這ふの意を延ふにかけても云へるなり。

いはつらら 石氷柱(名) 石の名。石の乳に同じ。

いはつむぎ (名) 鳥の名。岩鶺鴒の轉。

いはつぐみ 岩鶫(名) 鳥の名。磯鶫の一名。

いはつきねぎ 岩槻葱(名) 武州岩槻より産する葱。

いはつきもめん 岩槻木綿(名) 武州岩槻より産する木綿。

いはね 岩根(名) 岩の根本。又たゞいはといふに同じ。

いはねかへで 岩根楓(名) 深山に生ずる楓の一種。

いはねぐさ 岩根草(名) 蕨の異名。

いはねまつ 岩根松(名) 岩根に生ゐたる松。

いはな 岩菜(名) 〔一〕草の名。岩烟草の一名。〔二〕草の名。紫ぎばうしの一名。

いはな 岩魚(名) 山川に産する鮎に似たる魚。

いはなづな 石薺(名) 深山の岩に生ずる草の名。又いはたがらしとも云ふ。

いはなんてん 岩南天(名) 灌木の名。南天に似て夏白き花咲く。其形なるこゆりに似たり。●異名は……石椿。

いはなみ 岩波(名) 岩に打ち寄する波。

いはなし 岩梨(名) 高山に生ずる灌木にして其實南天に似たり。●異名は……濱梨。●おやまりんご。●苔桃。

いはらん 岩蘭(名) 〔一〕草の名。胡蝶蘭の一名。〔二〕草の名。風蘭の一名

いはむ (自動四段) 屯する。●群集する。●充滿する。

(紀)

いはむろ 岩室(名) 岩屋。●岩窟。(紀)

いはんや 況(副) ましてや。○謠曲「草木は父母のめぐみ。養ひ得ては花の父母たり。況んや人間に於てをや」

イホウと發音する詞ばいなの順の處にあり

いわう 祝(他動四段) もとは目出度き時には神を祭り猶此上の冥護を祈る事より起りたる詞。◎

祝する。●賀する。●ことほぐ。●祝言を述ぶる。●祝儀をする。

いはふ（他動四段）〔一〕清浄にする。●潔齋する。●物忌する。〔二〕以上の意味より起りて◎神を祭る。〔三〕神を祭るほど心を盡すより起りて。◎大事にする。●最愛する。●いつきかしづく。〔四〕神の守護する。

いはうら　石占（名）　石占に同じ。

いはのど　岩の戸（名）　いはとに同じ。○（月清集）「住みすて、人は跡なき岩の戸に今も松風庭はらふなり」

いはのかは　岩皮（名）　草の名。日蔭の石などに生ずる紫菜の種類。●異名は……岩草。●岩柏。●一葉。●唐一葉。●岩組。

いはく　（名）　わけ。●子細。＝いはれに同じ。

いはく　曰（副）　いふを延べたる詞にて他より引用する言語の前に置く。●いひけるは。●いふやうは。●いふ事には。

いわく　（自動下二段）　稚なくある。●子供らしくある。●思慮なくある。○源氏「まだいわけたる雛遊び」

いはぐつ　（名）　麻鞋の一名。

いはくら　岩倉（名）　石にて造りたる倉庫。

いはくら　磐座（名）　天皇の御座を磐の如く長へにと祝ひて美稱する詞。○祝詞式「天のいはくら」

いはくぐり　岩潜（名）　頰白に似たる小鳥の名。

いはくやす　（枕）　かしこしの枕詞。◎くやすは崩るゝ事にて岩の崩るゝは恐ろしきものなればいふ。○紀「甕汐搗磨速待いはくやすかしこくとも我養はむ」

いはくえの　（枕）　悔ゆにかけて云ふ。◎いはくゑは岩の崩るゝ事。くゑとくゆと同音をかされたるのみ。○萬葉「鎌倉のみこしのさきのいはくゑの君がくゆべき心はもたじ」

いはぐみ　（名）　〔一〕深山に生ずる草の名。●異名は……岩檜葉。●岩松。●岩苔。●草檜葉。●苔松。●岩藥。〔二〕いはのかはの一名。

いはぐも　岩雲（名）　夏の空に出づる雲。＝雲の峰に同じ。

いはぐすり　岩藥（名）　〔一〕草の名。いはぐみの一名。〔二〕草の名。すくなびこのくすれの一名。

いはくすぶね　岩樟船（名）　神代に用ひたる船の名。樟

の木にて造れる船にて岩は美稱なりと云ふ（紀）

いはや 岩屋、寇（名） 岩石を穿ちて造りたる家。◉自然に家をなしたる岩石の洞穴。○記「天の岩屋戸」萬葉「三穗の岩屋」「靜の岩屋」源氏「明石の岩屋」「ねぞが岩屋」源氏「海士の岩屋」公任集「濱の岩屋」夫木「神の岩屋」源氏「山の岩屋」拾遺愚草「菅の岩屋」夫木「峰の岩屋」「岩屋の洞」「岩屋の床」

いはやど 寇戸（名） 岩屋の門。◉岩屋の戸。

いはやなぎ 岩柳（名） 柳に似たる灌木の名。春の頃粉のやうに小さく白き花咲く。◉異名は……粉米柳（こめやなぎ）。◉庭柳。◉雪柳。

いはやぎく 岩屋菊（名） 草の名。油菊の一名。

いはま 岩間（名） 岩と岩との間。○「岩間の水」「岩間の氷」

いはまほし （形。形狀言シク活） 言ひ出でたし。◉語りて見たし。○狹衣「いはまほしき事もつゝましくはづかしくて」

いはまくら 岩枕（名） 岩を枕として寢る事。……是より起りて岩の邊に宿る事をも。又たゝ山中海邊などに旅泊する事をも云ふ。

いはまめ 岩豆（名） 〔一〕草の名。豆蔦の一名。〔二〕草の名。すくなびこのくすれの一名。

いはましごと （名） 言はんとすること。◉言ふべきこと。○源氏「たがいはましごとにか」

いわけなし （形。形狀言ク活） いとけなし。◉小供らし。○源氏「いわけなくおはしましし時より」

いはふぢ 岩藤（名） 藤に似たる草にして夏の頃赤き又は白き小花咲くもの。◉異名は……姫藤。◉庭藤。◉綱藤。

いはぶち 岩淵（名） 岩にて圍まれたる淵。（萬）

いはふね 岩船（名） 神代に空中を乘りたる船。……岩は堅きを美稱せし詞。○萬葉「久方の天の探女（さぐめ）が岩船をとめし高津はあせにけるかも」

いはぶき 岩欵冬（名） 草の名。雪の下の一種。

いはぶち （名） 草の名。いはぶみの一名。

いはこんじゃう 岩紺青（名） 繪の具の名の紺青の一種にして岩の彩色などに用ふるもの。

いはかうじゃ 岩香薷（名） 草の名ぜうかうじゅの一種にして岩に生ずるもの。◉異名は……姫香薷。◉山香薷。

いはごけ 岩苔（名） 〔一〕草の名。卷柏（いはぐみ）の一名。〔二〕菌

いはッこぎく　の名。岩茸の一名。

岩小菊(名)　〔一〕菊の一種にして海邊に生するもの。●異名は鹽菊。●泡菊。●岩戸菊。●裏白菊。〔二〕春菊の一種にして小さき草の名。●異名は……桔梗菊。●姫春菊。

いはッこす

岩越(名)　琴の柱の先の糸を載する處を云ふ……箏または和琴に云ふ詞。

いはッこすげ

岩小菅(名)　草の名。岩に生ずる菅の一種。

いはッあらひィ

(名)　鳥の名。いはくぐりの一名。

いはッあまちゃ

岩甘茶(名)　垣な名にする小さき木の名。其名は甘茶に似て夏の頃白き花咲く。●異名は……谷甘茶。●もくこばな。

いはッさか

磐境(名)　磐は齋の借字。さかはさかひにて其境界内を云ふ詞。◎神を祭る場所。(紀)

いはッざくら

岩櫻(名)　草の名。櫻草の一種。

いはッざさい

岩鷦鷯(名)　〔一〕鳥の名。いはぐぐりの一名。〔二〕鳥の名。瀧鷦鷯の一名。

いはッさき

岩崎(名)　岩の出鼻。

いはッき

磐城(名)　磐城紙の略。

いはッき

岩木(名)　石と木と。……常に無情なる比喩に用ひらる。○萬名「岩木より生り出し人か」

いはッぎりさう

(名)　草の名。雪の下の一名。

いはッぎる

岩切(自動四段)　〔一〕岩を切り穿つを云ふ。〔二〕岩を切る如き勢にて流るゝ水を云ふ。急流のさまなり。○古今「吉野川岩きりとほしゅく水の」

いはッきがみ

磐城紙(名)　半紙の一種。磐城の國より産するもの。

いはッきつつき

岩啄木鳥(名)　鳥の名。いはげらの一名。

いはッきんばい

岩金梅(名)　形へびいちごに似て深山に生ずる草の名。●異名は……岩いちご。

いはッぎく

岩菊(名)　草の名。岩小菊の一名。

いはッざきやうう

岩桔梗(名)　〔一〕雛桔梗の一種にして高山に生ずる草。〔二〕草の名。いせはなびの一名。

いはッぎし

岩岸(名)　岩にて成れる岸。

いはッゆる

所謂(形)　世に言ふ所の。○空穗「いはゆる田舍人」「いはゆる西方淨土」

いはッみわた

石見綿(名)　石州の名産なる綿。

いはみぎんざん

石見銀山(名)　鼠取藥の名。石見の國邇摩郡の銀山より産する礜石もて作れる故に云ふ。

いわし　鰯(名)　魚の名。形は鰺に似て小さく。色青くして銀色を帶び。脂多し。燒きても煮ても生にても食し。又多く干して肥料とす。

いはッしろ　季節外の蹴を云ふ。

いわしぐも　(名)　鰯雲(名)　秋の頃波の如き形に立ち續く雲。之を以て鰯獵のあるしるしとなす故の名。

いはッひば　岩檜名。(名)　草の名深山の山に生ずるもの。

いはッびと　家人(名)　いへびとに同じ。●我家の人。●家内のもの。●家族。(萬葉。東歌)

いはッひゃどの　齋殿(名)　神を祭る殿。

いはッひも　岩紐(名)　草の名。紐蘭の一名。

いはッもと　岩本(名)　岩の根本―岩根に同じ。○新撰六帖「谷陰の岩もとしづく」

いはッもとすげ　岩本菅(名)　岩本に生じたる山菅を云ふ。

いはッもみ　岩縅(名)　高山に生ずる灌木の名。夏の頃薄紅の花咲くもの。●異名は……嶽縅。●樛櫻、●樛松。

いはッもも　岩桃(名)　草の名。苔桃の一名。

いはッせ　岩瀬(名)　岩の上を流るゝ川の瀬。

いはッぜきしゃう　岩石菖(名)　草の名。石菖に似て白き花あり。谷などに生ず。●異名は……花石菖。

いはッすげ　岩菅(名)　草の名。をさすげの一種にして葉小さく岩の間などに生ずるもの。

いはッすすき　岩薄(名)　岩の上に生ねたる薄。

いはッすずめ　岩雀(名)　鳥の名。いわくぐりの一名。

いか　烏賊(名)　海産動物の名。……體は袋の如く足八本ありて鬚と稱するもの二本あり。敵を防ぐ爲めには墨を吐く。

いか　以下(名)　〔一〕これよりしも。●そのあと。●以上に對して云ふ。〔二〕お目見ねの以下の略。……武家の制に主君にお目見ねの叶はぬ身分をいへり。德川時代にはこれを御家人と云ふ。

いか　醫家(名)　醫術家。●醫師。

いか　衣架(名)　衣を掛くる道具。衣桁に同じ。

いか　凧(數)　いかのぼりに同じ。

いが　刺(名)　針の如く突つたもの。●栗の實の外皮にある針の如きもの。

ゐかい　位階(名)　官より賜はる位の階級。●くらゐ。……一位。二位。三位の類。

ゐかい　遺誡(名)　死後に遺し留めたる訓誡。●遺言の

いましめ。

ゐかひ 猪飼(名) 豕(ゐのこ)を飼ふ上古の役。又其役人。

いがひ 貽貝(名) 外黒くして肉赤く黒き毛ある貝の名。●異名は……けかち貝。ゆふ貝。しゅうり貝。●橘桂。●赤貝。●姫貝。●にた貝。●よしはら貝。

ゐがい 遺骸(名) 死後に遺りたるから。●死骸。●なきから。

いかばかり 如何計(副) どの位までに。●どれほど。●どのやうに。

いがばかま 伊賀袴(名) たちつけに同じ。

いかに 如何(副) 〔一〕どうであるか。……問ひかくる詞。○枕「いかにさわやかになり給へりや」〔二〕どのやうにかさぞ。○「いかに面白からん。〔三〕どのやうに。○拾遺「いかに久しきものとかは知る」〔四〕何故に。○六帖「春だにも有りし心を夏衣いかに薄さの今日まさるらん」

いかにぞ 如何ぞ(副) どうして。●いかでか。

いかほど 如何程(副) 如何なる程度に。●どのくらゐに。

いかり 碇(名)錨 船を止むる時水底に沈むる重り……鐵又は石にて作る。

いかり 怒(名) いかる事。●立腹する事。

いかりゐ 怒猪(名) 怒りたる猪。(拾遺)

いかりさう 碇草(名) 草の名。莖毎に枝が三つ。枝毎に葉が三つありて紫色四瓣の花さく。●異名は……ときはぐさ。●うむぎな。

いかりづな 碇綱(名) 碇の綱。=碇繩に同じ。

いかりなは 碇繩(名) 碇に附けたる繩。

いかる 怒(自動四段) 立腹する。●腹を立つる。

いかる 活(自動四段) 活けてある。●活け得る。……生花などに主に用ふる詞。

いかるが 斑鳩(名) 鳥の名。●まめまはしの古名。

いかるがの (枕) よるにかけて云ふ。○「いかるがのゐかの池」

いかほかぜ 伊香保風(名) 上州伊香保にて吹く風。○萬葉「いかほかぜ吹く日吹かぬ日」

ゐかはる 居代(自動四段) をりかはる。●他の人の跡に代りてすわる。●交代する。

いかが 如何(副) 〔一〕どの樣に。●何と。〔二〕どうか。●何とあるぞ。……疑を問ふ詞。=いかん

いかがはし　に同じ。

如何はし、(形。形狀言シク活)　たしかならぬ。●疑はし。

いかかる　(自動四段)　いは發語にて懸るの意。○萬葉「岩の上にいかゝる雲の」

いかだ　筏(名)　木又は竹を組みて川などに流すもの。

いがた　鑄型(名)　金屬にて物の形を鑄る時其熔けたる液を注ぎ入るゝのもの。

いかたる　胃加答爾(名)　胃病の名。

いかだなます　筏鱠(名)　鮎の鱠の作りかたの名。

いがたゝうめ　伊賀專(名)　狐の異名……〔轉じて〕狐の如く人を欺き謀る事。……中人などを云ふ。○新猿樂記「野干坂の伊賀專の男祭」源氏「心しらひのやうに思はれ侍らんも今更にいがたうめにやとつゝましくなん」

いかたのり　筏乘(名)　筏に乘る人。●筏士。

いかだし　筏士(名)　いかだをあやつる人。●筏乘り。○久安百首「となせ川こす筏士の綱手繩」

いかづち　雷(名)　鴨神。●かみなり。●らい。

いかづちのひかり　雷光(名)　雷鳴する時の光。=電光。稻妻に同じ。○佛足石の歌「いかづちの光の如き是の身は」

いかつし　嚴(形。形狀言ク活)　いかめし。●つよし。○「いかつく見ゆる人かな。」

いかないかな　(副)　どうして/\。○狂言「いかなく頁ける事ではおりない」

いかなご　(名)　ひしこに似たる小魚の名。

いかなこと　(副)　どうして。○決して。

いからかす　怒(他動四段)　いからすに同じ。

いからし　嚴(形。形狀言シク活)　いかしめしらし。●さもいかいかしそうな。

いからす　怒らす(他動下二段)　〔一〕怒を起さしむる。●立腹さす。〔二〕かどを立たせる。○「肩を怒らす」

いがむ　咥(自動四段)　獸の嚙みつくばかりにたけり吠ゆる。

いかん　如何(副)　問ひかくるいかにに同じ。

ゐかん　遺憾(名)　のこりおほく思ふ事。●くちをしく思ふ事。=殘念に同じ。

ゐがん　胃癌(名)　病の名。胃に發する腫物。

いかんぞ　如何ぞ(副)　いかにぞに同じ。

いかう　イコウと發音するものはいこの順の處にあ

いかのぼり　鳥賊幟。凧(名)　竹の骨に紙を貼りて糸を附け空中に揚ぐる遊戯品。＝たこに同じ。

いかのもちひィ　五十日餅(名)　五十日の祝ひの餅。……「五十日(いか)」の處を見よ。

いがく　醫學(名)　醫術の學問。

いがぐり　刺栗(名)　いがに包まれたる栗の實。

いがぐりあたま　刺栗頭(名)　刺栗の如き頭。●五分刈り頭。

いかやョう　如何樣　どのやう。●如何なる樣。△(形)―如何樣なる。(副)―如何樣に。

いかけ　鑄掛(名)　金屬にて造りたる器具の損じたる所を金屬の鎔解したるものにて繕ふ事。

いかけぢ　沃懸地(名)　金粉銀粉など蒔きたる漆塗り。略して唯いかげとのみも云ふ。○「沃懸地の金覆輪の鞍」

いかけや　鑄掛屋(名)　鑄掛師に同じ。

いかけし　鑄掛師(名)　鑄掛を業とする人。●いかけや。

いかごやま　伊加胡山　(枕)　いかゞに掛けて云ふ。同音の文字を重れたるなり。

いかで　(副)　どうぞして。●何卒(なんとぞ)。○新勅撰「皆人のいかでと思ふ萬代のためしと君を祈る今日かな」(雅)

いかさま　如何樣(副)　いかにも。●なるほど。

いがき　(名)　齋垣(名)　いみがきの意。◎神社の玉垣。○萬葉「千早ぶる神のいがきもこねぬべし」(雅)　蜘蛛のかけたる巣。○小大君集「彦星の來べき宵とやさゝがにの蜘蛛のいがきもかけて見ねけん。(雅)

いかめし　嚴(形。形狀言シク活)　〔一〕嚴重なり。〔二〕猛々し。

いがみあひィ　啀合(名)　いがむ事。

いがみあふ　啀合(自動四段)　互にいがむ。

いかし　嚴重。茂(形)　いかめしき。●重大なる。●盛大なる。●繁榮なる。○「嚴矛(いかしほこ)」「重日(いかしひ)」「茂穗(いかしほ)」(古)

いかし　嚴(形。形狀言ク活)　いかめし。●大なり。●たけ〳〵し。●あら〳〵し。○源氏「恐ろしげにいかきものども一山に滿ちて」(雅)

いがもち　刺餅(名)　眞粉餅の上に餅米を附けて蒸したるもの。◎形、栗の。いがに似たる故に云ふ。

いかものづくり　嚴物造(名)　いかめしき造りかた。……

……鞘に鹿の皮の尻鞘をかけたるを「いかものづくりの太刀」と云ふ。

いかものぐひ (名) 善悪を擇ばず亂暴食ひする事。

いかす 生。活(他動四段) 〔一〕死を救ふ。●蘇生せしむる。〔二〕生きながらへしむる。〔三〕活用する。

いよ 伊豫(名) 伊豫砥の略。

いよいわし 伊豫鰯(名) 伊豫の名産なる鰯。

いよいよ 彌。愈(副) 〔一〕彌彌の意。◎ます〳〵。●なほ〳〵。○「いよ〳〵御多祥奉賀候」〔二〕きっと。●必定。●まことに。○「いよ〳〵決心せざるべからず」

いよど 伊豫砥(名) 伊豫より産する白色軟質の砥石。

るよる 居寄(自動四段) よりゐるに同じ。近づき座すゐる云ふ。○源氏「近くゐよれば若も目さまし給ふ」

いよかづら 伊豫葛(名) 秋小さき花咲く蔓草の名。●異名は白前。

いよよ (副) いよ〳〵の略。

いよよか いよやかに同じ。△(形)—いよゝかなる。(副)—いよよかに。

いよよし 伊豫葭(名) 草の名。姫葭(ひめよし)の一名。

いよだつ (自動四段) よだつに同じ。身の毛の立つ心地のする。●ぞっとする。……恐ろしき時または深く身にしむ時の感じ。○夫木「毛もいよだちぬすゞろ寒さに」

いよぞめ 伊豫染(名) 絹地に染めつくる地摸樣の名。……簾を透かして眺むる時木目のやうにちら〳〵と見ゆる形なり。

いよう 異容(名) 一種特別なる姿。●異なりたる風體。●異風。●異形。

いやョう 異樣(名) 異なる有樣。●變なる風体。△(形)—異樣なる。(副)—異樣に。

いよのゆげた 伊豫湯桁(名) 昔し伊豫の國道後の溫泉には仕切の桁多くありたる故數多きたとへに云ふ。(雅)

いよやか 高く聳えたる有樣。△(形)—いよやかなる。(副)—いよやかに。

いよまさ (名) 伊豫まさがみの略。

いよまさがみ 伊豫柾紙(名) 伊豫より産する柾紙の一種。多く錦繪等を摺るに用ふ。

いよこざね 伊豫小札(名) 鎧の札(さね)の名。頭を一文字に

し尖端を丸くせしもの。

いよす (名) 伊豫簾に同じ。○枕「いやしげなるもの。いよすの筋ふとき。」

いよすだれ 伊豫簾(名) 〔一〕昔し伊豫の名産たりし簾の名。古來上品なるものとして有名なり。○夫木「逢ふ事の間遠に編める伊豫簾」〔二〕貝の名。あしがひの一名。

いた 板(名) 〔一〕木を挽き割りて薄くせしもの。〔二〕板の如き形なるもの〻總名。

いたい 異體(名) 異風な姿。●異なる體裁。

いたゐ 板井(名) 側を板にて造りたる井戸。

いたいたぐさ (名) 鋸草の一名。

いたいたし 痛痛(形。形狀シク活) いたはし。●甚た氣の毒なる。

いたいけ (名) 可愛らしき事。●いたはしき事。△(形)—いたいげなる。(副)—いたいけに。(動)—いたいけす。○狂言「いたいけしたる物なり。張子の顔や塗兒」

いたばり 板張(名) 〔一〕板にて張る事。○「壁を板張にする」〔二〕板にて張りたるところ。○「板張の天井」

いたばし 板橋(名) 板にて造りたる橋。

いたべい 板塀(名) 板にて造りたる塀。……土塀に對して云ふ。

いたど 板戸(名) 板にて造りたる戸。

いたどり 虎杖(名) 草の名。春の頃筍に似て野に生えたるを拔きて子供等が戲に食する草。●異名は……いたづり。●すかんぽ。●すゐすゐ。又古名は……さいたづま。

いたち 鼬(名) 鼠に似て大なる動物の名。

ゐたち 居立(名) 立居に同じ。

いたちばじかみ 鼬薑(名) 〔一〕山椒薑といふ木の一名。〔二〕はそきといふ木の一名。

いたちばぜ 鼬櫨(名) 連翹と云ふ木の一名。

いたちうを 鼬魚(名) 鼬の色に似たる魚の名。又あぶらめ みしまだら なまだらなど云ふ。

いたちのまかげ (名) 遠方を見る爲めに目の上に手を翳すをまかげと云ふ。目陰(目を陰にする)の意なり。いたちと云ふ獸は常に左樣なる手つきをするものゆゑに此語あり。

いたちのけたがへし 鼬桁返(名) 一名。かますみと云ふ木の

いたちのあし
いたちのみち

鼬足(名)　草の名又狐のぼたんとも云ふ

(名)　いたちといふ獸は一度過ぎたる道を再び通らぬと言ひ傳へたる故ゾ。◎懇意なりし友人などの往復の中絶する事。

いたちぐさ

鼬草(名)　れんげうと云ふ草の一名。

いたちぐも

鼬雲(名)　夏の空に出づる雲を云ふ。

いたちごっこ

(名)　二人以上にて互に手の甲をつまみ合ひ。最下のものは又最上に還り。此くして何時までも續くる子供の遊び。……〔轉じて〕變化ある如く見ゐて實は同じ事を繰返す事に用ふ。

いたちあざみ

鼬薊(名)　草の名。菊の葉に似て薄紫の花さく。

いたちささげ

鼬大角豆(名)　豌豆に似たる草の名。一名を山豌豆とも云ふ。

いたり

至(名)　〔一〕至極。●極點。○「迷惑の至り」〔二〕(雅)智慧。思慮。●物事に深く行きわたる事。○源氏「いたり深き御心にて」同「心のいたり少なからん繪師はかき及ぶまじ」

いたりて

至(副)　甚しく。●極めて。●至極。●よほど。

いたる

至。到(自動四段)　〔一〕到着する。●達する。●爲る。〔二〕來る。○「老のいたる」〔三〕ゆきわたる。●行き届く。○源氏「公私につけてむげに至らずしもあらん」同「いたらぬくまなき心にて」

いたるまで

(副)　及ぶまで。○「上君王より下萬民にいたるまで」

いたはり

(名)　骨折り。●いたはる事。●大事に思ふ事。●ふびんに思ふ事。●あはれむ事。

いたはりなし

(形。形狀言ク活)　大事にも思はぬの意。●骨も折らぬの意。●苦勞もなきの意。○源氏「此いたはりなき白妙の衣は」同「何のいたはりもなく立てたる寢殿」

いたはる

(動)　〔一〕心を勞する。●骨を折る。●大事に思ふ。●いたはしく思ふ。●あはれむ。●ふびんがる。●氣の毒がる。●御苦勞に思ふ。〔二〕病に罹る。●病苦を感ずる。○空穗「いたはる處ものし給ふとなん承る」

いたはるること

(名)　病氣。●いたづき。

いたはし

(形。形狀言シク活)　〔一〕いたはるべくある樣子。●苦勞らしい。●可愛そう。●憫むべ

し。●氣の毒な。●愛らし。●大事に思ふ心をあらはす詞。〔二〕病まし。●惱まし。●すべて病苦の形容に用ふ。●萬葉「おのが身しいたはしければ」

いたか（名）　功德のため卒都婆を書きて之を用へ流し讀經して錢を乞ふ僧。○職人盡歌合「いたかの經の月の空讀み」

いたがひィ　板具（名）　具の名。まとがひの一名。

いたがひィ　櫪飼（名）　馬を飼ふ古の一方。板敷の厩の中に放ち飼にする事。（延喜式）

いたかる（自動四段）　痛みを感する。●痛く思ふ。●甚しく思ふ。

いたかね　板金（名）　金屬の延べ板。

いだかこふ　抱（他動下二段）　抱くの延音。○竹取「かくや姫をいだかへて」

いたがこひィ　板圍（名）　板にて造りたる假の圍ひ。

いたがき　垣板（名）　板にて造りたる垣。

いたがす　板糟（名）　酒糟の板の如き形したるもの。

いただく　戴（他動四段）　〔一〕頭の上に載する。〔二〕項戴する。即もらふの敬語。○「神酒をいただく」〔三〕仰き尊ぶ。○「師として戴く」

いただたみ　板疊（名）　板を心として造りたる疊。

いただてのうま　板立馬（名）　神に奉る爲めに板にて作れる馬の形。眞の馬を奉る代りに用ふ。（北山抄）

いただき　項（名）　物の最も上の部分。●頭の最上部。●山の最上部。……巓とも書く。

いただきまつる　戴奉（他動四段）　〔一〕いただくの敬語。〔二〕大切に仕へ奉る。

いただきもち　戴餅（名）　四月八日灌佛會に用ふる餅。略していたゞきとのみも云ふ。

いただきもちひィ　戴餅（名）　〔一〕正月元日身祝ひの爲め小兒の頭に戴かしめたる鏡餅。〔二〕上に云へる如き餅を戴く事。○紫日記「正月朔日若宮の御いただきもちひの事。

ゐたつ　居立（自動四段）　居たり立ったりするを云ふ。●立居せわしくするを云ふ。……おもに氣の落ちつかぬ時。世話を燒く時などに用ふ。○源氏「ゐたち覺しいとなみて」

いたづかはし（形。形狀言シク活）　いたづくべくある有樣。●苦勞らし。●煩はし。

いたづら　惡戲（名）　無益有害なる戲。●わるふざけ。

わるじゃれ。●ぢゃうだん。……〔轉じて〕男女の私通。●野合。

いたづら　徒(名)　徒勞。●無益。●不必用。……「いたづらになる」は多く死ぬる事を云ふ。○源氏「かくはかなくて我もいたづらになりぬるなめり」……「いたづらになす」は多く死なしむる事を云ふ。○古今「夏虫の身をいたづらになす事は」〔一〕(形)―いたづらなる。〔二〕(副)―いたづらに。

いたづらいね　徒寢(名)　いたづられに同じ。○後撰「秋の田のかりそめぶしもしてけるがいたづらいねを何につまゝし」(徒寢を徒稻にかけていへり)

いたづらいね　徒稻(名)　みのらぬ稻。

いたづらね　徒寢(名)　無益なる寢やう。●まだれ。●むだれ。●獨寢。●逢はんと欲する女に得逢はずして空しく寢る事。―いたづらいねいたづらぶしと同意。○中務集「人まちて泣きつゝ明かす夜な夜なはいたづらねにもなりぬべきかな」(寢の文字に音を含めて云ふ)

いたづらこ　惡戲兒(名)　惡戲をする子供。

いたづらごと　徒事(名)　無益の事。●不必用の事。

いたづらごと　徒言(名)　無益の言語。●むだぐち。

いたづらぶし　(名)　私通。●野合。

いたづらじに　徒臥(名)　いたづられに同じ。○源氏「君はとけても寢られ給はず。いたづらぶしとおぼさるゝに」

いたづらびと　徒死(名)　無益の死に方。●犬死に。

いたづらもの　徒人(名)　〔一〕世間の役に立たぬ人。●世に在りても益のなき人。〔二〕零落せし人。●罪ある身。

いたづらもの　惡戲者(名)　〔一〕惡戲をする人。●わるふざけする人。〔二〕鼠の一名。◎家を荒らし器物食物を荒らし惡戲をする故に云ふ。

いたづらもの　徒者(名)　無益なる人。

いたづく　遙行者(名)　私通野合を爲す人。●遙奔なる者。●不義密通の行を爲す人。

いたつけ　勞(自動四段)　氣を痛むる。●心を勞する。●いたはる。

板付(名)　羽目板などを打ちつくるに用ふる釘の名。

いたつけざうり 板付草履(名) 草履下駄。●草履の裏に板を付けたるもの。

いたって 至って(副) いたりてに同じ。

いたつき 平題箭(名) 鏃の一種。形小さくして、底の平たきもの。多くは弓の稽古に用ふ。

いたづき 勞(名) いたづく事。

いたなく 甚泣(自動四段) いたく泣くの略。●甚しく泣く。○記「あまたむかるのをとめ。いたなかば人知りぬべし」

いたらがひィ (名) いたやがひの一名。きさがひの一名。

いたむ 痛。傷(自動四段) 〔一〕身體または心中に苦惱の生ずる。●いたく思ふ。●苦しく思ふ。●つらく思ふ。悲しく思ふ。●憂ほしく思ふ。●氣の毒に思ふ。〔二〕物品の破損する。●こはれる。

いたむ 悼。傷(他動四段) 人の悲しみに同情を表する。●死を哀しむ。●愁傷する。

いたむ 痛。傷(他動下二段) 〔一〕身體または心中に苦惱を生ぜしむる。……前のいたむを參考せよ。〔二〕物を破損せしむる。●こはす。傷つくる。〔三〕革を打ちかためて製する。〔四〕油にて物を煎る。

いたん 異端(名) 異なりたる筋道。●正理に戻りたる事。●我信する外の宗教。●邪宗。異教。

いたんじゃ 異端者(名) 我信する教を奉ぜざる他宗の人。

いたう イトウにあり。

いたのま 板間(名) 板張の間。●家の中にて壁を敷かず疊をあらはしたる處の總名。

いたのぎく (名) 松虫草に同じ。

いたのもの 板物(名) 板を心に入れて疊みたる織物。巻きものに對して云ふ。

ねたく 委托(名) 委れ任す▸△(動)—委托す。

いだく 抱(他動四段) 〔一〕腕と胸とにて物を支ふる。〔二〕人の物を抱く如き形をなす。○「三山の間に一平原を抱く」〔三〕心中に留めて持つ。○「大志を抱く」

いたぐら 板藏(名) 板造りの倉庫。

いたや 板屋(名) 〔一〕板葺屋根。〔二〕板葺屋根の家。

いたやがひィ 板屋貝(名) 常に杓子にする貝の名。●異名は……いたら貝。●女郎貝。●帆立貝。●杓子貝。

いたやかた 板屋形(名) 板にて造りたる舟車などの屋

根。

いたやね 板屋根(名) 板葺の屋根。

いたやぐし 痛矢串(名) 痛き矢の串の意。●身に串の如く貫き徹りたる矢。○記「五瀬命御手に富彦が痛矢串を負ひ給ひき」(古)

いたま 板間(名) 〔一〕板と板とのすきま。……多く屋根の葺板のすきまを云ふ。○後拾「雨ふれば闇の板間も葺きつらんもりくる月はうれしかりしを」〔二〕板の間の略。

いたまへ 板前(名) 俎板の前に坐する人。即ち料理番。●料理人。……〔轉じて〕料理の鹽梅をも云ふ。

いたまき (名) 中古時代の小兒の遊戯。……歌留多の類にや。○新撰六帖「をさな子の春の始めのいたまきに」

いたまし 痛まし(形。形狀言シク活) 我心の痛むほどの感情。●氣の毒な。●可愛そうな。●ふびんな。

ゐたけ 居丈(名) 坐して居る時の身の丈。●すわりての脊だけ。○空穗「居丈三尺ばかりの銀の狛犬」

いたける 五十猛(名) 神の御名。木の種を蒔き弘めたる神。

ゐたけだか 居丈高(名) 高腰にすわるを云ふ。……人を叱る時などに知らず〳〵なる姿勢。○「居丈高になりて」

いたけそ 伊太祁曾(名) 五十猛神に同じ。

いたけし (形。形狀言ク活) 甚し。……いたしに同じ。

いたぶ 傷(自動四段) いたむに同じ。

いたぶ (自動四段) 傷むるの意。●他を傷ませて物を食ぶるを云ふ。

いたぶ (自動上二段) いたくなる。●甚しくなる。●ひどくなる。

いたぶろ 板風呂(名) 板にて造りたる風呂。

いたぶね 板舟(名) 板にて造れる舟。……組造の舟を云ふ。假初なる小舟を云ふ。○夫木「早苗とる深田にわたす板舟の。

いたぶき 板葺(名) 〔一〕板にて屋根を葺く事。●こけらぶき。〔二〕板葺にしたる屋根。

いたこ 潮來(名) 潮來節の略。

いたご 板子(名) 船の楊板。

いたごと 痛事(名) 痛い目。●つらい目。

いたこんがう　板金剛(名)　草履下駄。●板付草履。草履の裏に板を着けたるもの。

いたこむし　(名)　蝸牛の一名。

いたこぶし　潮來節(名)　下總の潮來より流行し始めし唄の節。

いたごし　都々一の種類。

板輿(名)　棟上。棟立。四方輿。木輿とも云ふ。左右と後の三方を板張にし。前面に簾を下げたる輿。

いたえん　板椽(名)　板にて張りたる椽。

いたで　痛手(名)　重傷。●深傷。○著聞「いたでを負ひて如何にものぶべくもおぼえぬに」

いたてに　(副)　早く。●迅速に。●いっさんに。○夫木「追風にいたてに走れ筑紫舟しきなみの關せきさぁむとも」

ねだてん　韋駄天(名)　武を以て佛法を守護する神。昔し足疾鬼といふ魔王ありて佛舍利を奪ひ去りたるを追ひかけ忽に取返したるにより足はやき神なりと言ひ傳ふ。

韋駄天走(名)　韋駄天の如く走るの意。◎最も迅速なる走り方。

いたぎれ　板片(名)　板のきれはし。

いため　板目(名)　〔一〕板と板との合せ目。〔二〕板の木目。〔三〕板の木目の不規則なるもの。

いためぼり　〔四〕板ためぼりの略。

傷(名)　傷たむる事。

いためがは　板目彫(名)　木目の板へ木口彫にする事。

書畫などの彫刻に云ふ。

撓革(名)　練り固めて厚くせし革。……甲冑などに用ふ。

いためがみ　(名)　幾枚も貼りかためて造りたる原紙。……帳面の表紙などに用ふ。

いためぎたへ　板目鍛(名)　一種の鐵の鍛ひかた。……甲冑など造る時の詞。

いためじほ　(名)　燒鹽の種類。

いためじゃく　木目笏(名)　木目ある板にて造りし笏。

いたみ　傷。痛(名)　〔一〕身體を傷つけ。又は病に罹りたる時感ずる苦惱。〔二〕憂または悲しみによりて心中に感ずる苦惱。〔三〕人の憂苦悲哀を同情に感ずる事。●愁傷。●悔み。〔四〕物品の破損。●こはれ。

いたみいる　伊丹(名)　伊丹酒の略。

痛入(自動四段)　心に深く痛む。●面目な

く思ふ。●氣の毒に感ずる。

いたみざけ 伊丹酒(名) 攝州伊丹の名產の酒。

いたし 痛(形。形狀言ク活) (一)身に痛みを感ずるありさま。○「頭いと痛くて」(二)心に苦痛を感ずるありさま。○萬葉「秋といへば必ず痛き」(三)甚しの意。……是に二つの用法あり。(イ)直に甚しきつい ねらい ひどい 大そうなど譯すればよきもの。○古今「須磨の海士の鹽燒く煙風をいたみ(風ガヒドサニ)思はぬ方にたなびきにけり」公忠集「行きかへり船路はいたく(大ソウ)なれにけり」伊勢「雨もいたう(キツウ)降りければ」(ロ)同じ意味なれど處により此詞の下に他の賞美する形容詞副詞を略したるもの。○源氏「造れるさま木深くいたく(いたくふき)所まさりて見處ある住居なり」同「さすがにいたくも(いたく殊勝にも)したるかな。かけても見及ばぬ心ばへよとほゝゑまれ給ふ」

いたじとみ 板蔀(名) 板張にしたる蔀戸。

いたしぬく 出拔(他動四段) 欺く。●先を越す。●自分は關係せぬ如く見せかけて人より先に手を出す。

いだしづま 出褄(名) 下着の褄の外に出づる樣に着る事。

いだしうちき 出袿(名) 古へ公卿の直衣を着る時に。其下着なる袿が外に見ゆるやうにする裝束の着用法。

いだしうた 出歌(名) 五節の時の歌曲。

いだしぐるま 出車(名) 古へ儀式の時に飾り立てゝ其場へ出だしたる車。その式に連なる女官達の乘る料なり。○源氏「八省に立て續けたる出だし車どもの」

いたじき 板敷(名) 床を板張にしたる處。●板の間。●板椽。

いたしきぬ 出衣(名) 古へ公卿の直衣などを着る時。衣のすそを外に出す樣に着る事。

いたじめ 板締(名) 染め方の一法。板にて締めて染むる仕方。

いたびかづら 木蓮子(名) 蔓草の名。又略していたびとも云ふ。

いたべうし 板表子(名) 板にて造りたる本の表子。

いたびっきれ（名）　手本。書畫帖などの折本に用ふ。板引切の訛り。いたぎれに同じ。●板の小片。

いたびさし　板廂（名）　板のひさし。

いたひき　板挽（名）　〔一〕材木を板に挽き割る事。〔二〕板挽を業とする人。

いたびき　板引（名）　漆塗の板へ絹に糊をして張り付け。之を乾かして引き離し艷を出だしたるもの又引倍木とも云ふ。……古代裝束の製造に用ふ。

いたす　致（他動四段）　到らしむる。●達する。○「志を致す」〔二〕爲す　行ふの敬語。○「拜見致候」

いだす　出（他動四段）　、すべて物事を内より外に運ぶ働作。●だす。●あらはす。●發する。

ゐれい　威靈（名）　威光ある神靈。

ゐれい　違例（名）　〔一〕例式に違ふ事。〔二〕病氣。●わづらひ。△（動）―違例す。○謠曲「習はぬ旅の勞れにや以ての外に違例し」

いれば　入齒（名）　人造にて入るゝ齒。●義齒。

いれぼくろ　入黑子（名）　黑子の如く戀人の名などを腕などに入墨する事。

いれちがふ　入違（他動下二段）　入るべき物を入れずして入るまじき物を入るゝを云ふ。●入れ間違へる。

いれちがへ　入違（名）　入れ違ふる事。

いれぢゑ　入智惠（名）　他人より入れたる智惠。

いれかたびら　入帷子（名）　衣類を箱に入るゝ時之を包むきれ。……服紗風呂敷の類なり。

いれかふ　入替（他動下二段）　彼と此と器を替へて物を入るゝ。●もと有りし物を出だして新に他の物を入るゝ。

いれかへ　入替（名）　彼と此と器を替へて物を入るゝ事。●もと有りし物を出だして新に他の物を入るる事。○「箱の入替」「魂の入替」

いれがみ　入髮（名）　女の髮を結ふ時自毛の少なきを補ふため他の髮を入れ足す事。●いれげ。

いれつ　以列（名）　五十音にていきしちにひみいりぬの十音を稱ふ。イリヨウと發音する詞はいりの處にあり。

いれう　入毛（名）　女の髮を結ふ時自毛の少なきを補ふため他の髮を入れ足す事。●かもじ。

いれげ

いれふだ 入札(名) にふさつ。●投票。

いれぶつじ 入佛事(名) 〔一〕法事の費用。〔二〕物を贈りて返禮なきこと。

いれふで 入筆(名) 出來上りだる書き物に更に書き入るる事。●書き添へ。●加筆。

いれこ 入子(名) 一つの器の中に同じ形にて小なる器を入るゝ事。○「入子の箱」「入子の蓋物」

いれき 入木(名) 板木の彫り直しをする時その部分だけ他の木を埋め込む事。

いれめ 入目(名) 人造にて入るゝ目。●義眼。

いれじ 入字(名) いれもじに同じ。

いれひも 入紐(名) 差し入るる紐の意。◎袍、直衣、狩衣などの上前と下前とを結びとむる紐。すなはち下前のは輪にして上前のは鈕の如く輪にさし入るゝやうになりたるもの。……「入紐を結ぶ」などいふ詞あるほ。中島廣足云はく「入紐の形は結び玉したるを輪にさし入れて置く紐なり。古はなべて結び紐なりけんを後入紐となりても猶むすぶと云ふは詞のみなるべし」

いれひもの (枕) 同じ又さすにかけて言ふ。◎同じにかゝるは裝束を同じく一つに結び付くる紐なればなるべく。さすにかゝるは輪に差し通す故なるべし。○古今「いれひもの同じ心に六帖」いれひもの さしてきつれど」

いれもとゆひ 入元結(名) 元結の上に掛くる元結。○童女髮飾の具。〔圖〕

いれもじ 入文字(名) 歌誹諧などに隱してよみ入るゝ文字。……たとへば古今集の「あはれてふことをあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらん」は櫻の文字を入文字にしたり。と云ふが如し。

いれずみ 黥(名) 〔一〕古代の刑罰の名。身體を傷つけ墨を差し入れて犯罪人のしるしとしたるもの。〔二〕身體に種々の彫物する事。……ほりものに同じ。

いそ 磯(名) 〔一〕岩石多き海岸の地。〔二〕海岸の總稱。

いそ 五十(數) ごじふ。

いそ (名) 冠の額際の處。

いそいり 磯熬(名) 鯛の吸物に芹を入れたるもの。

いそいそ (副) いさみ〳〵の意。◎心の勇みて落つかれぬさま。△(又)—いそ〳〵と。

いそはく　（自動四段）　勤むる。●いそしむ。●よく働く。○萬葉「いそはく見れば神ながらならし」（古）

いそばふ　（自動四段）　うかれあそぶ。（紀）

いそべ　磯邊（名）　磯に近きところ。●いそのほとり。

いそべぐさ　磯邊草（名）　草の名。藤袴に似て夏の頃白き花さくもの。

いそぢ　五十（名）　五十歳の年齡。○「五十になりける頃」●五十年の月日。○「五十の春秋」

いそぢどり　磯路（名）　磯邊の路。

いそわ　磯回（名）　磯のまばり。●磯のほとり。●いそべ。○夫木「淡路島いそわの櫻さきにけり」

いそわし　磯鷲（名）　海邊に居る鷲の一種。

いそがひ　磯貝（名）　〔一〕磯に漂ひ着きたる貝殼。〔二〕貝の名。嫁が皿の一名。〔三〕又千鳥貝、雀貝。簑貝など云ふ貝の一名。

いそがひの　（枕）　磯に漂ひ着きたる貝殼は多く割れて片方なる故。◎かたにかけて云ふ。○萬葉「磯貝の片戀のみに」

いそがはし　（形。形狀言シク活）　いそがしに同じ。

いそがへり　五十返（副）　五十度。●何度も〳〵。○六帖「岩の上の松の梢にふる雪はいそがへりふれ後までも見ん」

いそがき　磯牡蠣（名）　牡蠣の一種。

いそがし　忙（形。形狀言シク活）　世話し。●多忙。●繁務。●多用。

いそがしがる　（自動四段）　多忙に思ふ。●世話しがる。

いそがす　急（他動下二段）　急がしむる。●せきたてする。

いそれんげ　磯蓮華（名）　暖國に生ずる草の名。

いそつぐみ　磯鶫（名）　鳥の名。磯鶫鳥とも岩鶫とも云ふ。暖國の海邊に多し。

いそね　磯寢（名）　磯に宿る事。●海邊に泊する事。○月清「秋の夜のあはれも深き磯寢かな」

いそね　磯根（名）　磯に同じ。○夫木「沖つかた磯根に近き岩枕」

いそねまつ　磯根松（名）　磯に生ひたる松。○拾玉「田子の浦に藤さきぬらし磯根松梢染めゆく紫の波」

いそな　磯菜（名）　食用に供すべき磯草の總名。○源重之集「磯菜づむ海士ならばこそ」

いそなどり　（名）　鳥の名。千鳥の一名。

いそなぐさ　磯菜草（名）　磯菜に同じ。○夫木「須磨の海士の朝夕つめる磯菜草」

いそら　磯等（名）　神樂の曲名。

いぞん　異存（名）　他に異なりたる存ぜ寄り。

いそむし　磯蟲（名）　鯛さよりなどに寄生する虫の名。船虫に似たり。

いさッう　意想（名）　意中の想像。●心のうちのかんがへ。●おもひ。●こゝろ。

いそふッ　（自動四段）　挑む。

ねざッうり　菌草履（名）　菌といふ草にて造りたる草履。

いそのかりがね　磯雁金（名）　磯山椒に同じ。

いそのかみ　石上（名）　ふるきの枕詞なる故に轉じて〔一〕舊にされたるもの、意に用ふ。○大和「白露の起臥たれを戀ひつゝん我はきゝおはず石の上にて」〔二〕古きもの、意にも用ふ。○拾遺「春くればまづぞ打見る石の上めづらしげなき山田なれども」

いそのかみ　石上（枕）　大和の國山邊郡石上といふ處に布留といふ地名あるによりて。◎ふるに云ひかく。○萬葉「いそのかみ降るとも雨にさはらめや」……〔轉じて〕ふるといふ詞の變化なるふりにも云ひかく。○六帖「いそのかみふりにし奈良の都にも」

いそのたちはき　（名）　猿の異名（袖中抄）

いそく　夷則（名）　〔一〕十二律の一にして七月に當るもの。〔二〕七月の異名。

いそぐ　急（自動四段）　早く其事を爲し終らんとする。●氣をせいてする。

ねぞく　遺族（名）　死したる人の跡に遺る家族。

いそや　磯屋（名）　磯の家屋。○新古今「藻鹽燒く海士の磯屋の夕煙」

いそやかた　磯舘（名）　磯屋に同じ。○夫木「荒れ果てゝ人も渚の磯舘いつより海士の住みうかれけん。

いそやき　磯燒（名）　菓子の名。小麥の粉を水にて溶き餡を包みて燒きたるもの。

いそま　磯間（名）　磯と磯との間。●磯の内。○貫之集「白波のよする磯間をこぐ舟の」

いそまつ　磯松（名）　〔一〕磯に生ねたる松。〔二〕いそはなびの一名。

いそまくら　磯枕（名）　貝の名。

いそまくら 磯枕(名) 磯の岩などを枕にして寢るの意より起りて。◎磯の旅寢。○堀川「こよひや磯に磯枕する」

いそまめ 磯豆(名) 自然生の蔓草の名。又濱なたまめとも云ふ。

いそぶり (名) 磯に打寄する波。○土佐「磯ぶりのよする磯には年月をいつともわかぬ雪のみぞ降る」

いそふぐ 磯河豚(名) 河豚の一種。

いそざんせう 磯山椒(名) 海濱に自然に生ずる灌木の名。其葉山椒に似たる故此名あり。濱山椒とも云ふ。

いそき (名) 杉の異名。

いそぎ 急(名) 〔一〕いそぐ事。●急用。〔二〕準備。◆支度。○「春のいそぎ」「旅のいそぎ」

いそぎもの 急物(名) 急ぎて作る物。●急用の仕事。

いそめばる 磯目張(名) 魚の名。藻魚(もうを)の一名。

いそめく (自動四段) いそ〳〵する。●忙はしげにする。

いそめき (名) 磯そめく事。

いそし (形。形狀言シク活) 勤むるありさま。●いそしむありさま。

いそしむ 勤(自動四段) 勤むる。●勉強する。●骨折る。

いそひよどり 磯鵯(名) 磯鶺鴒(いそつぐみ)に同じ。又たゞにいそひよどのみも云ふ。

いそもと 磯本(名) 磯の根方。●磯のほとり。○萬葉「大海の磯もとゆすり立つ波の」

いそもち 磯餅(名) 海草の名。あまのりの一名。

いそもの 磯物(名) 海邊の產物。海苔貝などの類。(十六夜)

いつ 稜威(名) たけき事。◆つよき事。●威光ある事。○「君のみいつ」△(形)—いつの。○祝詞式「天の八重雲をいつの道別にちわきて」

いつ 何時(代) 定まらぬ時を指す詞。◆いづれの時。

いつ 何時(副) 何れの時に。

いつ 一(數) 〔一〕いちひとつに同し。○「天下を三分して其一を有つ」〔二〕或る。○「一書」「一本」「一說」〔三〕同一。◆全體。○「一般」「一統」

いつ 五(數) 十の半分。●ご。

いづ 殿(名) 清淨なる事。●神聖なる事。△(珍)—いづの。○祝詞式「いづの眞屋」「いづの蓮」

いづ　出（自動下二段）　〔一〕目前に現はるゝ。●外面に現はるる。●其處に現はるゝ。●內より外に行く。○「月出づ」「學校に出づ」「門を出づ」〔二〕往く來るの敬語。○「罷出可申候」「御出被下候」

いづ　出（他動下二段）　出だすの古き用法。○人を呼び出づ」「物を取り出づ」「いとなみいづ」

いづ　（自動下二段）　氷る。●いでる。（堀川）

いっぱ　一派（名）　一つの分派。●流義の分れ。

いっぱ　（句）　言へば。●言ふは。○謠曲「夫れ久方の天と言っぱ」

いっぱい　一杯（名）　〔一〕器物に物の充分滿つる事。〔二〕悉皆の意。○「今月一坯はかゝるべし」

いっぱいさぎ　一杯鷺（名）　鳥の名。鷺の一種にて最も小きもの。

いっぱいきげん　一杯機嫌（名）　酒を一杯飲みたる機嫌。●酒の上の元氣（げんき）。

いっぱかり　何時許（副）　いつごろ。●いつの程。○躬恒集「白雪もまだ消なはてぬ山里はいっぱかりかは夏を知るらん」

いっぱん　一般（名）　一通り。●普通。●一同。●全體。●總體。△（形）—一般の。（副）—一般に。

いっぱん　一斑（名）　一部分。●端緒。

いっぱのまつ　五葉松（名）　ごようふの松に同じ。

いっに　〔一〕只一筋に。○「一に之に歸す」〔二〕或は。●別に。○「大日本一に和と稱す」

いっぽん　一本（名）　或る本。●別の本。○「一本には云々とあり」

いっぽんばし　一本橋（名）　一本の木を渡して橋としたるもの。●獨木橋。●丸木橋。

いっぽんがかり　一本掛（名）　蹴鞠の庭には松柳櫻楓などを植うるが正式なるを略して其內の木を一本植うるを云ふ。

いっぽんだち　一本立（名）　〔一〕獨立。●人に依賴せぬ事。●一人前充分なる力ある事。〔二〕孤立。●助力ある人のない事。●相談相手のない事。

いっぽんさっう　一本草（名）　草の名。びきおこしの一名。

いっぽんうゑ　一本植（名）　一本掛りに同じ。

いっぽんきやきょう　一品經（名）　法華經二十八軸すなはち二品に部門の分れたを。僧の佛前にて讀誦する時。各其受持とする一品の經卷を云ふ。（佛教）

いっぱう 一方(名) 一つの方角。●或る方角。○「三方は山一方は海」

いづべ 嚴瓮(名) 何邊(代) 神祭に用ふる土瓶。〔圖〕何方。●どちらの方(萬葉)

いっぺん 一片(名) 一切れ。○「一片の肉」

いっどだひィ (名) 魚の名。縞鰒の一名。

いっどう 一統(名) 一纏めにする事。●統べ括る事。△(動)—一統す。

いっどう 一東(名) 詩學上韻字の一つ。……ゐんの處を見よ。

いっどう 一冬(名) 詩學上韻字の一つ。……ゐんの處を見よ。

いっどう 一董(名) 詩學上韻字の一つ。……ゐんの處を見よ。

いったう 一刀(名) 〔一〕一振の刀。○腰に一刀を横へ。〔二〕一太刀。●一刀。○一刀の下に切り伏せたり」

いっどう 一統(副) 一同に同じ。●全體。

ゐつどう 居集(自動四段) 集まり居る事。

いったうりやうだん 一刀兩斷(句) 〔一〕一度刀を下して見事二つに切り離す事。〔二〕鋭意をもて事の理非曲直を判斷する事。

いったうりう 一刀流(名) 劍道の流派の名。德川氏の初め小野一刀齊の創めたるもの。

いっとううち 一頭打(名) 一騎づゝ馬に乗りて馳する事。

いっとく 一德。一得(名) 一つの利益。●一つの便利。

いっとくいっしつ 一得一失(句) 一つよければ一つわるき事。●一利一害。

いっとくえん 壹德鸞(名) 雅樂の曲名。

いっとき 一時(名) 〔一〕ひとゝき。●一刻。〔二〕暫く。●ざんじ。

いっとけきょう 壹團嬌(名) 雅樂の曲名。

いっち 一致(名) 一つに纏まる事。●同一になる事。●符合する事。●合同する事。△(動)—一致す。

いっち (副) 一番。●最。●殊に。〈俗〉

いづち 何地(代) いづこに同じ。

いってちょう 一朝(名) 〔一〕ひとあさ。〔二〕一たび。●一旦。

いってう 一調(名) 能樂にて小鼓、大鼓、大鼓の内何れか一つに拍子を取らせて謠を謠ふ事。

いっちゃくしゅはん　一標手半(名)　親指と中指とを張りたる間の長さに又其半分を加へたる長さ。○平家「いっちゃくしゅはんの彌陀の三尊」

いっちゅうぶし　一中節(名)　淨瑠璃の一種。德川氏の初の京都の人、都一中の創めたるもの。

いつはり　僞(名)　だます事。●虛言。●うそ。●詐欺。

いつはりびと　僞人(名)　僞をなす人。●虛言する人。○忠見集「いつはり人をいかゞ頼まん」

いつはる　僞(他動四段)　虛言を吐く。●うそを言ふ。●だます。●あざむく。●はかる。

いつか　五日(名)　〔一〕五晝夜。〔二〕月の第五日。〔三〕五月五日の略。

いっか　一家(名)　〔一〕一家內。●一家庭。●一門。〔二〕一流。●一派。

いっかど　一廉(副)　ひとかどに同じ。●充分。●格別。○いっかど用の足る若者」

いっかちゅう　一家中(名)　封建時代に一藩主に仕ふる家臣全體を云ふ詞。●同藩士。○「一家中の面々」

いづかた　何方(代)　定まらぬ方角を指す詞。●何れの方。●どちら。△(形)—いづかたの。(副)いづかたに。

いっかんばり　一閑張(名)　飛來(ひき)一閑の創めたる張子の一法即ち紙張の上に漆を施したるもの。

いつかのせち　五日節(名)　五月五日の節會。……昔は皆天皇武德殿に出御ありて宴を群臣に賜ひたり。

いっかく　一角(名)　海獸の名。背は薄黑きに黑き斑ありて脇腹白し角の長さは一丈程に達す。

いっかく　一格(名)　一つの定まり。●一定の格式。

いつかし　(形。形狀言シク活)　威嚴のある有樣。●いかめし。●おもゝし。○源氏「今は臣下を御心にかけ給へる大臣にていかばかりいつかしき御中に」

いったい　一體(名)　同一の身體。●同體。

いったい　一體(副)　全體に。●總體に。●總じて。●元來。(又)—一體に。

いったいふんじん　一體分身(名)　本は一體なる神佛が身を分けて樣々に現じ給ふを云ふ。○謠曲「おもへば伊勢と三輪の神。一體分身の御車」

いったん　一旦(副)　〔一〕一度。●一面。○「一旦歸國する」〔二〕一時。●一先。●假に。●兎も角

も○「一旦極めて置く」

いつたん 一端(名)　一方の端。●片ばし。

いったんし 一彈指(名)　一度指を彈く間。●僅の間。●一瞬時。

いづれ 何(代)　二つ以上ありて定まらぬ物を指す詞。●どれ。●どちら。●どっち。○「いづれをか撰ぶべき」

いづれ 何(副)　いづれにせよの意。兎も角もの意。◎是非　近々など云ふやうの處に用ふ。○「何れ參上可仕候」

いっそ 寧(副)　其れよりは此れの意。●同じ事ならば。●むしろ。

いっそう 一層(副)　一際。●一入。●いよ〳〵。●一段。

いっそく 一束(名)　物の一百を數ふる詞。

いっそく 一束(名)　ひとつかね。●稻十把を數ふる詞。一把の稻は米五合なれば一束は即ち五升にあたる。

いっそくいっぽん 一束一本(名)　紙一束と扇子一本。……徳川時代に人に物を贈る時に云へる詞。

いつぞや 日外(副)　何時なりしか過ぎし日にの意。●先日。●先頃。●日外。▲名詞にして用ふる事もあり。

いつつ 五(名)　明治五年以前の時刻の名。今の午前八時と午後八時とにあたる。

いつつ 五(數)　十の半分。●ご。

いづつ 井筒(名)　圓き井戸側。○伊勢「筒井筒井筒にかけしまろがたけ」

いっつゐ 一對(名)　二つあるべきもの〳〵一揃を云ふ。○「瓶子一對」「一對の夫婦」

いつつを 五緒(名)　中古貴族の車の簾の飾に用ひたる五垂の緒。之を用ひたる車をいつつをの車と云ふ。

いつつがさね 五重(名)　いつつぎぬに同じ。

いつつのにごり 五濁(名)　ごぢょくに同じ。一には壽濁。二には劫濁。三には煩惱濁。四には見濁。五には有情濁とて人身に五種濁あるを云ふ。(佛數)

いつつのとを 五の十(名)　五十に同じ。○千載「經にける年を數ふれば五つの十になりにけり」

いつつのをしへ (名)　五常に同じ。仁。義。禮。智。信を云ふ。

いつつのたなつもの (名)　五穀。

いつつのなにがし

（名）　五つの障り。……なにがしは障りと云ふ詞を憚りてホンヤリと云ひかへたる詞なり。○源氏「五つのなにがしも猶うしろめたきを」

いつつのむつ

五の六（名）　一説には五六にて三十なりとも云ひ。一説には五十六なりとも云ふ。○古今「つもれる年を數ふれば五つの六つになりにけり」

いつつのさはり

五障（名）　ごしゃうの事。女人に五つの障礙あるを佛教にて云ふ詞。……法華經に云く。「女人の身猶五障あり。一は梵天王となるを得ず。二は帝釋となるを得ず。三は魔王となるを得ず。四は轉輪聖王となるを得ず。五は佛身となるを得ず」○夫本「一筋に五つの障りいとひて[illegible]道に入るらん」

いつつのしな

五品（名）　一に隨喜。二に讀誦。三に解説。四に兼行六度。五に正行六度の五品。（佛教）

いつつのもの

（名）　五蘊を云ふ。人身に附きたる色、受、想、行、識これなり。（佛教）

いつつのもじ

五文字（名）　婦人の備ふべき五つの德すなはち清、貞、美、譜、胎を云ふ。……よりて女の事をもいつゝのもじと云ふ。（雅）

いつつあこめ

五袖（名）　いつゝぎぬに同じ。

いつつぎぬ

五衣（名）　中古以來維新前まで用ひられたる貴婦人裝束の一つ。……先づ袿の上に單衣。打衣。五衣。表衣。唐衣と順々重れ着る事にて。五衣とは同じ色のものを五枚重れて用ふる故の名なり。されど是より以上十枚十五枚二十枚など重れたる事もありしと云ふ。表は綾。裏は平絹にて表裏色を異にし其色の配合によりて櫻重。藤重。卯花重。紅葉重。等の名あり。春夏秋冬の時候により適當の色を用ふるを習とす　十二一重の處を見よ。

いつつし

（形。形狀言シク活）　驚き騷ぐ有樣▶●さわがし。●落付かぬやうな。○祝詞式「夜目のいすゝきいつつしき事なく」

いつな

飯綱（名）　妖術師に使役せらるゝ狐。

いづなつかひ

飯綱使（名）　狐を使ひて種々の妖術をなす事。又は其人。

いづら　（代）　いづれぞ。●どちら。●どこにある。●どうじや。○源氏「頭中將いづら遲し」順集「千くさにもほころぶ花のにほひかないづら青柳ぬれし糸筋」

いつのちわき　稜威の道別（名）　嚴重なる勢にて道をかきわけゆく事。○祝詞式「天の八重雲をいつのちわきにちわきて」

いづのり　伊豆海苔（名）　伊豆より產する干海苔。

いつのかじり　稜威の呪詛（名）　神明に向つてする嚴重の誓（紀）

いつのたかとも　稜威の高鞆（名）　嚴重なる鞆の意。たかは竹とも又音の高き意ともいへり。（記）

いづのむしろ　嚴の莚（名）　祭場に敷く莚。（祝詞式）

いづのまや　嚴眞屋（名）　神を祭る淸淨の家。祝詞式「いづのまやに荒草をいづの莚と刈りしきて」

いつのころび　（名）　たけく責め詈る事。（紀）

いづのめ　伊豆女（名）　伊弉諾命の御子にして淸淨なる事を掌り給ふ神。○本居宣長「いづのめのいづの御靈を得てしあらば漢のまがれる事さとりてむ」

いつく　居着（自動四段）　其場所に落ち着く事。

いつく　齋（他動四段）　いはふに同じ。〔一〕齋戒して奉仕する。●神を祭る。〔二〕大事にする。●愛育する。

いづく　（代）　いづこに同じ。●どこ。●どちら。●何れの處。

いっくわいき　一回忌（名）　人死して後滿一年の忌日。●一週忌。

いづくんか　（副）　いづくんぞに同じ。

いづくんぞ　（副）　焉。安。烏。庸。惡。何處にぞ。●何として。●どうして。……漢文の譯語より出でたる詞なり。

いつくし　（形。形狀言シク活）　〔一〕嚴然たる。●莊重なる。●いかめし。●けだかし。○源氏「大極殿のいつくしかりし儀式。〔二〕うつくしの轉。●美なる。●愛らし。○今昔「うつくしき童の形着たる。

いつくしむ　（他動四段）　愛する。●寵愛する。●かわゆがる。

いつくしぶむ　（他動四段）　いづくしむに同じ。

いつくしみ　（名）　慈悲。●慈愛。●寵愛。

いつくしびみ　（名）　いつくしみに同じ。

いつまでがひぃ（名）　貝の名。蛯に同じ。

いつまでぐさ　壁生草（名）　〔一〕壁土に生ずる小草の名。……謠曲などには「いつまでぐさのいつまてか」など序の詞にして用ふる事多し。

いっけ　一家（名）　本家を同じうする事。●一門。●一族。

いっけつ　一決（名）　決定。●決斷。

いっけん　一件（名）　或る事件。●あの一條。●かの事。

いっけんそくはやうりさんあくだう　一見卒都婆永離三惡道（句）　一たび卒都婆を見るものは永く三惡道を脱れ離るゝ功德あるの意。……三惡道を參考せよ。（佛教）

いっけんや　一軒屋（名）　一軒の離れ屋。●一つ屋。

いっぷうりう　一風流（名）　一種特別なる風流。●一種の風變り。

いっぷく　一腹（名）　同腹。●同母兄弟姉妹。

いっぷく　一服（名）　茶烟草等一服二服と數ふるものゝ異名。

いっぷくいっしやう　一腹一生（句）　一腹に同じ。●同腹に生るゝ事。

いつぶす　鑄潰（他動四段）　金屬の器物を再び溶かして元の地金にするを云ふ。

いっこ　一戸（名）　法律上獨立の一家。

いっこ　一己（名）　己一人。

いつこ　何處（代）　定まらぬ場所を指す詞。●どこ。●何れの處。

いっこんぞめ　一斤染（名）　紅花一斤を以て絹一匹を染めたるもの極々薄き紅の色なり。○保元「一斤染の絹」

いっかう　一向（副）　ひたすら。●一圖に。●少しも。

いっかう　一向（副）　〔一〕ひとむきに。●ひたぶるに。●只一筋に。●其事のみに。△（形）―一向の。（副）―一向に。〔二〕少しも。●一切。○「一向不案内」△（形）―一向の。（副）―一向に。

いっこうかう　一口糕（名）　昔の菓子の名。溫飩の粉を練り砂糖を加へて小片となし。一面を燒きたるもの。

いっかうしゅう　一向宗（名）　僧親鸞の開きたる佛教の一派。●門徒宗。●淨土眞宗。●眞宗。

いっこくもの（名）　頑固にて少しも人の說を容れぬ人●氣に入らぬ事あれば直に怒る人。◎一國を鎖して他と交通せぬと云ふ義より起れりと云ふ。

いつへェ　五重(名)　五つ物の重なりたる事。○「五重の御衣」

いつへのあふぎ　五重扇(名)　檜扇の親骨の上の方を五重づゝ薄様の紙にて包み色々の糸もて綴ぢ飾りたるもの。

いつへのみぞ　五重御衣(名)　いつつぎぬに同じ。

いつへぎぬ　五重衣(名)　いつつぎぬに同じ。

いつて　一手(名)　一人の手。ひとて。●他人に手を入れさせぬ事。○「一手販賣」

いつてつ　一轍(名)　車のわだちの跡を同じくする事。●其結果の同じき事。○「正しき者必ずしも富まざるは古の一轍なり」

いつてん　一點(名)　〔一〕點一つ。○「漁火一點」〔二〕些少の意。○「疚しき所一點もなし」〔三〕昔の時刻の名。……一刻を五分したる其第一。○謠曲「五更の一點鐘も鳴り」

いつてん　一天(名)　〔一〕天一ぱい。●滿天。○「一天墨を流すが如く」〔二〕一天下に同じ。○謠曲「一天四海」

いつてんばんじょうのくらゐ　一天萬乘の位(名)　一天萬乘の君の御位。

いつてんばんじょうのきみ　一天萬乘の君(名)　全天下を知食す君。天皇陛下……「ばんじょう」を見よ。

いつてんが　一天下(名)　一天の下。●全天下。●天下中。○榮花「一天下を知ろしめすべき君の」

いつてのふね　(名)　いつてぶねに同じ。

いつてんのきみ　一天の君(名)　全天下の君主。●天皇陛下。○榮花「一天の君にこそおはしますめれ」

いつてぶね　五手船(名)　一說には五人の手にて漕ぐ船と云ひ。一說には伊豆の國より出づる船と云ふ。後の說に從はゞ「いつてぶね」と讀まざるべからず。○夫木「いつてぶね追風はやくなりぬらし」

いつさい　一切(副)　すべて。●のこらず。●全體。●あるかぎり。○謠曲「一切の男子」

いつさいきょう　一切經(名)　あらゆる佛教の經文悉皆を總稱して云ふ。○平家「一切經七千餘卷」

いつさいしゅじょう　一切衆生(名)　天地間に生を受くるすべての者。○「一切衆生平等利益」(佛教)

いつさつ　一札(名)　一枚の證書。●一枚の證文。○「差入

申一札之事」

いっさん　一山(名)　寺中一圓。○「一山の衆徒」

いっさんまい　一三昧(名)　一心三昧にいる事。◉非常に熟心なる事。……三昧の處を參考せよ。

いっさく　一昨(名)　再昨。◉昨の又昨。○「一昨年。◉「一昨日」◉「一昨朝」◉「一昨晩」◉「一昨夕」「一昨夜」

いつき　齋(名)　〔一〕いつく事。〔二〕いつきのみこの略。◉齋宮。◉齋院。

いっき　一揆(名)　〔一〕一隊の軍勢。〔二〕土民の蜂起。

いっき　一騎(名)　一人の騎馬武者。

いっきたうせん　一騎當千(名)　一騎にて千騎に敵するを得る程の力ある事。○「一騎當千の武士」

いつぎぬ　五衣(名)　昔の朝服の一具を云ふ。即ち袍、下襲、牛襞、單衣、引倍木、これなり。……いつづぎぬとは別なり思ひ紛ふべからず。

いつきわらはワ　齋童(名)　神に奉仕する童男。

いっきょ　一擧(名)　ひとはたらき。

いっきょう　一興(名)　或る一つの興味。○「是も一興なるべし」

いっきょく　一曲(名)　音樂の全き一つ。●一番。○謠曲「一曲をかなで舞ふとかや」

いっきんぞめ　一斤染(名)　いっこんぞめに同じ。

いっきんらく　溢金樂(名)　雅樂の曲名。

いつきむすめ　(名)　大事にして育つる娘。◉秘藏の娘。○源氏「限なき帝の御いつきむすめ」

いっきうち　一騎打(名)　〔一〕一騎づゝ一列に歩む事。〔二〕一騎と一騎との戰。

いつきのゐん　齋院(名)　山城の加茂の社は平安京の時代に皇室の御産土神なりしを以て伊勢大神宮に擬しいつきのみこを立て給ふ定めなり。之をいつきのゐん又さいゐんと云ふ。

いつきのゐんのつかさ　齋院司(名)　齋院の事を掌る役所。＝さいゐんしの事。

いつきのみや　齋宮(名)　〔一〕伊勢皇太神宮をいふ。〔二〕伊勢加茂のいつきのみこの住み給ふ御所。〔三〕いつきのみこの御事。……齋宮齋院ともに云ふ。

いつきのみやのつかさ　齋宮寮(名)　齋宮の事を掌る役所。＝さいぐうれうの事。

いつきのみこ　齋王(名)　天皇御即位の始に未婚の皇女を立て、伊勢。皇大神宮と加茂大神とに奉

仕せしめ給ふ。之をいつきのみこ又さいわうと云ふ。特に伊勢にては齋宮と稱へ加茂にては齋院と稱へたり。

いつきのひめみこ 齋女(名) 神に奉仕する女。

いつきめ 逸遊(名) 氣樂に遊ぶ事。

いついう 泉(名) 出づ水の意。◎土中又は石の間より湧き出づる水。

いづみどの 泉殿(名) 泉水に臨みて作りたる家。……中古貴族の家には必ず之を作りて納涼の場所と爲す。……寢殿造の圖を參考せよ。

いづみかげ 伊豆御影(名) 伊豆より產する石の名。花崗石の下等なるもの。

いづみのや 泉屋(名) いづみどのに同じ。

いっし 一子(名) 一人の子。

いっし 一紙(名) 〔一〕一つの紙。●同じ紙。〔二〕一枚の書き物。●證文。

いっし (句) 言ひしに同じ。○謠曲「誰かいつし春の色げにのどかなる東山」

いづし 何地(代) いづちの轉。(萬葉東歌)

いづしば (名) いちひしばの轉。◎櫟の柴。●薪用の櫟の木の枝。(萬葉)

いっしばんせん 一紙半錢(句) 一枚の紙半文の錢の如き些細なるもの、意。○謠曲「一紙半錢の奉財の輩は」

いつしか (副) 〔一〕何時の間にやら。●知らぬ間に。○拾玉「いつしかおもき秋の白露」〔二〕いつか早く。●何れの時にか。……待遠に思ふ意味。○後撰「いつしか櫻はやも咲かなん」「さを鹿のいるのゝすゝき初尾花いつしか妹が手枕にせん」

いっしょ 一書(名) 或る書物。●他の書物。

いっしょ 一處(名) ひとところ。●同一。●諸共。●一まとめ。△(形)—一處の。(副)—一處に。

いっしゃう 一生(名) 其人の生きて居る間。

いっしゃうがい 一生涯(名) 一生に同じ。

いっしゃうぞく 一裝束(名) 甲冑一揃を云ふ。

いっしゃうけんめい 一生懸命(句) 命がけになる事。

いっしょふぢゅう 一處不住(句) 一定の場所に住居せぬ事。●諸國を旅行して世を送る事。○謠曲「是は一處不住の僧にて候」

いっしさっうでん 一子相傳(句) 其家を繼ぐ一子の外に

は傳へぬ事。●一子より一子と傳へて他に漏らさぬ秘傳。

いっしん 一心(名)　一事に心を込める事。●熱心。

いっしん 一身(名)　一人の身の上。●一人の身體。

いっしん 一新(名)　全體を新たにする事。●革新。

いっしんふらん 一心不亂(句)　心を一つにして外の事の爲に亂されぬ事。

いっしき 一式(名)　一揃。●全體。●殘らず。

いっしき 一色(名)　ひといろ。●一種。

いっしゅん 一瞬(名)　瞬一つする間。●最短の時間。

いっしゅう 一週(名)　日曜日より土曜までの七日間。

いっしゅう 一周(名)　ひとまはりする事。○「世界一周」

いっしゅうき 一周忌(名)　一回忌に同じ。人死して後第一年目の年忌。

いっしゅもの 一種物(名)　いっすものに同じ

いっぴつ 一筆(名)　ひとふで。●ちよっと書く事。●簡單に書く事。○「一筆啓上せしめ候」

いっぴん 逸品(名)　最上の物品。

いつも (副)　いつの時もの意。●常に。●不斷。

いつもな (名)　野菜の名。唐苣に同じ。

いづもむしろ 出雲莚(名)　中古貴重せられたる疊表にして雲州より產せしもの。

いっせ 一世(名)　一代。●一生。

いっせい 一世(名)　當時。●當年。○「一世の英雄」

いっせいちだい 一世一代(句)　其人一代の中に最も花々しき事業を云ふ。●生涯の大出來。

いっせつ 一說(名)　〔一〕一つの說。○「是も亦一說なり」〔二〕或る說。○「一說に曰く」

いっせつ 一切(副)　すべて。●のこらず。

いっせつたしょう 一殺多生(句)　一人を殺して多人を生かすをいふ。即ち多數の利益の爲には一人を殺すも可なりとの意。謠曲「一殺多生の利に任せ彼を殺せさいひあへり」

いっせつな 一刹那(名)　一念の梵語。◎一瞬間。

いっせん 一戰(名)　一合戰。○「唯一戰に打負けて」

いっせん 一先(名)　詩學上韻字の一つ。……ぬんの處を見よ。

いっせんどばらひ 一千度祓(名)　神前に大祓の詞を千度讀誦して身の罪穢を祓ふ事。

いっせんぎり 一錢切(名)　昔の刑の名。其者所有の金錢を沒收する罪。

いっせのぐんじ 一世源氏(名)　いっせのげんじに同じ

いっせのげんじ　一世源氏(名)　皇子の臣下となりて源氏の姓を賜はりたるを云ふ。

いっせき　一夕(名)　〔一〕一晩。●夜一夜。○「一夕を費やす」〔二〕或る夕暮。●或る夜。○一夕知人を訪ふ」

いっせき　一跡(名)　一家の名跡。●家督。○謠曲「御身を父に見せ一跡をも繼がせばやと思ひてこそ」

いっすね　一炊(名)　飯を一たきする事。○謠曲「夢の間は粟飯の一炊の間なり。

いっすね　一睡(名)　ひとねむり。

いっすね　一水(名)　一滴に同じ。○「此酒は一水もののめぬ」

いっすんぼら　一寸螺(名)　貝の名。螺貝の小さきもの。

いっすんぼうし　一寸法師(名)　身の長の低き人を云ふ。

いっすものの　一種物(名)　酒の肴を各一品づゝ持寄りて遊ぶ會合。……中古に行はれたり。

いね　稻(名)　五穀の第一なる米を生ずる草。春種を蒔きて生ねたるものを苗代といひ。夏の半に至り更に植ゑ替ふる時之を早苗といひ。秋に至り刈る頃は之を特に稻といふ。早く熟するものには早稻。晩く熟するものには晩稻の名あり。

いねほほづき　稻酸漿(名)　草の名。南瓜朝顏の一名。

いねかり　稻刈(名)　秋の頃熟したる稻を刈り取る事。

いねがて　(名)　眠り難き事。○續拾遺「ひとりすむ門田の庵の月影に我いねがてを訪ふ人もなし　△(形)—いねがての。○續拾遺「わがいねがての秋の夜の月」(副)—いねがてに。○續後撰「いねがてにのみ月や見るらん」

いねつむ　(自動四段)　寢ぬるといふ事を正月三箇日に祝ひ替へたる詞。すなはちいぬといふ詞の緣より稻積むの意にしたるなり。

いねつく　稻搗(句)　米を搗くに同じ。

いねつきうた　稻搗歌(名)　大嘗會の神饌の稻を搗く時に謠ふ歌。

ねねぶり　居眠(名)　ねねむりに同じ。

ねねむり　居眠(名)　座して居ながら眠る事。

いねむし　稻蟲(名)　虫の名。●蝗に同じ。

ねねう　井ニヨウと發音する詞ゆゑいにの順の處にあり。

いねのよね　稻米(名)　米といふに同じ。

いねこき 稲扱(名) いなこきに同じ。

いねきび 稲黍(名) 黍(きび)に同じ。

いな 鯔(名) 魚の名。鯔(ぼら)の小さきを云ふ。異名は……なよし。●くちめ。

いな 稲(名) 稲に同じ。他の名詞の上に付けて云ふ詞。○「稲葉」「稲穂」「稲村」「稲妻」

否(副) 不同意を表する詞。●いや。●いやく。

いなはかり 稲秤(名) 稲を量る道具。

いなばた 稲機(名) 稲木に同じ。稲を掛けて乾すもの。

いなばのくも 稲葉の雲(名) 稲葉の叢り榮ゆたるを雲に見なして云ふ。○謠曲「すはゝ村鳥の稲葉の雲に飛び去りぬ」

いなはき 稲掃(名) 稲掃莚に同じ。

いなはきむしろ 稲掃莚(名) 刈りたる稲を取扱ふ時に敷く莚。

いなほ 稲穗(名) 稲の穗。

ゐなり (名) すわりたる形のまゝ。○「ゐなりに席を詰めろ」

いなりまち (名) 稲荷祭に同じ。

いなりまち 稲荷町(名) 下等俳優の異名。◎昔し劇場の後の方に小祠を建てゝ稲荷を祭り。其近くを稲荷町と呼べり。下等俳優は此邊を扣處として居たる故の名。

いなりまつり 稲荷祭(名) 山城伏見の稲荷神社の祭が本にて全國一般二月初午の日に行はるゝ稲荷神社の祭を云ふ。

いなりまうて 稲荷詣(名) 二月初午の日稲荷祭に參詣するを云ふ。……歌の題などにあるは山城伏見の稲荷詣を特に意味するものにて。此日參詣せし人は其しるしに稲荷山の杉の枝を折りて歸る習なるが故に此事をよめるが多し。

いなりずし 稲荷鮨飯(名) 油揚の中に飯を入れたる鮨飯。

いなる (自動四段) うなるに同じ。●うめく。(記)

ゐなほる (自動四段) すわり直す。

いなおほせどり 稲負鳥(名) 古歌を注するもの或は鶺鴒なりとし。或はにふないすゞめなりとし。或は雁とし。或は山鳥とし。其説一致せず。然れども稲負鳥は一種の鳥の名に非ずして稲の熟する時節に渡り來る小鳥の總名なりとの説。最も信ずべきに似たり。名の意味

は稲を刈れと命する鳥といふ事なるべし。○古今「我門に稲負鳥のなくなべに今朝吹く風に秋は來にけり」新續古今「秋の田の稲負鳥もなれにけり假庵のいほを守るとせしまに」

いなをかも

（句）　そうではないか。○萬葉東歌「筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき子ろが布乾さるかも」

いなをさ

稲長（名）　農夫。●百姓。○夫木「降りつもる白嶺の鳥は稲長のかひの毛衣ほすと見ゐけり」

ゐなか

田舍（名）　ゐは田に引く水を溜めたる處を云ふより田の事にも爲る。故にゐなかは田の中にある村里の意。◎農を業とする人の多く住居する地。●僻遠の地方。●在鄕。●鄙。

ゐなか

亥中（名）　亥刻を三つに割りて上中下と爲したる其眞中の刻限。今の夜十一時頃。

ゐなかわたらひ

（名）　營業などのため田舍に往來する事。●田舍かせぎ。

ゐなかづき

亥中月（名）　亥中の月に同じ。

ゐながら

居ながら（副）　すわりたるまゝにて。

ゐなかこうど

田舍人（名）　田舍の人。

ゐなかうた

田舍歌（名）　田舍人の歌ふ歌。

ゐなかのつき

亥中の月（名）　陰曆二十日の夜の月を云ふ。亥の刻に出づる故に。

ゐなかぶ

（自動上二段）　田舍風なるを云ふ。●鄙びたるを云ふ。

いなかへじ

（名）　中古にありし笙の名。……江談抄に云く。「唐人之を賣らば買はんと云ふ。いな替へじと云ひければ之を以て名となす」と。

ゐなかざけ

田舍酒（名）　田舍出來の酒。

ゐなかめく

（自動四段）　田舍らしきを云ふ。●鄙びたるを云ふ。

ゐなかもの

田舍漢（名）　田舍の人。●都風に染まぬ人。

ゐなかせかい

田舍世界（名）　たゞゐなかといふに同じ。

いなだ

鰍（名）　魚の名。鰤の少さきものを云ふ。●異名は……はまち。●あを。●ふくらぎ。

いなだま

稲魂（名）　稲妻に同じ。●電光。（雅）

いなだき

頂（名）　いたゞきに同じ。頭の項上。（古）

いなつるび

（名）　稲妻に同じ。

いなづか

稲塚（名）　稲を束ねて積み上げたる所。

いなづま

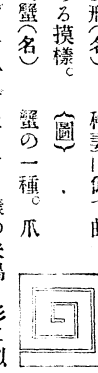
稲妻、電（名）　空氣中に含みたる電氣の作用に

いなづまがた

稲妻形(名)　稲妻に似て曲線ある摸樣。

いなつきがに

稲搗蟹(名)　蟹の一種。爪を上げたり下げたりする樣の米搗く形に似たる故の名。〇神樂歌「葦原田の稲搗蟹のや。己れさへ嫁を得ずとてや。さゝげてはおろし。おろしてはさゝげや。かひなげをするや」



いなゝく

嘶(自動四段)　馬の聲高く鳴くを云ふ。

いなむ

辭(他動四段)　辭退する。●謝絶する。●承知せぬ。

いなぶム

辭(他動四段)　いなむに同じ。

いなぶム

辭(他動上四段)　いなむに同じ。〇源氏「人のいふ事は强うもいなびぬ御心にて」

いなむら

稲村(名)　刈り上げたる稲を積みたるところ。●藁を束ねて積み重ねたるもの。

いなむし

稲蟲(名)　稲に付く虫の總名。

いなむしろ

(名)　古來稲にて作れる莚とのみ解したるを。荷田東麿の。寢席(いなむしろ)にて寢る時に敷く席なりといふ說の起りしより之に從ふ人も多し然れども近古以後の歌には稲の莖み伏したるさまを莚に見なしてよめる事常なり。〇萬葉「玉鉾の道ゆきつかれいなむしろ敷きても君を見んよしもがも」夫木「稲莚敷くや門田の秋風に民の貢をいそぐ頃かな」

いなむしろ

(枕)　いば又しくにかけて云ふ。かばとつゞくるは寢席に皮を用ひたるより起れるならんとの說あり。しくにかゝるは意明かなるべし。〇紀「いなむしろ川をひ柳」

ゐなの

井奈野(名)　神樂の曲名。

いなのみ

稲實(名)　いねのみにて米の事。

いなのみのおきな

稲實翁(名)　大嘗會に奉仕する役の名。

いなのみのうらべ

稲實卜部(名)　大嘗會の時悠紀の國へ發遣せらるゝ卜部。

いなのみのや

稲實屋(名)　大嘗會の時神饌の料の稲を入れ置く家。

いなのみのきみ

稲實公(名)　大嘗會に奉仕する役の名。

いなのめ

黎明(名)　曉。●明方。●しのゝめ。(雅)

いなのめの

(枕)　あくの枕詞。夜の明くると云ふ意。

いなく

(自動四段)　馬の疲れて喘ぐを云ふ。

いなぐら 稲倉(名) 稲を入れ置く倉庫。

いなくさ 稲草(名) 草の名。かいなの一名。

いなぐき 稲莖(名) 稲を刈りたる跡に殘りたる莖。○新葉「朝な〳〵霜おく山の岡邊なる刈田の面に枯るゝ稲莖」

いなや

(副) 〔一〕いや〳〵決して。……決心して打消す。○古今「いなや思はじ思ふかひなし」〔二〕いや以ての外の事ぞ。……あるまじき事よと打消して驚く。○榮花「いなや物は知り給はぬか」〔三〕然りやいかに。●いやかどうじや。……疑問す。○「知るやいなや」「思ふやいなや」〔四〕其働を同時に。●終るか終らざるかの瞬間に。○「人影を見るや否や聲をかけたり」

いなぶね

稲舟(名) 稲を積みたる舟。……多くはいなと云ふ詞を呼び出す處に置く。○古今「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらず此月ばかり」

いなご

蝗(名) 稲の害虫の名。形はばったに似て茶色なるものと緑色なるものとあり。地方によりては食用とす。

いなごまろ (名) 虫の名。いなごに同じ。

いなごき 稲扱(名) 鐵又は竹にて櫛の齒の如くに作りこれに稲の穗を掛けて櫛にて髮をすくやうに扱き取る道具。

いなさ (名)東南の風。

いなぎ 稲置(名) 〔一〕上古の村長。〔二〕いばれの一つ。

いなぎ 稲木(名) 刈り上げたる稲を掛けて乾す木または竹。

いなきをとめ (名) 稲搗少女(いねつきおとめ)の略。

いなきぐさ (名) 草の名。ぬのこづちの一名。

ゐなみ 居並(名) すわり並ぶ事。

いなびどころ 辭所(名) 辭むべき箇條。●謝絶すべき點。(雅)

いなみのの (枕) いなにかけて云ふ。印南野(いなみの)は攝磨の名處なるを唯同音の文字に重れつゝけたるのみ。○拾遺「いなみのゝいなと云ふとも」

いなしき 稲敷(名) 〔一〕稲を敷物とする事。〔二〕稲を敷きたる田家。○堀川「稲敷の伏屋を見れば庭もせに門田の稲を刈りほしてけり」

いなびかり 稲光(名) 稲妻に同じ。

いなもりさう 稲盛草(名) 草の名。四葉草(よつばさう)に同じ。

いなせ

鰛背(名)　徳川時代に魚河岸邊に流行したる男髷の結び方。◎形の鰛背に似たる故の名。

いなせ

(名)　いなは否の意せは然の約音。—否應に同じ。

いなすずめ

稻雀(名)　稻の穗を食ひに集まる雀。

いら

荊。苛(名)　草の名。莖葉共に棘あり。花は方形なるもの。●異名は……いたゝぐさ。●鬼麻。●人さし草。●鋸草。●ひりゝぐさ。

いら

刺(名)　〔一〕草木の莖葉などに生ずる棘。〔二〕魚の脊鰭。〔三〕毛虫の一名。

いらい

依頼(名)　頼みにする事。△(動)—依頼す。

いらい

以來(名)　〔一〕其時より此方。●彼時より此方。〔二〕今より以後。○「以來は勉强すべし」

いらいら

(副)　〔一〕栗のいがなどの皮膚に觸れて刺擊する有樣。(二)氣の揉める有樣。(又)—いらゝゝと。

いらいらし

(形。形狀言シク活)　心中にいらいらする有樣。●氣の揉める模樣。○十訓抄「いまだ來ざらん報をいらゝゝしく願ひ求めて」

いらぼ

(名)　陶器の名。朝鮮にて産するもの。

いらりこ

(名)　草の名。赤大豆の事。

いらる

(自動下二段)　いらだつ。●いらつ。●せきこむ。●せがせかする。●氣世話しくする。○源氏「あながちにおぼしいらるゝにしもあらねど」

いらか

甍(名)　〔一〕屋根に葺く瓦。〔二〕瓦葺の屋根。◎いろこの轉にて瓦を葺きたる樣の魚鱗に似たるよりの詞。……いろこを見よ。

いらかす

(他動四段)　いらいらさする。●いらだゝす。

いらたか

(名)　〔一〕數珠のかどの高くいらだちたる處を云ふ。……「いらたかの數珠」の處を見よ。○謠曲「赤木の數珠のいらたかを。さらりゝゝとおしもんで」〔二〕いらだかの數珠の略。

いらたかのじゅず

(名)　數珠の粒の平たくして算盤玉の如く角の高くいらだち尖りたるもの。……山伏の持つ數珠なり。

いらたかあぢ

(名)　鰺の一種。皮厚く刺多きもの。

いらたかじゅず

(名)　いらたかのじゅずに同じ。

いらだたす

(他動四段)　いらいらさする。●氣を揉ます

る。

いらだつ　（自動四段）　心のいらいらする。●せきこむ。●いれる。●じれる。

いらだつ　（他動下二段）　いら〳〵さする。●せきこます。●じれさせる。

いられがまし　（形。形狀言シク活）　いらる〵やうなる有樣。●せきこむ樣子。○源氏「いられがましきわびごとゞもを書き集め給へる御文」

いらつ　（自動四段）　いらだつに同じ。

いらつこ　耶子（名）　若き男子を親愛して呼ぶ詞。（古）

いらつめ　耶女（名）　若き女子を親愛して呼ぶ詞。（古）

いらつひめ　耶姫（名）　いらつめに同じ。（古）

いらな　（名）　草の名。辛子の一種にして刺あるもの。

いらなけし　（形。形狀言ク活）　いらなしに同じ。○萬葉「いらなけくそこに思ひで」

いらなし　（形。形狀言ク活）　ひどし。●ことの外に。●事々し。●大そうらし。●仰山らし。●ぎゃうぎゃうし。○大和「さぶらふ人々もいらなくなん泣きあはれがりける」宇治「いらなく自きが」空穗「天の下のいらなき軍」

いらかす　（他動四段）　〔一〕いら〳〵さする。〔二〕かどだ〵する。●つっぱらせる。●怒らする。○宇治「ぬのしゝの出で來て毛をいら〵かして走りか〵る」

いらぐ　（自動四段）　〔一〕いら〳〵する。○源氏「いと寒けにいら〵ぎたる顏」〔二〕かどだつ。●つっぱる。●いかる。○落窪「鼻のいら〵ぎたる事限なし」源氏「いら〵ぎたるものゞも着給へりしもいとをかしき姿なり。」

いらぐむし　（他動下二段）　いらかすに同じ。

いらぐさ　刺虫（名）　蟲の名。梅、林檎などの葉を食ふ大なる毛虫。

いらふ　答（自動下二段）　答ふる。●返答する。（雅）

いらふる　墾（他動四段）　貸して利を取るを云ふ。（紀）

いらぐさ　刺草（名）　いろの順の處にあり。

いらへ　答（名）　草の名。いらに同じ。

いらめく　（自動四段）　こたへ。●返答。●返事。○「さしいらへ」「うちいらへ」「いらへごと」「御いらへ」（雅）

骨は殊にさしいでゝいらめき」　かどだちて見ゆる。○宇治「胸

いらし（名）貸しつくるをいふ。○紀「いらしの稲」

いらもぎ（名）常磐木の名。一名わらしんとも云ふもの。

いらす 貸（他動四段）物を貸しつけて利息を取るを云ふ。○紀「いらし給ふべし」

いむ 醫務（名）醫者の事務。●醫業。

いむ 齋。忌（自動四段）身を清くして心を慎しむ。●齋戒する。●潔齋する。●精進する。……主として神佛を祈り又は祭る事に用ふ。

いむ 忌（他動四段）厭ふ。●嫌ふ。●不吉に思ふ。

いん 印（名）木、竹、角、石、金屬、玉類等に文字を彫刻し。青黑などの肉にて文書書籍等に押し記號となすもの。●印形。●印卦。●押手。

いん 印（名）眞言宗の僧の呪文を稱ふる時左右の手の指を組み合せん種々の形を爲す事。○「印を結ぶ」「印おしする」「印つくる」

いん 陰（名）いんやうの處を見よ。

いん 音（名）おんに同じ。●人の口より發する聲。○「唐音」「母音」「子音」

いん 滛（名）男女相交の事。●不義の情慾。

いん 因（名）佛教より出てたる詞にて（一）前世に爲したる事を云ふ。……因果の處を見よ。（二）事物の原因。●本の起り。

ゐん 院（名）（一）壯大なる建物。●官の建物。（二）上皇の建物。（三）上皇。（四）寺。

ゐん 韻（名）（一）音の末尾に長く引かるゝ響。（二）漢字を發音の種類により分ちて平、上、去、入、の四聲と爲し。又平聲を上下の二類に分ち更に細別して（上）一東、二冬、三江、四支、五微、六魚、七虞、八齊、九佳、十灰、十一眞、十二文、十三元、十四寒、十五刪、（下）一先、二蕭、三肴、四豪、五歌、六麻、七陽、八庚、九青、十蒸、十一尤、十二侵、十三覃、十四鹽、十五咸の三十韻と爲し。上聲を又細別して一董、二腫、三講、四紙、五尾、六語、七虞、八薺、九蟹、十賄、十一軫、十二吻、十三阮、十四旱、十五潸、十六銑、十七篠、十八巧、十九皓、二十哿、二十一馬、二十二養、二十三梗、二十四迥、二十五有、二十六寑、二十七感、二十八琰、二十九豏の二十九韻と爲し。去聲を細別して一送、二宋、三絳、四寘、五未、六御、七遇、八霽、九泰、十卦、十一隊、十二震、十三問、十四

願、十五翰、十六諫、十七霰、十八嘯、十九効、二十號、二十一箇、二十二禡、二十三漾、二十四敬、二十五徑、二十六宥、二十七沁、二十八勘、二十九豔、三十陷の三十音を爲し。入聲細別して一屋、二沃、三覺、四質、五物、六月、七曷、八黠、九屑、十藥、十一陌、十二錫、十三職、十四緝、十五合、十六葉、十七洽の十七韻と爲す。以上は分類の題目にして有らゆる漢字は此分類の内に含まれざるなし。たとへば竜同紅籠の類は東と響きを同じうするが故に之を一東の韻の文字と稱へ。初書居余の如きに魚と響きを同じうするによりて之た六魚の韻の文字と稱ふるの類なり。漢詩を作るには此同韻の字を句の末に拋ふる法にて左樣にする事を「韻を踏む」と云ふ。

ゐん

尹(名)　中古の官職の名。彈正臺の長官。かみに同じ。

いんゐ

因位(名)　因圓果滿の位。すなはち佛道の上位に達せし事。

いんいん

殷殷(副)　雷の鳴る音を云ふ。●ごろ〳〵。

いんろう

△(形)—殷々たる。(副)—殷々と。

印籠(名)　もとは印を入るゝより起りたる名。◎德川時代の男子が藥を入れて腰に下げたる小さき箱。

いんろうづけ

印籠漬(名)　漬物の名。瓜の腸を去りて紫蘇の葉などを入れて鹽漬にするを云ふ。

いんろうぶた

印籠蓋(名)　印籠の重ねあはせの如く深く合はせたる被蓋(かぶせぶた)。

いんろうぎんちゃく

印籠巾着(名)　印籠に同じ。

いんろうゆば

印籠湯皮(名)　長方形の湯皮。◎印籠の形に似たる故に云ふ。

いんろうし

印籠師(名)　印籠を造る職工。

いむはたどの

齋機殿(名)　神に奉るための御衣を織る家。

いんばん

印判(名)　印。●印形。●はんこ。……證文類に押すもの。

いんばんや

印判屋(名)　印判の彫刻を業とする家。

いんばんし

印判師(名)　印判の彫刻を業とする人。

いむはしら

齋柱(名)　神を祭り清淨にして建てたる柱。

いんに

陰に(副)　ひそかに。●内々に。●密々に。

いんにく

印肉(名)　印を押すに用ふる肉。……艾又は。

ばんやに荏の油を注ぎ。色料を加へて煉りたるもの。色は朱黑青等あり。

いんぽん 印本(名) 印刷したる本。◉板本。

いんぽん 淫奔(名) 淫亂なる行ひ。

いんぼう 陰謀(名) 内々にてめぐらしたる謀計。○「政府藻を結托するの陰謀」

いむべ 齋部。忌部(名) 〔一〕潔齋して神事に仕ふる役人。〔二〕姓(せい)の一つ。○「齋部廣成」

いむべ 齋瓮(名) いはひべに同じ。神事に用ふる土器。

いんべ 齋部。忌部(名) いむべに同じ。

いんぺい 隱蔽(名) 蔽ひ隱す事。△(動)—隱蔽す。

いんべやき 忌部燒(名) 陶器の名。—備前燒に同じ。

いむと 齋砥(名) 神殿造營の工具を磨ぐための砥石。

いんとん 隱遁。隱遯(名) 世の中を避けて閑居する事。◉遁世。

いんどう 引頭(名) 大法會の時に僧の役名。(拾芥)

いんだどう 引導(名) 僧の紹介して死者をあの世に導くの意。◎佛葬の式に主たる僧の死者に對して讀む偈文。又は之を讀む式。○「引導を渡す」

いんどく 陰德(名) 人に知られぬ樣に行ふ善德。

いんどく 隱匿(名) 隱れ忍びて居る事。△(動)—隱匿す。

いんち 引致(名) 强ひて引連れゆく事。◉拘引。◉逮捕。△(動)—引致す。

いんち 印池(名) 肉池に同じ。印肉を入るゝ器。

いんぢ 印地(名) 石打ちの訛略。◎中古行はれたる遊戯にして。互に敵味方となり石を投げ合ふもの。

いんぢうち 印地打(名) いんぢに同じ。

いんれうう 飲料(名) 飲み料。◉飲用の料。◉飲用の爲めにする水酒茶の類。

いんりょく 引力(名) 萬物相互に引くの力。(科學)

いむをの 齋斧(名) 神殿宮殿造營の木を伐る斧。(延喜式)

いんわい 淫猥(名) 淫亂なる事。◉みだりがはしき事。△(形)—淫猥なる。

ゐんか 允可(名) 許可。◉免許。

いんかがみ 印鑑(名) 印鑑の〔一〕に同じ。

ゐんかた 院方(名) 上皇の御所に屬する人。◉院の味方。

いんかん 印鑑(名) 〔一〕印形の見本。◉印影を集めた

るもの。●〔二〕印を押したる札。●切符。●通行券。○「御門通行の印鑑」

いんかん

殷鑑(名)　失敗したる先例。……もと漢語より出で、殷の世の亡びたるを鑑とするの意

いむかふ(ウウ)

(自動四段)　いは發語にて向ふに同じ。

いむかふ(ウウ)

射向(自動四段)　弓を射て敵に向ふ。●敵對する。

いむかま

齋鎌(名)　神殿宮殿造營の料の草木を刈る鎌。

いむかまど

齋竈(名)　神に奉る物を炊く竈。

いんよく

淫慾(名)　色慾。●色情。●春情。

いんよう

引用(名)　文章の中に他の書籍より引き來れる文句または說。

いんやう

陰陽(名)　支那古代の易道より出でたる詞。二つづゝ相對する物にして陰は謂ゆる陰氣なる物を指し。陽は謂ゆる陽氣なる物を指す。即ち陰に屬する物は。女、月、夜、秋、北の類にして陽に屬する物は之に反し。男、日、晝、春、南の類之なり。

いむたまつくり

齋玉作(名)　神に奉る玉を作る人。

いむたまする(スル)

陰曆(名)　太陰曆の畧。明治五年以前に我國に用ひられたる曆。●舊曆。

いんそつ

引率(名)　率ゐる事。●引連るゝ事。△(動)引率す。

いんざう

印相(名)　佛の印を結びたる姿。●佛體の姿勢。……佛像に云ふ詞。

いんえん

因緣(名)　〔一〕もと佛教の詞にて因は原因の意。緣は原因あるによりて起る種々の事柄を云ふ。たとへば風の吹くは因にて波の立つは緣なり。而して其ために船の覆るを果と云ふ。されど多くは因一字の意にのみ用ふ。◎由來。●起り。●由緒。●事情。●譯柄。〔二〕又一には因果の意に用ふ。●前世の約束。●先天的運命。◎因果應報の理。○「是も何かの因緣ならん」

いむなた

齋鉈(名)　神殿造營の時用ふる鉈。

ゐむら

居村(名)　我住居する村。

いんらん

淫亂(名)　好色の甚しき事。●嬉奔。

いんらく

淫樂(名)　色情にて得る快樂。

いんう

陰雨(名)　もや〳〵と降る雨。

いんう

霪雨(名)　霖雨に同じ。幾日も降り止まぬ雨。

ゐんのちやう(チョウ)

院廳(名)　院の御所の事務を執る役所。

ゐんのうへ　院上(名)　院に同じ。●上皇。

いんく　印矩(名)　書畫などに方形の印を押す時曲らぬために用ふる定規。木にて曲尺(かねじゃく)のやうに作りたるもの。

いんくわ　陰火(名)　怪火(あやしび)。●鬼火。●燐火。

いんぐわ　因果(名)　〔一〕佛教より出でたる語。原因、果は結果にて前世に善因あれは現世にて善果あり。現世に善因あれは來世にて善果あるをいふ。惡因惡果も之に同じ。○「因果應報の理」〔二〕すべての因果と結果。●始と終。●本と末。〔三〕前世の惡業の報い。●業報。○「何の因果か此有樣」

ゐんぐわい　員外(名)　定まりたる人員の外。

いんくわふ　印華布(名)　花紋の形を置きたる布。更紗布に同じ。

いんくんし　隱君子(名)　世間に名を知られぬ君子。●世に知られぬ樣にして居る賢者にて此世に不運なる者。●不仕合な人。●薄命者。

いんやく　印鑰(名)　印と鍵と。……昔し朝廷にて兵を募る時官府の割符としたるもの。

ゐんげ　院家(名)　門跡の法主の隱居所。

いんけん　隱劍(名)　脇差の異名。●短刀。◎人に見ぬやう帶びたるより起れる名。

いんけん　隱顯(名)　隱れたり顯れたりする事。○旅順砲臺の隱顯砲。△(動)　隱顯す。

いんけん　引見(名)　呼び寄せて對面する事。△(動)　引見す。

いんげん　隱元(名)　隱元豆の略。

いんげんな　隱元菜(名)　菜の一種。俗に三河島といふもの。●異名は……白菜。●水菜。●漬菜。●唐菜。◎隱元豆に同しく隱元禪師の植ゑひろめたるものか。

いんげんやくわん　隱元藥鑵(名)　茶道の詞。鑵子の蓋を取りたる上に藥鑵を載せて湯氣の熱にて湯を沸かす事。◎隱元禪師の始めたる故の名なりと云ふ。

いんげんまめ　隱元豆(名)　大角豆(さゝげ)の一種にして隱元禪師の明より持歸り植ゑひろめたるもの。藤豆に似て花の白きものと紫なるものと二種あり。●異名は……いんげんさゝげ。●五月大角豆。●二度生(なり)。●孫豆。●八升豆。●朝鮮大角豆。●唐大角豆。●信濃豆。●

甲州大角豆。●江戸大角豆。

いんげんささげ 隱元大角豆(名) 隱元豆の事。

いむけのそで 射向袖(名) 鎧の左の袖。……弓を射る時裏を向くる方なる故に云ふ。

いんぶ 陰部(名) 生殖器。●いくしところ。

いんぶ 淫婦(名) 淫亂なる女。

いんぶ 殷富(名) 富み榮ゆる事。○「殷富の百姓」

いんぶ 印譜(名) 印影を集めたる本。

ゐんぶ 韻府(名) 漢詩の韻字を分類して集めたる字引。

いんふるえんざ (名) 英語より出でたる詞。風邪の類にして傳染病の一つ。●流行感冒。

ゐんふたぎ (名) 韻塞さの意。⊙中古行はれる室内の遊戯。有名なる漢詩の韻字を隱して之を當てさせ正しく答へたるものを勝とするもの。

ゐんぶん 韻文(名) 韻を踏みたる文の意にて歌詩を云ふ。●文韻は踏まずとも歌詩の句格を成したるものを散文に對して云ふ。

いんぶく 隱伏(名) 隱れ潛みて居る事。●潛伏。●隱匿。△(動)—隱伏す。

いんこ 鸚哥(名) 熱國産の鳥の名。鸚鵡に似てやゝ小なるもの。

いむこ 忌火(名) いむびに同じ。●齋み清めたる火。……おもに大嘗會に云ふ詞。

いんこ 忌火(名) いむびに同じ。

いんご 隱語(名) 〔一〕隱し言葉。●符牒。〔二〕なぞなぞ。

いむこと 戒(名) 佛法の戒律。●受戒。●持戒。○源氏「いむことのしるしによみがへりてなん」

いんかう 咽喉(名) のどに同じ。……咽は食道をいひ喉は氣管を云ふ。

いんごふ 因業(名) 業因に同じ。佛教上の罪。

いんかうかたる 咽喉加答爾(名) 咽喉の痛む病。

いんこく 印刻(名) 印を彫刻する事。

いんこくし 印刻師(名) 印を彫する人。

いむこや 忌火屋(名) 大嘗會の時の忌火を取扱ふ家。

いむこやめ 忌火屋女(名) 大嘗會の時忌火屋に仕ふる女官。

いんえい 胤裔(名) 血統の子孫。●遠き血筋。●遠孫。●後胤。

いんえい 印影(名) 〔一〕捺印して現はれたる形。〔二〕印鑑。

いんでんがはッ 印傳革(名) 印度より舶來せしもの故印度革の轉。◎物に用ふる革の上品なるもの。

いんあく 陰惡(名) 表面に見ねぬ惡事。

ゐんさい 允裁(名) 裁許。●許可。●認可。

いんざい 印材(名) 印を彫刻する材料の品物。木、石、水牛の類。

いんさつ 印刷(名) 版を刷る事。●刷り物をなす事。△(動)—印刷す。

いんさつし 印刷紙(名) 印刷に用ふる紙。

ゐんざん 院參(名) 院の御所へ參る事。

いむさき 往時(名) 往にしさき。●昔。

いむき 蛹(名) 蟹の一種。

いんき 墨汁(名) 英語より來れる詞。◎ペンにて文字を書くに用ふる墨。○「赤いんき」「紫いんき」

いんき 陰氣(名) 氣候の鬱陶しき事。●氣分の不快なる事。●氣性の鬱々たる事。●△(形)—陰氣なる。(副)—陰氣に。

いんきよ 隱居(名) 〔一〕役目を辭し又は家を讓りて閑居する事。●家事に拘らずに閑居する事。○「若隱居」「樂隱居」「押込隱居」〔二〕老人に同じ。

ゐんきゃうキョウ 韻鏡(名) 〔一〕漢字の音韻の事を記したる書。〔二〕音韻の學。

いんぎゃうギョウ 印形(名) 〔一〕捺印したる痕。●印影。〔二〕印鬼に同じ。

いんきつぼ 墨汁壺(名) いんきを入れ置く壺。英語のインキスタンド。

いんきん 印金(名) 絹地又は紗地に漆にて紋形を置き其上に金箔を押したるもの。

いんぎん 慇懃(名) ねんごろ。●懇切。●親切。△(形)—慇懃なる。(副)—慇懃に。

いんぎん (名) 隱元豆(いんげんまめ)の訛略。

いんぎんまめ (名) 隱元豆(いんげん)の轉。

いんめつ 湮滅(名) 埋もれ滅ぶる事。●漸々に形ちの殘れてなくなる事。○「湮滅に歸する」を嘆きて」

いんみゃうミョウ 印明(名) 印を結ぶ事。……いんの處を見よ。

いんみゃうミョウ 因明(名) 五明の一つ。印度古代の論理學。

いむみぞ 忌御衣(名) 清淨にしたる御衣。中古齋宮齋

院に立ち給ふ皇女の召されしもの。

いんし 印紙(名) 〔一〕間税賦課の一法として法律にて定められたる小さき手形。……證券印紙、煙草印紙、賣藥印紙の類。〔二〕郵便切手の一名。

いんし 隱士(名) 世を避けたる人。●隱者。●隱君子。

ゐんし 院司(名) 上皇の御所の役人。

いんじ 淫事(名) 男女間の亂がましき行ひ。

いんじ 陰事(名) 内々の事。●秘密の事。

いんじ (形) 徒にしに同じ。●去んぬる。

ゐんじ 韻字(名) 漢詩の句の末に揃へて置きたる同韻の文字。……ゐんの〔二〕を見よ。

いむしろ 射莚(名) 弓射る所に敷く莚。

いんしょう 引證(名) 證據を引く事。●證據を示す事。○「引證正確」△(動)―引證す。

いんしゃうう 印章(名) 印形。●印判。

いんしゃうう 隱症(名) 熟などの内に隱れ居て外に發せぬ病。

いんぜふ 引接・引攝(名) 阿彌陀如來の極樂淨土に導き迎ふる事。●彌陀の來迎。△(動)―引接す。○「讃詠「十惡といへども引接す」

いんしょく 飲食(名) 飲む事と食ふ事。●飲み食ひする事。△(動)―飲食す。

いんしん 音信(名) たより。●おとづれ。●手紙の往復。

いんじゃ 隱者(名) 世に知られぬ人。●世を忍ぶ人。●隱士。●隱君子。

いんしゅ 飲酒(名) 酒を飲む事。

ゐんしゅ 院守(名) 壯大なる建物の番人。

ぬんじゅん 因循(名) ぐず〳〵して居る事。●歩を進めぬ事。●依然舊體を改めぬ事。

いんしふ 因襲(名) 古來の仕來り。●習慣。

いむび 忌火(名) 神に奉る物を煮炊きするために齋み淨めたる火。

いんび 忌火(名) いむびに同じ。

いんび 隱微(名) 極些細にて知れぬ事。●深く隱れて表面に見ぬ事。○「隱微をあばく」

いんび 隱秘(名) 極々の秘密。

いんび 蔭庇(名) おかげ。●愛顧。●引立。

いむびにはびのまつり 忌火庭火の祭(名) 中古内膳司に於て毎年六月行はれたる祭の名。(延喜式)

いむびと 齋人(名) 神を祭る人。●祭官。

いむびかしきや 忌火炊屋(名) 齋火にて神に奉る飯を炊く家。

いむびのかまどのまつり 忌火竈祭(名) 忌火にて神饌を煮炊する竈に祀られ給ふ神の祭。

いむびのかしきどののまつり 忌火炊殿祭(名) 中古朝廷にて十一月新嘗祭の時新造の炊殿にて行はれたる祭の名。(延喜式)

いむびや 忌火屋(名) 忌火にて神饌を煮炊する家。

ゐんもり 院守(名) 壯大なる建物の番人。

いんもつ 音物(名) 音信を爲すために贈る物。●おくりもの。●機嫌伺に贈る品物。

いんもん 隱紋(名) (一)綾の摸樣の名。全體に隱れて處々ほのかに見ゆる樣にしたるもの。(二)他の織物にて綾の隱紋の樣に織りたるもの。

いんせい 陰晴(名) 陰る事と晴るゝ事と。

ゐんぜん 院宣(名) 院の宣旨。●上皇の勅書。

いんせき 姻戚(名) 結婚に因りて親戚となれるもの。●血統上の關係なき親戚。

ゐんず 員數(名) 其物の數。

いむすき 齋鋤(名) 神殿宮殿の造營に用ふる鋤。

いう ユウと發音する詞はゆの部にあり。

いふ 言、云、曰、謂、(他動四段) (一)心に思ふ事を口に出だす。●語る。●述ぶる。●發音する。(二)稱す。●名づく。○古今序「名づけて古今集和歌集といふ」(三)吟ずる。●誦する。○土佐「唐のうたなと時に似つかはしきをいふ」

いふ (自動四段) ものいふ。

いふばかりなし (形。形狀言ク活) 言ひやうもなし。●言ひも盡されず。○宇治「いふばかりなくおそろしく」

いふかひなし (形。形狀言ク活) いひがひなし。●言うても甲斐がない。●役に立たぬ。●せんかない。○源氏「いふかひなきは我身なりけり」

いふかたなし (形。形狀言ク活) 言ひやうもなし。●得て名狀すべからず。○蜻蛉「いふかたなう心細げなるに」

いふかぎりなし (形。形狀言ク活) いふかたなし いふばかりなしに同じ。○源氏「いふかぎりなくお

ぼしなげきて」

いふやう 言ふ樣(句) 曰くに同じ。

いふよしなし (形。形狀言ク活) 言はんかたなし。●言ひやうなし。(雅)

いふならく 言(副) 言ふなるを延べたる詞。◎曰へらく。●言へることには。○慈覺大師「いふならく那落の底に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり」

いふもれろか (句) 言葉もて言ふも疎略の言ひ方ほか出來ぬ是は言ふ事も出來ぬ程なりとの意。○「くちをしなどいふもおろかなり」

いふもよのつね (句) 言葉もて言ふも一通りの形容ほか出來ぬ是は殊の外すぐれての意。○枕「紅の御衣のいふもよのつねなる」

いふもさら (句) 今更言ふまでもなく勿論との意。○「月花はいふもさらなり雪螢までもおもしろし」

ねのとどき 赭魁(名) 蔓草の名。

いのち 命(名) 〔一〕息の内の意。◎動物の生活力。●生命。●壽命。●玉の緒。●息の根。●息の緒。〔二〕命を繋ぐ料。●たより。●ちから。○山家集「水ひたる池にうるほふ滴りを命にたのむ鱗や誰」後撰「常もなき夏の草葉におく露を命とたのむ蟬のはかなさ」。

いのちがけ 命懸(名) 命を捨てゝする事。●一生懸命。

いのちがへ 命換(名) 之を失へば命に拘はる程の貴重なる事。

いのちのうち 命内(名) 生きて居る間。

いのちののち 命後(名) 死後。

いのちのさかり 命盛(名) 壯年。

いのちくらべ 命競(名) 長壽を張合ふ事。

いのちごひ 命乞(名) 〔一〕長壽ならん事を祈る事。〔二〕殺さるべき人の助命を乞ふ事。

いのちしらず (名) 生命の危險なるをも知らぬ人。●又は知りても知らぬ如く平氣にて事を爲す人。

いのちびろひ (名) 死せんとせし命の助かりたる事。

いのり 祈禱(名) いのる事。●きとう。●祈念。●祈請。●祈願。

いのりのし 祈師(名) 祈禱を執行する僧。

いのる 祈禱(他動四段) 神前佛前に物事を願ふを云ふ。●心中に神佛を祈念するを云ふ。

いのかひぃ　貽の貝(名)　貝の名。＝貽貝に同じ。

ゐのんど　蒔蘿(名)　草の名。葉はうゐきゃうに似て小さく實は馬芹に似たり。

ゐのくち　井口(名)　堰より田に水を引く口。

いのくち　樋の口(名)　苗代に引く水の入口。

ゐのふ　胃腑(名)　胃に同じ。

ゐのこ　豕(名)　〔一〕獸の名。＝猪に同じ。〔二〕獸の名。豚の子。

ゐのこ　亥子(名)　十月の亥の日を云ふ。此日餅を食へば萬病を愛けずとて祝ふ事あり。●玄猪。

ゐのこぐも　亥子雲(名)　亥子の時節に出づる雲。散り亂れたる黑雲を云ふ。

いのこし　射殘(名)　昔し正月朝廷にて行はるゝ射禮に不參せし人に翌日更に射さするを云ふ。……公事根源に「昨日の射禮に參せざる四府に今日射さしむるが故に射殘しとは申しけり」とある是なり。

ゐのこもち　亥子餅(名)　亥の子の日に食ふ祝の餅。……五色に作りて菊の枝にさすなどの風俗あり。

ゐのしりぐさ　天名精(名)　草の名。花は野菊に似て黃に。葉は烟草に似たり。臭氣強くして嗅ぐに堪へず。又藪烟草とも云ふ。

ゐのししむしゃ　猪(名)　獸の名。形は豚に似て猛く牙鋭く肉は脂肪實に富みて美味なり。

猪武者(名)　勇猛のみにて思慮の少なき武者。○平家「身を全くして敵を亡すを以てよき大將とはしたるに侯。左樣に偏執なるなれば猪武者とてよきにはせずとこそ申せ」

いく　行。往(自動四段)　ゆくに同じ。

いく　生(自動上二段。又。四段)　生活する。●生存する。●蘇生する。

いく　活。生(他動下二段)　〔一〕生氣あるやうに保たす。●蘇生さす。●活かす。○「花を活く」「人を呼び活く」〔二〕埋めて本の形を保たす。○「火をいけて置く」「上管をいける」

いく　幾(數)　どれだけ。●何ほど……未定數を表はす詞。○「幾世」「幾春」「幾秋」「幾千代」「幾萬世」「幾日」「幾年」

いくゐ　生井(名)　井の美稱。(祝詞式)

いぐひぃ　(名)　魚の名。うぐひの古名。

いぐひぃ　齋杙(名)　神を祭る時幣帛供物などをかくるく

ひ。○紀「初瀬の川の上つ瀬にいぐひを打ち云々。いぐひには鏡を掛け。」

ゐぐひィ　居食(名)　働かずして食ふ事。●徒食。●素餐。●坐食。

ゐぐひィ　堰杙(名)　堰關に打ちたる杙。○金葉「水上に花や散るらん山川のゐぐひにいとゝかゝる白波」

いくばく　幾何(副)　いくらばかり。●いかばかり。●いかほど●どれほど。

いくどうおん　異口同音(句)　二人以上の人の同時に同じ事を言ふ事。

いくぢ　(名)　意氣地の訛り。○「いくぢかない」

いぐち　兎唇(名)　三つ口に同じ。……(轉じて)蓋物などの蓋と身と正しく合はぬ事。

いぐち　(名)　毒茸の名。

いくり　(名)　海中の石。○萬葉「わたの底沖つ石くりに」(古)

ゐくわうう　威光(名)　人をして自ら畏敬せしむべき勢ひ。

いくはリ　的(名)　弓射る的。

いくはどころ　的所(名)　的を設けて弓射る場所。=あづちに同じ。(古)

いぐわい　意外(名)　存外。●思ひの外。●豫期の外。へ(形)—意外の。(副)—意外に。

いくわん　衣冠(名)　(一)袍と差貫と冠との裝束。古代公卿朝服の略式なり。(二)又單に公卿禮服の意。

いくわん　醫官(名)　醫を以て仕ふる官吏。

ゐくわん　位官(名)　位と官と。=官位に同じ。

ゐくわん　尉官(名)　海陸軍の大尉中尉少尉を呼ぶ稱。

いくた　幾多(數)　どのくらゐか知られぬ數。●餘程多くの數。○「幾多の艱難」

いくだ　(副)　いくばくの古言。○古今「秋たちていくだもあられば」

いくたち　生太刀(名)　太刀の美稱。(古)

いくたり　幾人(名)　何人。●幾何の人數。

いくそ　(副)　幾何。●どれほど。○夫木「あじろもろ宇治の川長年つもりいくそ月日を數へ來ぬらん」△(形)—いくその。○夫木「秋の田を見れば萬の此車いくその稻を積みわたすらん」

いくそばく　(副)　如何許。=いくそに同じ。○六帖「夕影に來なく蜩いくそばく日毎に聞けどあか

ぬ聲かな」

いくつ 幾個(名) 幾何の數。●未定の數。△(形) いくつの。

いくら 幾何(副) どれほど。●どのくらゐ。●いくばく。△(副) いくらの。

ゐぐら 居坐(名) 網代木の上に床を搆へ網代守の上り居て焚火などするやうに作りたるところ。○堀川「氷魚のよる度にぞ拂ふ田上やぬぐらに打てる網代木の布」

ゐくらす 居暮(他動四段) 居たるまゝにて日を暮す。

いくむ (名) 入り籠む。○記「いくみだけ。いくみは嚴す」

いくむ (他動四段) 射組むの意。◎相互に矢を射かはす。

ゐくん 遺訓(名) 死後に遺したる教訓。

ゐくん 偉勳(名) すぐれたる功。●大功。

ゐくん 遺勳(名) 死後まで遺る程の大功。

いくふ (自動四段) 矢を射込む。●弓射る。(古)

いくすり 活藥(名) 不死の藥。○天木「君がため蓬が島もとりぬべし活藥とる住吉の浦」(雅)

いくさ 軍(名) 射交すの意か。◎(一)戰爭。●合戰。(二)軍勢。●兵士。

いくさにん 軍人(名) 戰爭すべき人。●武官。

いくさぼし 軍星(名) 北斗星。●破軍星。……昔の軍人は破軍の名を吉瑞として之を祭れり。

いくさがみ 軍神(名) 軍の勝利を司る神。●軍人の祭る神。●武の神。

いくさよばひ 軍呼(名) 鬨の聲を云ふ。

いくさよぼろ 軍丁(名) 軍夫。●軍人足。

いくさだち 軍立(名) 出陣。●戰爭の準備をする事。

いくさならし 軍習(名) 戰爭の練習をする事。●調練。

いくさぶね 軍船・軍艦(名) 戰爭に用ふる船。●兵船。●軍艦。

いくさごと 軍事(名) いくさの眞似事。

いくさものがたり 軍物語(名) 軍談。●軍記。●軍書。

いくゆみや 生弓矢(名) 弓矢の美稱。(古)

いくめ 幾目(名) 幾何の目方。●幾貫目。

いくみだけ (名) 茂りたる竹。(古)

いぐし 齋串。五十串(名) (一)小さき竹に紙を挾みて地上に立て神を祭るもの。幣帛の種類なり。重に春の苗代田の祭または六月祓などに之を用ふ。五十串の文字は假字。○萬代「佐

保川の絶ねぬ流にいぐし立て祈る御祓も君が代のため」〔二〕節分の夜窓入口などにさす鰯の頭を貫きたる串。○年中行事「いぐしさす追儺の夜半の杉障子」

いくひ 生日(名) いき〳〵としてめでたき日の意。◎日の美稱。●吉日。●吉辰。○祝詞式「生日の足日に」

ゐくび 猪頸(名) 猪に似て頸の短きを云ふ。●又同じ意味にて頸の短きやうに見ゆる形容。

いくひささ 幾久(名) 幾久しさの略。○拾遺「いくひささにはあられねども」

いくひさし 幾久(形。形狀言シク活) 幾千年までも久しく。●永久に。

いや 否(名) 好まぬ事。●嫌ふ事。△(形)—いやな。(副)—いやに。

いや 彌(名) いよ〳〵重なりたる事。○「いやが上に」

ゐや 禮(名) 敬禮。●禮儀。……謝辭を述ぶるを俗に禮といふより「ゐやを申す」など書く人あるは後世の誤用にて古文には決して例無し。

いや 彌(形)(副) だんだんと重なる有樣。いひ〳〵。●ます〳〵。○「いやとこしへ」「いやつぎ〳〵」「いやはるばる」「いやはかな」「いや遠ざかる」「いや高く」「いや降りに降る」「いやまさる」「いや榮ゆ」

いや 否(副) いなに同じ。……他の言を打消す詞。○謠曲「いや疑ひは人間にあり。天に僞なきものを。

いや (感) かねて期せざる事物に遭ひて發する驚の聲。

いやいとこ (名) またいとこに同じ。父のいとこの子。

いやいや (副) いな〳〵。

いやいや 否否(副) いやながらの意。●好まずながら。

ゐやゐやし (形。形狀言シク活) うや〳〵しに同じ。(雅)

いやは 彌齒(名) 八重齒(やへば)に同じ。齒の重なり生ねたるもの。

いやはて 彌果(名) 果の果。●最後。●最終。

いやはし 彌端(名) 端の端。●極端。

いやちこ 灼然 神佛の現靈の著るき有樣を云ふ。(形)—いやちこなる。(副)—いやちこに。

いやおひィ 彌生(名) 〔一〕草木のいよ〳〵生ひ茂る事。〔二〕三月の異名—やよひに同じ。

いやおう 否應(名) 否む事と諾する事と。●諾否。●承知不承知。○「いやおういはせず」

いやかも (副) やゝもすれば。●どうかすると。(靈異記)

ゐやなし (形。形狀言ク送) 無禮なる有樣。●失敬千萬。

いやらし (形。形狀言シク活) 厭ふべき有樣。●あだめきたる有樣。

いやむ 否(自動四段) いやに思ふ。●厭ふ。(宇治)

いやく 醫藥(名) 醫師の藥。

ゐやく 違約(名) 約束に背く事。△(動)—違約す。

ゐややか (名) 禮儀正しき事。●行儀よき事。△(形)—ゐやゝかなる。(副)—ゐやゝかに。

ゐやまもふ (他動四段) うやまふに同じ。(古)

いやまし (形。形狀言シク活) 疾ましく思ふを云ふ。●心痛する。○唐物語「我等定めて其數ならじとあまたの御心にいやましくおぼしけり」

いやましに 彌增に(副) いよ〳〵多く。●いよ〳〵ますます。

ゐやぶ (他動四段) ゐやまふに同じ。○續紀宣命「天社國社の神等をもゐやびまつり」

いやめ (名) 涙ぐみたる目つき。○源氏「いとゝいやめに尼君は物し給ふ」

いやみ 厭味(名) いやな感情を發せしむべき容體。●聞く人を厭はしむるやうなる言葉。

いやし 卑。賤(形。形狀言シク活) 身分の階級の低きを云ふ。●官位の高からぬを云ふ。

いやし 陋。鄙(形。形狀言シク活) 品格のなきを云ふ。●心の高からぬを云ふ。●鄙吝なるを云ふ。●いやしむべきを云ふ。

ゐやじ (名) ゐやじりの略。(祝詞式)

ゐやじろ 禮代(名) ゐやは禮。じろはしるしの意。◎敬禮を表するため神に奉る品物。○祝詞式「ゐやじろの幣帛」

ゐやじり (名) ゐやは禮。じりはしるしの意。◎敬禮を表する神に奉る品物。(祝詞式)

いやしむ (卑他動四段) さげしむ。●輕んずる。●見下ぐる。●侮る。●輕蔑する。●蔑視する。

いやしんず 蔑(他動サ變) いやしむに同じ。……漢文直譯より出でたる詞。

いやしうも 苟(副) いやしくもに同じ。○源氏「賤しく異樣ならん何がしらが女子をこそいやしうも尋れのたまふかな」

いやしくも

苟(副)　假にも。●少しにても。

いやしきな

賤しき名(名)　罪と云ふ名目。……中古の貴人は罪せられて官位の下る故に云ふ。○後撰「ある人いやしき名とりて遠江の國へ下る」

いやしめ

(名)　いやしむる事。●輕蔑する事。●侮る事。●蔑視する事。

いやひけに

(副)　いや日にけにの略。◎多くの日數を經てますくの意。○萬葉「いやひけに戀のまさらば」

いやす

愈。(他動四段)　病を癒やしむる。●療治する。●なほす。

いま

今(名)　現在の時。●現時。●即今。●唯今。

いま

今(副)　〔一〕現時に。●目前に。●即今。●唯今。○謠曲「もと降る雪に道を忘れ今降る雪にゆきがたを失ひ」〔二〕現在に最も近き過去の時に。●つい先刻。●今しがた。○「客は今歸りたり」〔三〕現在に最も近き未來の時。●おっつけ。●直に。●間もなく。○古今「待つとし聞かば今かへりこん」〔四〕此上に。●これから。●もう。●もっと。●もそっと。○「今一つ」「今一たび」「今一聲」「今一しほ」「今幾日」「今幾夜」「今幾秋」「今二日」「今すこし」「今しばらく」「今來ん年」

ゐま

居間(名)　常に住居する室。

いまいま

今今(副)　〔一〕今に〳〵。●今直に。○落窪「今々といひて更に思ひも立たれば」「今々と我待つ妹ぞ」〔二〕今は〳〵。……特に呼吸を引き取らんとするの意。○古今「道中にて病をして今々となりにければ」……以上二種とも下に動詞を略したる用法と知るべし。

いまいまし

(形。形狀言シク活)　〔一〕いみじに同じ。〔二〕忌み嫌ふべき意。

いまに

今(副)　〔一〕今尙。●未だ。○「今に來らず」「今に寒し」〔二〕今暫しにて。●今少し後に。○「今に止まん」

いまど

今戸(名)　今戸燒の略。

いまどやき

今戸燒(名)　〔一〕東京の今戸にて燒く素燒の土器。〔二〕他にて製しても今戸燒と同じ燒き方の土器。

いまどき　今時(名)(副)　當時。●近年。●當世。○「今時かゝる迂遠の者はなし」

ゐまちづき　居待月(名)　陰曆十八日の夜の月。……十七日の夜を立待といふに對して云ふ。居て待つ内に出づるの意。○盛衰「宮は居待月を待ちわびて」

ゐまちづき　(枕)　明石にかけて云ふ。たゞ月の明るきといふ續きなり。居待には意なし。(萬葉)

ゐまちのつき　居待の月(名)　ゐまちづきに同じ。

いまり　伊萬利(名)　〔一〕伊萬利燒の略。〔二〕伊萬利土の略。

いまりつち　伊萬利土(名)　肥前の國伊萬利より產する土。すなはち伊萬利燒の原料たるもの。

いまりやき　伊萬利燒(名)　肥前の國伊萬利より產する石燒の陶器。

いまおり　今織(名)　新形の織物。●流行の織物。

いまはッ　今は(名)　〔一〕今は隈りの別れの意。●別時。〔二〕今は最期の意。●臨終。●終焉。●死期。○源氏「故大納言今はとなるまで」

ゐまはッる　居廻(自動四段)　物を圍みて座するを云ふ。○宇治「鬼ども出で來りゐまはりて酒のみあそびて」

いまはッる　(自動四段)　齋むといふ詞より出づ。◎清淨にする。●齋戒する。●大事にする。

いまはッむかし　今昔(句)　今からいへば既に昔と爲りたる時。

いまはッし　(形。形狀言シク活)　忌むべき有樣。●厭ふべき有樣。●快からぬ有樣。●不吉なる有樣。

いまがはッ　今川(名)　今川燒の略。

いまがはッやき　今川燒(名)　餅菓子の名。饅飩粉に餡を包みて燒きたるもの。◎昔し江戸今川橋の邊にて或人の燒きて賣りたるより名づく。

いまがた　今方(副)　今より少し前に。●今しがた。

いまやョう　今樣(名)　〔一〕當世風。●流行風。〔二〕當世。●現今。〔三〕今樣歌の略。

いまやョういろ　今樣色(名)　當世流行の染色。……中古には紅梅色の濃きを云へり。(源氏)

いまやョうたい　今樣體(名)　今樣歌の體に七五の句を幾つにても重ねたる歌。……今日行はるゝ新體詩軍歌の類。

いまやョううた　今樣歌(名)　〔一〕當時の流行歌。〔二〕七

五。七五。七五。七五。七五の四句。もしくは之になほ七五。七五の二句を足したる歌曲の名。例へば「春の彌生の。明ぼのに。四方の山邊を見わたせば。花さかりかも。白雲の。かゝらぬ峰こそ。なかりけれ」又「君が齡を數ふれば盡きせぬ濱の。眞砂路や。おりぬる鶴の諸聲も。千代萬代と。闘ゆなり。老鶴も。雛鶴も。千代萬代と呼ばふなり」の類。尤も字數は「老鶴も」の句の如く減てじ用ふる事も常なり。〔三〕以上の歌を歌ふ曲節の名。○「笛にて今樣を吹く」

いまやうあはせ

今樣合(名)　左右に組を分ちて今樣歌の優劣を競爭する文學遊戯の一つ。……歌合の種類。

いまだ

未(副)　今まだの意。●今尚。●まだ。●まだに。

いまだし

(形。形狀シク活)　未た其事の熟せざる有樣。●未だ其時の至らざる有樣。

いまそがる

(自動四段)　いますがるに同じ。○伊勢「右大將にいまそがりける藤原の當行」

いまのはりみち

今の墾道(名)　新に開墾せし道路。○萬葉「信濃路は今のはりみち」

いまのうへ

今上(名)　今上陛下。(雅)

いまのま

今の間(名)　現在の間。●當座。●暫しの間。○源氏「今の間も戀しきぞわりなかりける」

いまや

今や(副)　今は。●方に今。○「今や秋の半」

いまゐり

今參(名)　宮仕奉公等に參りて時を經ぬ人。●新參。○枕「まだ初々しき程なる今參りども」

いまふう

今風(名)　今時の風。●今樣。●流行の風。●當世風。(俗)

いまごろ

今頃(名)　今時分。●今日の今と同じ時刻。

いまでがはどうふ

今出川豆腐(名)　料理の詞。豆腐と昆布とを煮て胡桃を掛けたるもの。

いまさか

今坂(名)　今坂餅の略。

いまさかもち

今坂餅(名)　餅菓子の名。大福餅に似て細長く。上をちょと焦がしたるもの多し。

いまさら

今更(副)　今と爲って。●今に及んで。○「今更言はでもの事なれど」△(又)—今更に。○古今「今更に山へ歸るな時鳥」(形)—今更なる。○源氏「今更なる身の恥になん」

いまさらめく

今更めく(自動四段)　今更言はでもの事なり。●今更かやうの事を言ふは不思議な

り。

いまさふ　（自動四段）　いますを延べたる詞。

いまき　（名）　ゆまきの轉。◎昔し貴人の入湯する時其場に侍して流しなどする人の衣服の上に纏ひたる白き布。

いまき　今來（名）　今參り。●新參。……おもに外國より新に渡來せしものをいふ。（紀）

いまめかし　（形。形狀言シク活）　〔一〕今めきたる有樣。●當世風なる有樣。●風流なる有樣。○源氏「今めかしう中々昔よりも花やかに」〔二〕今更めきたる。●不思議なる。○謠曲「是は今めかしき事を仰せ候ものかな」

いまめく　（自動四段）　當世風になる。●流行風になる。●しゃれる。●あだめく。●風流である。

いまみち　今道（名）　現時制定の里程。明治の今日にて云へば三十六町を一里とするの道のり。

いまみや　今宮（名）　目前におはす宮樣。●現在の宮樣……薨去ありたる宮などに對して云ふ。

いまみやのまつり　今宮祭（名）　京都紫野なる今宮神社の祭禮。五月九日なり。

いまし　汝（代）　なんぢ。●御身。……目上にも目下にも用ふ。（雅）

いまし　今（副）　しは助辭にて今に同じ。○風雅「今し早またるゝ月ぞにほふらし村雲白き山の端の空」

ゐまじる　居交（自動四段）　交り居るに同じ。○玉葉「女の人に居交りて」

いましがた　（副）　しは助辭にて今方（いまがた）に同じ。（俗）

いましむ　（他動下二段）　〔一〕警……用心をさする。●注意を喚び起す。●警戒する。○「非常を警しむ」〔二〕（戒）……忠告する。●意見する。●訓へ諭す。●禁制する。○「子を戒しむ」〔三〕捕縛する。○著聞「童を一人いましめ置きたり」

いまじぶん　今時分（名）　今の頃。●今頃の時刻。（俗）

いましき　（名）　今こ云ふに同じ。（續紀。萬葉）

いましめ　戒（名）　〔一〕戒しむる事。●訓誡。●教訓。●禁制。○「いましめの詞」「身のいましめ」〔二〕見せしめ。●惡を懲す手本。○「一人を懲して萬人の戒しめとす」〔三〕捕縛する事。○「いましめの繩」

いましみこと　汝命（代）　いましの丁寧なるもの。……

神または貴人を呼ぶ詞。

いまびと 今人(名) 今世の人。●目前の人。……昔人に對して云ふ。

いまひめぎみ 今姫君(名) 目前におはす姫君。●現在の姫君。……死したる姫君などに對して云ふ詞。

います (自動四段) おはすに同じ。〔一〕在るの敬語。●在らせ給ふ。○記「あが大國主こそは男にいませば」〔二〕行くの敬語。●行き給ふ。○竹取「歸りいましにけり」〔三〕來るの敬語。●來り給ふ。○枕「立ちてこなたにいまして」〔四〕居るの敬語。●居給ふ。○竹取「ここにやいます」

います (自動下二段) 自動四段のいますに同じ。

いますべらぎ 今天皇(名) 今上天皇。(古今)

いますがる (自動四段) いますに同じ。○伊勢「大御息所とていますがりける」

いますがら(ロふ) (自動四段) いますがるを延べたる詞。

いますめろぎ (源氏) 今天皇(名) いますめらぎに同じ。

いますめらぎ 今天皇(名) いますべらぎに同じ。(古今)。

いけ 池(名) 地を堀りて水を蓄へたる所。

いげ 以下(名) いかに同じ。

いけい 畏敬(名) おそれうやまふ事。△(動)—畏敬す。

ねけいざい 違警罪(名) 警察の法度を犯す罪。

いけばな 生花。活花(名) 〔一〕花瓶に活けたる草木の花。〔二〕生花を爲す枝術。

いけばぎ 生剝(名) 生きたる獸の皮を剝ぐ事。……上古の罪の一種。

いけにへェ 生贄。犧牲(名) 生きたる贄。●生きたるものを其儘神に供ふる事。……昔は人を生贄にせし風俗あり。

いけどり 生擒(名) 〔一〕いけどる事。〔二〕いけどられたる人。

いけどる 生擒(他動四段) 生きながら捕ふる。●いけどりにする。

いけるかぎり 生ける限(名) 生きて居る間。●存生中。(雅)

いけるよ 生ける世(名) 生きて居る世。●生前。

いけるじょうど 生ける淨土(名) 生きて居る内より見る事を得る淨土。●此世の極樂。(源氏)

いけがき 生垣(名) 立木又は生ゐたる竹をそのまゝに

作りたる垣。○「竹の生垣」「杉の生垣」

ゐげた

井桁(名)　〔一〕井の字の形に木を組みたる井戸側。……〔轉じては〕たゞ井戸側の意。○謠曲「深き井桁を切るなるは欄井の釣瓶縄」〔二〕井桁の形をなしたるもの。

いけだずみ

池田炭(名)　攝州池田より産する炭。

いけづくり

活作(名)　活きたる魚を直に刺身などに作る事。○「鯛のいけづくり」

いけん

意見(名)　〔一〕見込。○「意見を述ぶ」〔二〕忠告。●自身の見込を述べて人を諫むる事。○「意見を聞く」△(動)ー意見す。

いけん

異見(名)　他と異りたる見込。

ゐけん

威權(名)　いきほひ。●けんゐ。●威光。

ゐげん

威嚴(名)　威光あり品格ある事。

いけうを

活魚(名)　いけすなどに活かして養ひたる魚。●生簀の魚。

いけのかがみ

池鏡(名)　池の形を鏡に比して云ふ。●鏡の如き池。

いけのこころ

池心(名)　池の中央を云ふ。……多くは心の文字に他の意味を兼ねさせて用ひたり○源氏「池の心ひろくしなしてめでたく作りの〻しろ」是は池主の心までを兼ねたり。詞花「誰にとか池の心も思ふらん」是は池を有情體として其心といふ意をも兼ねたり。

いけま

(名)　活け馬の意。◎馬醫の藥用に供する蔓草の名。キギョウと發音するによりいきの處にあり

ゐけふ

活船(名)　活魚を養ひ置く水船。

いけぶね

生袋(名)　餌を入るゝ袋。……鷹に用ふる詞。

いけぶくろ

池鯉(名)　活かして養ひたる鯉。●生簀の鯉。

いけごひ

池水(名)　池の中の水。

いけみづ

(枕)　池水の槻といふ意にて。◎いひにかけて云ふ。○續千載「池水の言ひ絶ねぬとや思ふらん」

いけみづの

池見草(名)　蓮の異名。

いけみぐさ

生火(名)　打ち出だしたる火。●燧り出だしたる火。

いけび

生盛(名)　刺身。

いけもり

生簀(名)　食用に供ふる魚を死なぬ樣に養ひ置く所。◎もとは水中に竹の簀を作り魚を生

いけす

かしおく故の名。

いけずみ 活炭(名) いかしておく炭。●火の消ねぬ様にして置く炭。

いぶり (名) 心づよき事。●殘忍。●殘虐。●殘酷。(紀)

いぶる 燻(自動四段) 火の燃ね附かずして煙るをいふ。●くすぶる。

いぶかる 訝(他動四段) 訝しく思ふ。●疑ふ。●不審する。●床しがる。

いぶかし 訝(形。形狀言シク活) 〔一〕疑はし。●不審なり。●氣がゝりな。〔二〕忍ばし。●床し。○萬葉「いぶかし我妹(わぎも)」

いぶかしみ (名) 訝しき事。●嫌疑。●不審。

いぶつ 異物(名) 一種異形なる物品。

ゐぶつ 遺物(名) 死者の後に遺したるもの。●ゆゐもつ。

いぶん 異聞(名) 普通と違ひたる風聞。●めづらしき評判。●めづらしき話。

いふう 異風(名) 一種特別の風。●風變り。

ゐふう 威風(名) 威光ある風采。○「威風凜々」

いふく 衣服(名) 衣類の總稱。●着物。●衣裳。

いふく 異腹(名) 一種異樣の服裝。

いふく 異腹(名) 腹がはり。●母ちがひ。●異母。

ゐふく 威服(名) 威を以て服せしむる事。△(動)ー威服す。

ゐふく 遺腹(名) 死者の生みおきたる子。●忘れ形身。

ゐぶくろ 胃袋(名) 胃に同じ。

いふけいてい 異父兄弟(名) 母は同じなれど父のかはりたる兄弟。

いぶき 伊吹木(名) 木の名。檜の一種。●異名は……鍬倉いぶき。●幹赤(みきあか)。●伊吹柏槇(いぶきびやくしん)。

いぶき 息吹(名) 〔一〕いきぶきの略。◎吹き出だす息。〔二〕風は神の息と信じたるにより風の事にもいへり。○「息吹の風」

いぶきばうふう 伊吹防風(名) 草の名。葉は胡蘿蔔(にんじん)に似て白く小さき花さくもの。

いぶきとらのを 伊吹虎尾(名) 草の名。柴朶の一種にして初夏薄紅色の花咲くもの。●異名は……ねびぐさ。●山大黄。●柳草(やなぎさう)。

いぶきたうき 伊吹當歸(名) 草の名。當歸の一種なれども藥用に適せず。●異名は……越後當歸。●丹後當歸。

いぶきよもぎ 伊吹蓬(名) 草の名。蓬の大なるもの。艾を製するに適す。異名は……沼蓬。●裏白。●大蓬。

いぶきだいこん 伊吹大根(名) 草の名。鼠大根とも云ふ。

いぶきびゃくしん 伊吹柏槇(名) 木の名。いぶきの一名。

いぶし 燻(名) 〔一〕燻す事。〔二〕硫黄を燻して金屬製の器物に煤色を着くる事。

いぶせし (形。形狀言ク活) 〔一〕鬱陶しい。●うるさい。●氣がもやもやする。○源氏「屏風ごもてきていぶせきまで建て集めて」萬葉「久方の雨の降る日を唯ひとり山邊に居ればいぶせかりけり」〔二〕おぼつかなし。●待遠な。○土佐「いつしかといぶせかりつる難波潟蘆こぎそけて御船きにけり」

いぶす 燻(他動四段) 〔一〕物を焚きて烟らする。○「蚊をいぶす」〔二〕金屬に燻の色を着くる。〔三〕烟にて燻す如く問接に人を苦しむる。●烟たく思はする。

いご 以後(名) それから後。●これから後。●あれから後。

いご (名) 飯籠の意。◎めしひづ。

ゐご 圍碁(名) 〔一〕碁を圍む事。●碁を打つ事。「○圍碁の名人」〔二〕碁といふに同じ。○十訓抄「圍碁を打つ」

ゐごばん 圍碁盤(名) 碁盤に同じ。(宇治)

いこよかに 居擧(自動四段) 殘らず集まり居る。

ゐこぞる 射込(他動四段) 矢を射中つる。

いこむ 居込(自動四段) 込み合ひ居る。●すわりこむ。

ゐこむ 遺恨(名) のこるうらみ。●遺憾。●殘念。

いかう 衣桁(名) 衣を脱ぎて掛け置く道具。

いかう 異香(名) 人間界にあるまじき好きにほひ。●靈妙不思議の香。……佛の出現などの時の形容に用ふ。

ゐかう 已講(名) 昔の僧職の名。

ゐかう 遺稿(名) 死後に遺りたる其人の草稿。……文集、歌集。

ゐかう 偉功(名) 大なる手柄。●偉勲。●大功。

いかうに 一向に(副) ひたすら。●一むきに。●專に。○源氏「いかうにつかうまつるべくなん」(〔雅〕)

いごのふ（他動四段）　罵詈する事。（古事記）

いこく　異國（名）　異なりたる國。●外國。●異域。

いこくばり　異國張（名）　古き切地を洗ひ張りする一法。……本邦國有の法ならぬ故に名づく。

いこくじん　異國人（名）　異國の人。●外國人。

いこくせん　異國船（名）　異國の船。●外國の船。

いこやか　身の長の高きありさま。（形）―いこやかなる。（副）―いこやかに。

いこふ　憩。息（自動四段）　休息する。●やすむ。

いこふ　憩。息（他動下二段）　休息せしむる。●休ましむる。

いこず（他動下二段）　いは發語。椹こしに堀る。○萬葉「去年の春いこじて植ゑし我宿の若木の梅は花さきにけり」

いこもる（自動四段）　齋み籠るの意。◎物忌みして寺などに籠る。（雅）

いへ　家（名）　〔一〕人の住む建物。○「家を建つ」「海士の家おほし」〔二〕住家の境内。●屋敷内。●地内。○後拾遺「家の秋を人の乞ひ侍りければ」〔三〕宿。●宅。●うち。○詞花「家に歌合し侍りけるに」〔四〕一家。●一門。●一族。○「家榮ゆ」「家の幸ひ」〔五〕門閥。●家柄。○「大納言の家」「學者の家」〔六〕俗に妻を云ふ。○おいへさま。

いへ　家居（名）　住居。○源氏「行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居近きわたりなり」

いへ　家居（自動一段）　家居する。●住まふ。○貫之集。山風に香を尋ねてや梅の花にほへる程はいへゐそめけん」

いへ　家鳩（名）　鳩の種類。◎家に飼ひ置く鳩の名。

いへ　家蜂（名）　蜜蜂の一名。◎家に飼ひおく蜂の意。

いへ　（句）　言葉もて言へば疎略の言ひ方ほか出來ぬ是は言ふ事も出來ぬ程なりとの意。いふもおろかに同じ。

いへ　（句）　言葉もて言へば一通りの言ひ方ほか出來ぬ是は言ふ事も出來ぬ程なりとの意。―いふもよのつねに同じ。

いへ　（句）　言へば得ぬの意。●言うて見れば言ひにくい。●口で言ふ事が出來ぬ。●得て言ふ可からず。○六帖「いへばねにいはれぬくるし世の中を歎きてのみもつくすべきか

な」

いへばさら（句）　今更言ふまでもなく勿論との意。○源氏「つらつきまみのかをれる程などいへばさらなり」

いへにれ　家楡（名）　節分草の一名。

いへとうじ　家刀自（名）　妻君。●女主人。＝いへとじに同じ。○伊勢「うとき人にしあらざりければいへとうじに盃さゝせ」

いへどころ　家處（名）　家とする處。●住處。●人家のある處。○萬葉「浦島の子が家處見ゆ」

いへとじ　家刀自（名）　妻たる人を尊びて云ふ詞。●妻君。●女主人。◎刀自は假字にて戸主の意なり。

いへぢ　家路（名）　我家への路。●其人の家への道。●人家の方への路。

いへぢ　家地（名）　鎧を作る時その下地に張り附くる革又は布。

いへぬし　家主（名）　家宅の所有者。其家の主人。＝いへあるじに同じ。○宇治「家ぬし笑みて」

いへがら　家柄（名）　門閥。●名家。

いへかまど　家竈（名）　家の竈。……たゞ家といふ程の意に用ふ。○源氏「家竈をも捨て男女の賴むべき子どもにも引き別れて」

いへかぜ　家風（名）　我家の方より吹く風。（萬葉）

いえつ　怡悅（名）　よろこび。

いへづ　家出（自動下二段）　出家する。●僧になる。（續紀）

いへついも　家芋（名）　人家に作る芋の意。◎里芋の一名。

いへづと　家苞（名）　我家への土産。◎もとは品物を苞に入れて持ち歸りたる故に云ふ。○古今「見てのみや人に語らん櫻花手ごとに折りて家づとにせん」

いへづとり　家鳥（名）　鷄を云ふ。◎人家に飼ふ鳥なればなり。（古）

いへづどり（枕）　すべていけどいふ詞に續けて云ふ。……前のいへづとりを見よ。

いへつかさ　家司（名）　貴族の家の役人。●執事。●家扶。●家令。●家從。＝家司に同じ。（雅）

いへつづき　家續（名）　〔一〕甲の家と乙の家と續きたる事。●隣同士。〔二〕人家の一列に立ち續きたる事。＝家並に同じ。

いへづく（自動四段）　我家に近づくを云ふ。○萬葉「我妹子を行きてはや見ん淡路島雲井に見ねぬ家づくらしも」

いへづくり　家作（名）　家の構造。●家の作り方。●かさく。

いへつき　家附（名）　其家を離るべからざるもの。●其家と密切なる關係のある事。

いへなみ　家並（名）　〔一〕人家の一列に立ち並ぶ事。〔二〕家々の並び方。

いへらく（副）　言へるを延べたる詞。●言ひけるやう。●言ひけるは。●言へるには。●曰く。

いへむら　家村（名）　家の群がりたる所。●家込みの處。

いへうつり　家移（名）　轉宅。●屋うつり。●引越し。

いへのいも　家の芋（名）　里芋の一名。……いへついもに同じ。

いへのいも　家妹（名）　家なる妻。○萬葉「家のいもに物言はず來て思ひかねつも」

いへのかぜ　家風（名）　かふう。●一家の特色。○新後撰「家の風かはらず共に榮に來て」

いへのつたへ　家傳（名）　其家に代々受けつたへたる藝道または品物家宅。

いへのむすめ　家娘（名）　大家の娘。●門閥家の娘。（雅）

いへのぐ　家具（名）　かぐ。●家にて用ふる器具。○宇治「家の具一つも失はずして」

いへのぐそく　家具足（名）　いへのぐに同じ。○宇治「家の具足どもおほせもたせて」

いへのこ　家の子（名）　〔一〕門閥家の子。●よき家柄の子弟。○源氏「舞のさま手づかひなん家の子は異なる。〔二〕其家の召使。●家來。●郎黨。

いへのきみ　家君（名）　其家の主人。……いへぎみに同じ。

いへのみち　家道（名）　其家に代々傳へたる藝道。●かだう。●家風。

いへのしふ　家集（名）　其人の詠歌を集めたる書。……かしふに同じ。

いへのもん　家の紋（名）　其家の徽號。●紋所。……德川家の葵。北條家の三つ鱗の類。

いへごと　家言（名）　我家よりの言つけ。●家信。○萬葉「家風は日にけに吹けど我妹子がいへごともちてくる人もなし」

いへで　家出（名）　〔一〕外出。●他所。●出奔。●逃亡。〔二〕出家。●僧になる事。

いへあるじ 家主(名) 其家の主人。○源氏「いへあるじの法師」

いへざかる (自動四段) 我家から遠ざかる。(古)

いへざくら 家櫻(名) 我家に植ゑたる櫻。(雅)

いへぎみ 家君(名) 家の主人。—いへあるじに同じ。

いへじち 家質(名) 我家を質に入るゝ事。●質入れしたる家。

いへびと 家人(名) 家に仕ふ者。—家人に同じ。

いへもと 家元(名) 遊藝の師匠にて其一流の祖と仰がるる家柄を云ふ。……觀世。金春。寶生。金剛四家の能樂に於ける。團十郎。菊五郎の芝居に於けるたぐひ。

いへもち 家持(名) 一家計を立つる人。●戸主。

いで (感) 〔一〕場合に臨みて心の進む時に言ふ詞。●強く人に乞ふ時の詞。●どれ。●どりゃ。○源氏「いで君も書き給へ」「いで此直衣着ん」〔二〕他人のする事を抑へ言ふ詞。●いやもう。○枕「いでいとわろくこそおぼしけれ」源氏「いであな雑なや。いふかひなう物を給ふかな」

ゐで 井手(名) 水をせきとめたる處。—井關に同じ。

いてい 異體(名) 異なる體裁。●異なる風體。

いでる 出居(名) 又でゐともいふ近古武家の家には必ずありたる室にて客の對面所なり。●今の應接室。

いでいり 出入(名) でいり。●しゅつにふ。

いでいる 出入(自動四段) でいりする。

いでいで (感) いでの〔一〕を重れたる詞。●どれ〳〵。

いでばなる 出離(自動下二段) 人を引き離るゝ。●別れ出づる。

いでばえ 出榮(名) 出でがひのある事。●出ぬ前よりも出て後まさる事。

いでがて (名) 出で難き事。△(形)—いでがての。(又)—いでがてなる。(副)—いでがてに。○源氏「いでがてに御手をさらへて休らひ給へる」

いでたち 出立(名) 〔一〕出で立つ事。●しゅつたつ。〔二〕服裝。○旅のいでたち「大將軍の御いでたち」〔三〕出でゝ世に立つ事。●立身。○源氏「大臣の後にいでたちもすべかりける人の」〔四〕立ちあんばい。●たちぐはひ。●新後撰「初瀬川井手こす波の」

○萬葉「こもりくの初瀬の山は出でたちのよろしき山」

いでたつ

（自動四段）　〔一〕出立する。●發足する。〔二〕服裝する。○「女形に出でたつ」〔三〕出でゝ世に立つ。●立身する。

いでそよ

（感）　いでの〔二〕にそよを添へたる詞。●いやもうそれよ。

いてつ

鑄鐵（名）　未だ鍛練を加へざる鐵。……鍛鐵に對して云ふ詞。

いてん

移轉（名）　他の土地に移る事。●他の家に移り住む事。△（動）―移轉す。

ゐでん

遺傳（名）　血統を引きて身體もしくは精神の中に遺り傳はる特殊の事柄。○「遺傳の記臆力」「遺傳の肺病」

ゐでん

位田（名）　中古官吏の位階によりて賜はる田地。すなはち一品正一位八十町より段々に下りて從五位八町に至る。

いでむかふ（イデムカフ）

出向（自動四段）　出でゝ對する。○源氏「物よりおはすれば先づ出で向ひて」

いでむかふ（イデムカフ）

出迎（他動下二段）　出でゝ迎ふる。

ゐでんびやうう（ヤビヨウ）

遺傳病（名）　遺傳の病氣。●系統病。●親讓りの病。

ゐでのちゅうじょう

井手中尉（名）　古代物語の名。但し世に傳はらず。（狹衣）

いてのそう

射手奏（名）　中古の時代五月五日の節會に左右近衛の官人が騎射を行ふ事あり。其射手の人名を陛下の御前に奏する儀式。

ゐでのしたたび

井手下帶（名）　昔し内舍人なりし人。山城の井手の里にて一少女に帶を解きて贈りしが。數年の後之を證にして再び相會し夫婦と爲れりといふ話あり。其時の帶を名づけて井手の下帶といふ。男女別れて又めぐりあふ事の例に引かるゝはもとより。其他男女の間の心の解くる解けぬなどすべて之に緣ある事に用ひらるゝなり。○夫木「山城の井手の下帶幾代經て結ぶ契りのあはれ知るらん」

井手下紐（名）　ゐでのしたおびに同じ。

ゐでのしたひも

いでぐ

出來（自動サ變）　〔一〕出できたる。●現在する。〔二〕出來上る。●できる。●成る。

いでや

（感）　いでの〔二〕に同じ。●いやもう。

いでやいでや

いでやを重ねたる詞。●いやもう〳〵。

いでまし 出座(名) 〔一〕出づる事の敬語。●御出。〔二〕御幸。●行幸。(古)

いでましどころ 出座處(名) 行幸の常にある處。●行幸の嘗てありし處。(万葉)

いでます 出座(自動四段) 〔一〕出づるの敬語。●出で給ふ。〔二〕行幸あらせらるゝ。

いてふ イチョウと發音する故いちの處にあり。

いてこほり (名) しもばしらの事。

いであがふ 出蓬(自動四段) 行き逢ふ。●對面する。

いてき 夷狄(名) 野蠻人。●ゐびす。●ゐみし。……支那にては自國を中華といひ四方を東夷南蠻西戎北狄と稱へたり。

いでぎえ 出消(名) いでばゐのせぬこと。●出でぬ内より却て劣る事。(雅)

いでゆ 溫泉(名) 出湯の意。●地中より湧き出づる湯。●おんせん。

いでゆあみ 溫泉浴(名) 溫泉に浴する事。

いでしほ 出潮(名) でしほに同じ。月の出に滿ち來る潮。○謠曲「月もろともにいでしほの」

いてびと 射手人(名) いてに同じ。

ゐあい 遺愛(名) 生前に愛せし事物の死後に遺り居るもの。○「亡き父が遺愛の櫻」

ゐあひ 居合(名) 座したるまゝ長き刀を拔く術。○「居合を拔く」

ゐあひぬき 居合拔(名) 居合を拔く人。

ゐあはす 居合(自動四段) 居り合はす。●我訪ひたる時其人の丁度内に居る。

ゐあかす 居明(他動四段) 起きて居て一夜を明す。

ゐあつまる 居集(自動四段) 集まり居る。

いあん 醫案(名) 醫者の考へ。●診察上の意見。

いあふ 射合(自動四段) 互に弓を射て相戰ふ。

ゐあふ 居合(自動四段) 居り合はす。●我訪ひたる時其人の丁度内に居る。

いさ (副) 如何にや。●どうあらうか。●否。……知らずと刎れ附くる時に云ふ詞。○金葉「人はいさ我身は末になりぬれば」六帖「いさと答へて我名もらすな」

いざ (副) さあ。●どれ。●いでや。……誘ふ詞なり。○「いざさらば」「いざゆかん」

ゐさい 委細(名) くはしき事。●こまかなる事。

ゐさい 委細(副) くはしく。●こまかに。●つぶさに。○「委細承知仕候」

ゐざいそく　居催促(名)　すわりこみて催促する事。

いさは　斑葉(名)　普通と變りたる色の筋また斑のある葉を云ふ。

いさば　(名)　魚を賣買する市場。

いさばや　(名)　いさば商賣をする家又は人。

いざと　寢聰(名)　目の覺め易きこと。△(形)―いざとなる。(副)―いざとに。○夫木「夜もすがらねぐら定めぬ聲すなり。さもいざとなる時鳥かな」(雅)

いざとよ　いな左にあらず。●いな〳〵。●いや〳〵。―いやとよに同じ。

いざとし　寢聰(形。形狀言ク活)　目の覺め易い。○枕「さもいざとき夜居の僧」(雅)

いざり　漁(名)　いざる事。●漁獵。●すなどり。

ゐざり　躄(名)　〔一〕ゐざる事。〔二〕立ちて歩む事の出來ぬ廢疾者。

いさりたくひ　漁焚火(名)　いさりびに同じ。(雅)

いさりぶね　漁船(名)　漁獵する船。

いさりび　漁火(名)　漁獵をする時に焚く火。○萬葉「海士の漁り火中になづさふ。」

いざる　漁(自動四段)　魚獵をする。●すなどりをする。

いざる　◎磯魚取(いそなどる)の意なりとの說もあり。

ゐざる　笹(名)　ざるの古言。(新撰字鏡)　膝行(自動四段)　居ながらにして前へ進む。●舟の川底にあたりながら少しづゝ進む。

いさを　勇男(名)　勇みたる男。●勇士。

いさを　功。勳。績(名)　てがら。●勳功。●功績。●功勞。

いさをし　功(名)　いさをに同じ。

いさをし　(形。形狀言シク活)　いさましに同じ。

いさをしびと　(名)　勇者に同じ。(紀)

いざわ　(感)　いざといふ時の聲。○萬葉「若子どもいざわ出で見ん」(古)

いさかひ　(名)　言ひ逆ひの意。◎いひあらそひ。●口論。●ことばだたかひ。

いさがに　(名)　莖原蟹の一名。

いさかはまつり　幸川祭(名)　幸川神社の祭。二月初酉の日。

いさかふ　(自動四段)　いさかひをする。

いざかし　(副)　いざに同じ。

いざよひ　(名)　猶豫。●躊躇。いざよふ事。

いざよひ　十六夜(名)　いざよひの月の略。……〔轉じて〕陰曆十六日の日をも夜をも云ふ。

いざよひばら

十六夜薔薇(名)　ばらの一種。

いざよひのつき

十六夜月(名)　陰暦十六日の月を云ふ。◎十五夜の月は正しく日暮に出づるに十六夜となれば暫く躊躇して出つるの意。

いざよひざくら

十六夜櫻(名)　陰暦正月十六日頃花開く櫻。伊豫道後にあり。

いざよふ

(自動四段)　ためらふ。猶豫する。●躊躇する。

いざたちなん

(名)　古代歌曲の名。五節などに歌ふもの。

いざたまへ

(名)　いざさせたまへに同じ。

いさつ

(自動上二段)　大に泣き悲しむ。●じだんだ踏んで泣く。……小兒などの燒けを起して泣く有樣。○記「泣きいさちき」(古)

いさな

勇魚(名)　鯨の古言。

いざなひ

誘(名)　さそふ事。●誘引する事。

いさなとり

(枕)　勇魚を捕るの意にて。◎海。濱。灘等にかけて云ふ。

いざなふ

誘(他動四段)　すゝめ導く。●誘引する。

いさら

(形)　小さき。●わづかの。●少々の。○「いさら水」「いさら波」

ねさらひ

臀(名)　尻。●居敷。

いさらへ

鑄浚(名)　鑄物の仕上げをする事。……鑄物師の詞。

いさむ

勇(自動四段)　勇氣の盛に發る。●心の速る。●氣の雄々しく進む。

いさむ

勇(他動下二段)　勇ましむる。

いさむ

諫(他動下二段)　忠言する。●忠告する。●意見する。●諫言する。●禁止する。

ねさん

遺産(名)　死後に遺したる財産。

ねさん

違算(名)　計算の間違。

いさふ

(他動四段)　叱るの古言。(新撰字鏡)(以呂波字類抄)

ねさふらふ

居候(名)　厄介。●食客。●ひやめし。●くひつぶし。

ねざま

居樣(名)　すわりかた。●座作。

いさまし

勇(形。形狀シク活)　勇みたるありさま。●たけだけしい。●雄々しい。●威勢がよい。

いさご

砂(名)　すな。●小石。○源氏「庭のいさごも玉を重ねたらんやうに見なして」

いざこ

(名)　小さき魚の子。……ざこに同じ。

いさごぢ

砂地(名)　いさごの多くある地。

いさごぢ　砂路(名)　いさごの多くある路。

いさごむし　砂虫(名)　流れ河の石の上に住む蚕に似たる虫の名。

いささ　小(形)　聊かなる。●小さき。○「いさゝ小川」

いささか　聊(副)　僅かに。●少しばかり。●少々。△(形)—いささかの。—いさゝかなる。

いささけし　(形。形狀言ク活)　聊かなるありさま。

いささめに　(副)　かりそめにの意。

いざさせたまへ　(句)　いざ同道したまへの意。○宇治「いざさせ給へ湯あみに」(雅)

いささ　(名)　木の名。青桐の一種。

いさき　(名)　魚の名。おくせいごとも云ふ。

いさぎよし　潔(形。形狀言ク活)　潔白なる。●早劣ならぬ。●未練ならぬ。

いさめ　諫(名)　忠言。●忠告。●禁止。●いさむる事。

いざめ　寢覺(名)　わざめに同じ。(雅)

いさめのつづみ　諫鼓(名)　かんこに同じ。○夫木「君が代はいさめのつづみ鳥なれて風さへ枝を鳴らさざりけり。」

いさみ　勇(名)　勇まし氣にある事。

いさみはだ　(名)　勇みの肌合。●勇みの氣風。

いさみやむ　(他動下二段)　禁め止めさするの意。(いさ)◎禁斷する。

いき　息(名)　呼吸。●氣息。●動物の空氣を呼吸する事。●いのち。

いきゐき　意氣(名)　心の働き。○「意氣揚々」

いきゐき　位記(名)　位を賜はる時の辭令書。……叙從五位など書きたるもの。

いき　生(名)　生存する事。○「生き死に」

いき　(名)　垢ぬけたる事。●通人じみたる事。△(形)—いきな。(副)—いきに。○「いきな風」「いきに見ゆる」(俗)

いぎ　異議(名)　(一)異なる議論。●異なる意見。(二)別條。○著聞「勝負すべきも異議あらじ」

いぎ　意義(名)　こゝろ。●わけがら。●意味に同じ。

いぎゐぎ　威儀(名)　威光ある風采。

いぎゐぎ　居木(名)　馬の鞍の尻を載する處。

いきいつ　生出(自動下二段)　蘇生する。

いきいき　活々(副)　生氣の盛なるありさま○「いきいきして見ゆる」△(又)—いきゝと。

いきはぢ　生耻(名)　生きて耻辱を受くる事。

いきはり 意氣張り(名) 意氣を張り合ふ事。

いきはりづく (名) いきはりくらべ。……づくは腕づく金づくのづくの如し。

いきばる 息張(自動四段) 下腹に力をこめ息を張る。

いきはだ (名) いきなる人の意。

いきはだ 生膚(名) 生きたる人の膚。

いきはだたち 生膚斷(名) 生きたる人の膚を傷つくること。……上古の罪の名。○祝詞式「國つ罪とは生膚斷(いきはだたち)死膚斷」

いきはぎ 生剝(名) 生きたる動物の皮を剝ぐ事。(古)

いきにんぎゃう 生人形(名) 生きたる人の如くに造りたる人形。

いきぼとけ 活佛(名) 生きたる佛。●假に人間となりて形を顯はしたる佛。

いきどほろし (形。形狀言シク活) いきどほりを感するありさま。○紀「目にし見ねればいきどほろしも」

いきどほり 憤(名) いきどほる事。

いきどほる 憤(自動四段) 心中に怒る。●慨嘆する。

いきだはしの轉 (形。形狀言シク活) 問「腹ふくれていきどほしきとて」

いきどまる 生留(自動四段) 生き殘る。●生存する。

いきどころ 行處(名) 行き着く先。(雅)

いきち 生血(名) 生きたる動物の體を傷つけて得たる血。●鮮血。

いきち 意氣地(名) 意地に同じ。

いきちる 行散(自動四段) 方々に散り行く。(雅)

いきちがひ (名) 行き違ひの轉。

いきちがふ (自動四段) 行き違ふの訛り。

いきりやう 生靈(名) 世にある人の怨靈。いきすだまに同じ。

いきほひ 勢(名) 勢力。●意氣の盛なる事。

いきほひこむ 勢込(自動四段) 勢をこむる。●意氣を充實さする。

いきをはなつ 息を放つ(句) 溜息を一時に放つ。

いきほふ 勢(自動四段) 意氣の充實してある。●意氣を壯んにする。

いきをさめのたもの (名) 息やすめの爲めに食する食物。(空穗)

いきわかる 生別(自動下二段) 生き別れをする。●生別する。……死別に對して云ふ。

いきわかる　行別(自動下二段)　行き別るに同じ。●別れ行く。●別れ去る。(雅)

いきわかれ　生別(名)　生きて別るゝ事。○せいべつ。

いきわたる　行渡(自動四段)　ゆきわたるに同じ。

いきがる　(自動四段)　いきであるふりをする。●いき自慢をする。●通人然とする。

いきがほ　生顔(名)　死顔に對して死せざりし以前の顔を云ふ。

いきかくる　行隱(自動下二段)　行きて隱るゝ。(雅)

いきかへる　行歸(自動四段)　行きて歸る。(雅)

いきかへる　生返(自動四段)　蘇生する。●一度死して又生くる。●よみがへる。

いきがみ　活神(名)　活きて居る神。●假に人間となりて形を顯はし給ふ神樣。

いきやうけう　異鄉(名)　よその國。●旅の土地。●他鄉。

いけうけう　異教(名)　異なりたる宗教。●我信ずる外の宗教。●外國の宗教。

いきやうけう　異香(名)　いからに同じ。○「謠曲いきやう薫じて花降る雪の」

いげふ　醫業(名)　醫術の職業。

いぎやうぎやう　異形(名)　普通と違ひたる形。●不思議なる樣子。△(形)―異形なる。(副)―異形に。

ゐきよく　委曲(名)　委細に同じ。

ゐきよく　委曲(副)　委細に同じ。

いきだはし　(形。形狀言シク活)　息ぐるし。

いぎたなし　寢穢(形。形狀言ク活)　床離れのわるい。●眠(ねむ)がるありさま。●眠を貪るの意。○枕「我もとにあるものどもの起し寄り來てはいぎたなしと思ひ顔に」

いきづかひ　息遣(名)　呼吸する樣子。●呼吸の困難なる樣子。

いきづかし　(形。形狀言シク活)　息づくべくある有樣。◎嘆かはし。○萬葉「あないきづかし」

いきづら　生面(名)　生きて居る顔。……死にづらに對して云ふ。

いきづむ　息詰(自動四段)　息ばる。●いきむ。●腹に力を入れて息をする。

いきつく　(自動四段)　行き着くの轉。○源氏「その處と息吐(自動四段)　溜息をつく。●嘆息する。○竹取「大納言南海の濱に吹きよせられたるにやあらんと思ひていきづき伏し給へり」

いきづゑ 息杖(名)　物を荷ふ時息を助くる爲めの杖。

いきつぎ 息繼(名)　息を繼ぐ事。●休息する事。

いきなり (副)　行きなりの轉。◎行きがゝりのまゝに。●そのまゝに。……〔轉じて〕突然。

いきむ (自動四段)　息をつむる。＝いきづむいきばるに同じ。

いきうつし 生寫(名)　眞物かと思はるゝ如くによく似る事。○「父上の生き寫し」

いきうめ 生埋(名)　生きながら土中に埋むること。……昔し行はれたる刑罰の一種。

いきうし 行憂(形。形狀言ク活)　行きづらし。●行きたくない。(雅)

いきうす 行失(自動下二段)　行きて失する。●行方の知れずなる。(雅)

いきのを 息緒(名)　命をつなぐ緒の意味より來る。◎いのち。……〔轉じて〕生きて居る限。○萬葉「いきのをに思へる我を」

いきのね 息根(名)　生命。●いのち。

ねぎのみやミヨうぶ 威儀命婦(名)　昔し朝廷の儀式を監督奉行する女官の役。

いきのした 息下(名)　死にがゝりたる時の呼吸。○「息の下にていひけるやう」

いきくさ 生草(名)　草の名。辨慶草の一名。

いきやくし 生藥師(名)　生きて此世にある藥師如來。……藥師如來は醫業を興ふる佛なれば。多く功驗のある醫師を崇めて云ふ。

いきやすめ 息休(名)　息を休むる事。●休息。

いきぶれ 行觸(名)　途中に汚穢なるものに行きあひたる時の穢れ。＝ゆきぶれに同じ。(雅)

いきごむ 意氣込(自動四段)　勢ひを込める。●熱心する。

いきごみ 意氣込(名)　意氣込む事。●熱心なる事。

いきゑ 生繪(名)　生きたる如く畫きたる繪。●肖像。

いきあがる (自動四段)　生きかへる。●蘇生する。

いきさつ (名)　事情。●情實。●なりゆき。●關係。

いきざし (名)　呼吸する樣子。●いきづかひ。

いきざれ (名)　遊仙窟には氣調の文字を讀めり。◎樣子。●模樣。●氣色。●けはひ。○唐物語「揚家の娘を得給ひてけり。云々。其いきざしは夏の池に紅の蓮はじめて開けたるにやと見ゆ」

息切(名)　呼吸の續かぬ事。●息ぐるしき事。

いききみ (名) ばかみの古言。

いきぎも 活膽(名) まだ活きくして居る膽。●動物を殺して取り立ての膽。

いきめぐらふ 生廻(自動四段) 生きて世に廻る。●ながらへて居る。(源氏)

いきみ 生身(名) 生活して居る身體。

いきみたま 生御魂(名) 生きたる人の靈魂を祭る儀式。……昔し七月八日より十三日までの間に日を撰びて人々適宜に行ひしなり。後は重に盆祭の日生きて居る兩親を子女の饗應し祝ふ事を云ふ。

ゐぎし 威儀師(名) 昔し朝廷の御佛事の時其式場を監督奉行する僧官の役名。……枕草紙に「季の御讀經の威儀師」とあるは當日清涼殿にて仁王經を讀むべき僧を引率して參る奉行の僧を云ふなり。

いきしに 生死(名) 生くる事と死ぬる事。●せいし。

いきもの 生物(名) 生活あるもの。●命あるもの。●動物。

いきせき (副) 息の詰まる程に。●呼吸を烈しくして。

いきす 仙草。海髮(名) 海草の名。亂髮の樣なる形のもの。○延喜式「供御月料伊祇須九斤」

いきすだま 生靈。窮鬼(名) いきりゃう。●生きたる人の怨靈。(雅)

いきすぎ (名) ゆきすぎの轉。●さしですぎ。

いゆ 癒(自動下二段) 病の直る。●治する。●本復する。

いゆく (自動四段) いは發語にて行くに同じ。(古)

いゆきあひの (枕) 坂にかけて云ふ。◎坂は此方より登りて行き逢ふ處なれば云へり。いは發語。

いゆししの (枕) 心を痛み行きも死なむとなどの句にかけて云ふ。◎いゆしゝは射られたる鹿の意にて其鹿の如く云々と續くこゝろなり。(萬葉)

いめ 夢(名) ゆめに同じ。(古)

いめ 射部(名) 獵に出でゝ鳥獸を射る輩を云。○萬葉「高山の峰のたをりに射部立てゝ鹿待つ如く」

いめい 異名(名) いみゃうに同じ。●別名。

ゐめい 遺命(名) 死後に言を遺して命令する事。●遺上の人の遺言。

いめたてて (枕) 跡見(いみ)の岡の枕詞。◎射部(いめ)立てて鳥獸

を射て其跡を見る意にやとの説もあれと確かならず。

いめびとの（枕）　伏見の枕詞。◎いめびとは射部人にて鳥獣を射る人の事なるが其射んとする鳥獣に見驚かれじと伏し隠れつゝ窺ひ居る故に伏見とつゝけしにや。○萬葉「大椋の入江とよむなりいめびとの伏見が田井に雁わたるらし」

いみ　意味（名）　其心。●意義。●譯。○「意味深長」

いみ　齋。忌（名）　〔一〕潔齋する事。●いみきよむる事。〔二〕嫌ふ事。●いやがる事。〔三〕物忌。〔四〕喪にて引籠る事。●喪中。●忌中。

いみ　異味（名）　〔一〕一種異樣の味。〔二〕一種異樣の味あるもの。

いみどの　齋殿（名）　齋館に同じ。

いみがかり　忌掛（名）　喪の忌の掛るべき近親。

いみがたき　忌敵（名）　互に忌み嫌ひて敵となる事。又は其人。

いみやうミョウ　異名（名）　本名の外の名。●別名。●一名。●あだな。

いみたち　齋舘（名）　人々の齋戒沐浴するところの家。……伊勢神宮にあるもの。

いみたけ　齋竹（名）　加茂祭の時不淨なる人を入れしめざらんがために立つる竹。

いみな　諱（名）　「一」實名。●本名。◉死したる後に其人の實名を忌み憚りて稱へぬといふ意味にていみなと稱ふ。○神皇正統記「後醍醐天皇諱は尊治」〔二〕誤りては諡の事にも用ひたり。○榮花「五月十八日に失せ給ひぬ。後の御諱清慎公と聞ゆ」

いみのみや　齋宮（名）　いつきのみやに同じ。

いみくら　齋藏（名）　齋み潔めたる藏。……神寶などを入るゝもの。（古語拾遺）

いみごと　忌事（名）　佛教の戒。いむことに同じ。

いみことば　忌詞（名）　忌み嫌ひて言はぬ詞。●忌むべき詞の代りにいふ詞。……伊勢の齋宮にて佛といふを忌みて中子といひ。世俗一月の三箇日中は鼠と云ふを忌みて福と稱へさするの類。

いみあけ　忌明（名）　忌日の日數の明けたる事。●忌明。●忌明。

いみざぶらひィや　齋侍屋（名）　齋戒沐浴したる人の居

る家。……昔し伊勢神宮にありたるもの。

いみき

忌寸(名)　姓(かばね)の一つ。……かばねを見よ。

いみじ

(形。形狀言シク活)　甚し。●たいそう。●たいへん。●よほど。●きつい。●ねらい。……是には二つの用法あり。下に分ち示す。

〔一〕上に掲げたる解釋もて直に譯し得べきもの。○竹取「いみじく靜かに」(甚だ靜に)源氏「いみじう霙(みぞれ)ふる夜」(たいそうみぞれふる夜)伊勢「雷さへいといみじう鳴り」(雷もねらう鳴り)〔二〕下に含める他の形容詞を略し前後の意味にてそれと知らせたるもの。○源氏「親の御なきかげを耻かしめん事のいみじさになん」(いみじくかなしさの略)同「いみじき贈物どもを捧げ奉る」(いみじく珍らしきなどの略)同「翁のいといみじきぞ出で來る」(いみじく老い衰へたるの略)

いみじう

(副)　いみじくの音便。……いみじの處を見よ。

いみび

忌日(名)　忌みつゝしむべき日。●死者の忌日(きびつ)。●命日。

いみび

忌火(名)　清淨にして打出したる火。……神事に用ふるもの。

いみす

意味す(他動サ變)　意味持つの意。

いし

石(名)　礦物の一種。其大なるを岩と云ひ。小なるを砂と云ふ。

いし

醫師(名)　醫術を職業とする人。●病を療する人。●醫者。●くすし。

いし

意思(名)　思想。●心意。●こゝろばせ。

いし

椅子(名)　現今の椅子(いす)に似たる古代の腰掛。……禁中にて主上などの用ひさせ給ひしもの。○拾遺梅花の御もとに御いし立てさせ給ひて花の宴せさせ給ふに」

いし

(形。形狀言シク活)　充分に發達ぜざる有樣。●わかゝし。○紀「いにしへ國いしく地いしき時」

ゐし

遺志(名)　死したる人の生前の意志。

ゐし

闈司(名)　古代の官名。後宮の門衛。

いしゐ

石井(名)　〔一〕石にて側を造りたる井戸。〔二〕石地に掘りたる井戸。○後拾遺「女の石井に水汲みたるかた繪にかきたるを」

いしいし

(名)　團子の異名。……德川時代御殿女中の

詞。◎石に似てかたきの意。

いしいし 以次以次(副) 漸々。●だん〳〵。●つぎ〳〵に。△(又)—いし〳〵に。

いしいも 石芋(名) 食用に適せざる野生の芋の名。●異名は……饅頭芋。●番芋。

いしゐづつ 石井筒(名) 石にて造れる井戸側。◎自然の岩の井筒。○散木「石井筒ひまもる水にたばぶれてつてにも夏を聞きわたるかな」

いしばひィ 石灰(名) 一種の石または貝殻などを焼きて水を注ぎ粉末とせしもの。

いしばひィいし 石灰石(名) 石灰の原料となる石の名。‖せきくわいせきに同じ。

いしばひィのだん 石灰段(名) 石灰もて造れる段階。昔し清涼殿中にありしもの。

いしばひィのま 石灰間(名) 石灰の段のあるところ。

いしばち 石鉢(名) 石造の鉢。……神社佛閣の手水鉢の類。

いしばり 石針(名) 石にて造りたる針。

いしばりたひィ 石刺鯛(名) 魚の名。鯛の一種。鯖尾などに刺をもてり。

いしはなび 石花火(名) 草の名。‖いそまつに同じ。

いしはら 石原(名) 小石の多き平地。

いしばえ 石鮠(名) 魚の名。‖鮠に同じ。◎石のある處に住む故に云ふ。

いしばし 石橋(名) 石造の橋。

いしばし 石階(名) 石の段々。

いしはじき 石彈(名) 〔一〕敵味方に分れて石を彈き合ふ遊戯。〔二〕昔し敵陣に石を投げたる兵器の名。

いしぼとけ 石佛(名) 石を刻みて造りたる佛體。……〔轉じて〕無感覺なるもの。

いしぼたん 石牡丹(名) 石の名。形牡丹の花に似たるもの。

いしべっつい 石土突(名) 石造の竈。

いしへん 石扁(名) 漢字の「硝」「礦」「砲」「研」などの左半分を云ふ。

いしどうろ 石燈籠(名) ‖いしどうろの略。

いしどうろう 石燈籠(名) 石造の燈籠。

いしどこ 石床(名) 石より成れる川の底。

いしどさか 石鶏冠(名) かたき鶏のとさかを云ふ。

いしぢ 石地(名) 〔一〕石多き土地。〔二〕石地塗の略。

いしぢぬり 石地塗(名) 漆塗の一方。蠟色の艶を消し

たるもの。◎石の目に似たる故に云ふ。

いしぢざうぢう 石地藏(名) 石にて造れる地藏尊の像。

いじる (他動四段) もてあそぶ。●手をつけてなぐさむ。

いしわりがひィ 石割貝(名) いがひに似たる貝の名。鳥貝とも云ふ。

いしわた 石綿(名) 〔一〕火浣布を織るに用ふるもの。纖維の如く軟かなる石。〔二〕蠟石に似たる石の名。〔三〕化石の名。

いしがひィ 石貝(名) 味噌貝の一名。

いしがに 石蟹(名) 〔一〕山蟹の一名。山間の小流に住む小さき蟹。〔二〕蟹の化石したるもの。

いしかはジ 石川(名) 〔一〕水底の石より成れる川。●石の多き川。〔二〕催馬樂の曲名。

いしがれひィ 石鰈(名) 魚の名。王餘魚(かれひ)の一種。

いしがけこもん 石垣小紋(名) 小紋の一種。石垣の形に染めたるもの。

いしがけしぼり 石垣絞(名) 絞りの一種。石垣の形を絞り出だしたるもの。

いしかき 石垣(名) いしがきに同じ。

いしがき 石垣(名) 石を築き上げて造れる垣。俗にいしがけと云ふ。

いしがめ 石龜(名) 普通の龜の大なるもの。

いしがみ 石神(名) 石を神體として祭りたるもの。いはがみと同物。

いしょ 醫書(名) 醫學醫術に關する書物。

ゐしょ 遺書(名) 書き置き。

ゐしょ 位署(名) 官位を書く時の書式。……其一、官を先にし位を次にす。(中納言從三位)其二、位高く官卑き時は行の字を加ふ。(正二位行大納言)其三、位卑く官高ければ守の字を加ふ。其四、同位の官は文官を先にす。(中宮大夫右衞門督)其五、外官は相當に依らず諸官の下にあり。(中宮大進兼近江守)の類。

ゐしょがき 位署書(名) ゐしょに同じ。

いしゃうジャウ 衣裳(名) 〔一〕きもの。●衣服。〔二〕裝束。○「能の衣裳」「芝居の衣裳」

いしゃうジャウ 意匠(名) 工夫。●趣向。●凝らしたる考へ。

ゐせうシヨウ 遺詔(名) 天皇の御遺言。

いじゃうジョウ 以上(名) 〔一〕これよりかみ。●これよりまへ。〔二〕目錄又は手紙等の終りに記して

本文は此までと云ふ事を示す詞。〔三〕御目見以上の略。◎德川時代の制に將軍にお目通りの叶ふ家格。すなはち旗本を云ふ。

いしょく　衣食(名)　衣と食と。●着るものと食ふものと。

ゐじょく　居職(名)　我家にて爲す職業。……印刻師。仕立屋等の類。

いしょくおう　衣食住(名)　衣と食と住家と。

いしょくす　衣食(自動サ變)　衣食を得るの意にて。◎生活する。

いしだひィ　石鯛(名)　〔一〕黑鯛に似たる魚の名。〔二〕鯛の異源八の一名。

いしたたき　石叩(名)　鶺鴒の異名。

いしだたみ　石疊(名)　〔一〕四角三角六角などの石を敷きならぶる事。●敷石。〔二〕上の如くした る所。〔三〕上の如き形をあらはしたる摸樣。

いしだたみがひィ　石疊貝(名)　黑又赤にて石疊の如き摸樣ある貝の名。

いしだん　石段(名)　石造の階段。●石の段々。●石階。

いしたけ　石竹(名)　草の名。●なでしこ。●石竹を直譯せしもの。○夫木「いしたけの花さく宿にいかにしてふしよき竹を垣にゆはまし」

いしたぶ　(自動四段)　急ぎ飛ぶの意。○記「いしたぶや天馳使(あまはせつかひ)」

ゐしつ　遺失(名)　品物を取落す事。△(動)―遺失す。

いしつばめ　石燕(名)　石の名。形蛤に似たるもの。

いしつぼ　石壺(名)　石にて造れる壺。神社にありて祈る事ある人の躋み鳴らしなどしたるもの。○新後撰「榊もて八つの石壺ふみならし君をぞ祈る内の宮人」

いしつかひィ　石使(名)　硯の異名。(藏玉集)

いしつたひィ　石傳(名)　石を傳ひてあゆむ事。△(副)―石づたひに。

いしづつい　石槌(名)　石にて造りたる槌。●石製の刀。○紀「いしづつい持ち擊ちてし止まむ」

いしつくり　石作(名)　石工。●石屋。

いしづくり　石造(名)　石にて造る事。●石にて造りたるもの。○「石造りの家」

ゐしづまる　居靜(自動四段)　居て落ち着く。●居ついて靜になる。(雅)

いしつき　石突(名)　〔一〕鎗長刀などの柄の地にあたる方の端を金具にて包みたる處。〔二〕刀のこじり。

いしづき 石附(名) 竹の根の土中にありて腐りたるもの。

いしなごり (名) いしなごりの意。◎石子を取り遊ぶ事。●小石にてする手玉遊び。○拾遺「東宮の石なごりの石めしければ三十一を包みて一つに一文字を書きて參らせける」

いしなげ 石投(名) 石を投ぐる事。●石を投ぐる遊戯。

いしなご 石子(名) 小石を撒き投げてする遊戯。●今のお手玉などに似たる仕方の遊び。

いしなぎ (名) 魚の名。いしもちの種類。

いしらます 射白(他動四段) 射て敵を白ましむるの意。白むは座が白むなどの類にて俄に興趣盡くること。◎矢を雨注して敵を辟易さする。

いしむ (自動四段) ゆがむ。●ひずむ。●眞直ならぬ。

いじむ (他動下二段) 困らする。●なやましむる。

いしん 異心(名) 惡心。●二心。●謀反心。

ゐしん 維新(名) 政事上の大改革。●維れ新なりの意。明治の初年の事に云ふ。

いじん 異人(名) 異國人。●外國人。

いしんでんしん 以心傳心(句) 甲の心から乙の心に傳ふる事。

いしう (副) いみじうの略。いしくに同じ。○保元「いしうも仕へつるものかな」(雅)

いしうち 石打(名) 小石を持ちて互に打ちつけあふ子供遊び。●石合戰。

いしうち 石打(名) いしうちのはねの略。

いしうちのはね 石打羽(名) 鷲の尾の左右第一二の丈夫なる羽を云ふ。◎石を打つ程の力ある故にいふ。

いしうちのそや 石打征矢(名) 石打の羽にて矧ぎたる矢。

いしうちのやなぐひ 石打胡籙(名) 石打の征矢を差したる胡籙。

いしうら 石占(名) 古へ行はれたる卜占(うらなひ)の一方。小石を並べ其數によりて吉凶を知るの法。(萬葉)

いしうす 石碓(名) 石にて造りたる碓。

いしのち 石乳(名) 石の名。●鐘乳石。●つらゝいし。

いしのちち 石乳(名) いしのちに同じ。

いしのねび 石帶(名) 革に石を縫ひ附けて造れる帶。昔し公卿の朝服に用ひたるもの。「●せきたい。」〔圖〕

いしのかたしろ 石形代(名) 墓標の石。●石碑。

いしのたけ 石竹(名) なでしこの一名。……いしたけの蕊を見よ。○散木「君が代のためしに引かん春日野の石の竹にも花さきにけり」

いしのけのり 石毛海苔(名) 深山の岩につく海苔の一種。

いしのあぶら 石油(名) 石よりいづる油。●石油(せきゆ)。

いしのみまし 石御座(名) 常陸の鹿島神社の社内にありて。此に明神の天降り給へりと言ひ傳へたる石。要石の事なりとも云ひ又別物なりとも云ふ。○夫木「霜れかれ今日見つるかな千早振深山の奥の石の御ましを」

いしのひ 石火(名) 石と金と觸れて生ずる火。……忽に消ゆるものゆゑ。瞬間の意また世のはかなき譬などに多く用ふ。

いしく (副) いみじくの略。……多くはよくこそ殊勝になどの意に用ふ。○平治「汝いしく參りたり」謠曲「いかに張良。いしくも早く來るものかな」(雅)

いしぐ 石工(名) 石を切り出だす工人。●石を細工する工人。●石屋。

いじぐ (自動下二段) かじける。●ちひさくなる。●いじける。

いしくひむし 石食虫(名) 虫の名。大きさ二三分位にて形平たく丸く。海邊の石を食ひて生活する虫。

いしぐるま 石車(名) 石を運ふ爲めの車。

いしくれ 石塊(名) 石の小さきかたまり。●石のかけ。……(訛りて)石ころ。

いしくなぎ (名) 鶴頷の異名。……いしたゝきに同じ。

いしぐら 石藏(名) 石造の倉庫。

いしや 石屋(名) 〔一〕石を賣買するを業とする家。〔二〕石を賣買し。又は切り出だし。又は之を細工する工人

いしゃ 醫者(名) 醫を業とする人。●醫師。●くすし。●國手。

ゐじゃく 胃弱(名) 胃の腑の衰弱したる事。

いしやま 石山(名) 石より成れる山。●石がちなる山。

いしやき 石焼(名) 陶器の一種。磁器。……土焼に對して云ふ。

いしやきどうふ 石焼豆腐(名) 鍋に油を塗りて焼きたる豆腐。

いしま 石間(名) 石と石との間。○源重之女集「上氷とくるなるべし山陰の石間の清水おとまさるなり」

いしま (名) いしみたる事。●器物などのゆがみたる事。○瓶などのいしまあるはいと見苦し」(雅)

いしけん 石拳(名) 拳の一種。手のひらを石、紙、剪として勝負を定むる遊び。●じゃんけん。

いしぶろ 石風呂(名) 石造の据風呂。

いしぶね 石船(名) 〔一〕船脚を重くする爲めに石を積みて重くせし船。〔二〕石を積みて運搬する船。○夫木「明石の浦の海士の石舟」

いしふぐ 石河豚(名) 河豚の一種。

いしぶみ 碑(名) 石文の意。◎文字また文章を彫刻せし石。●石碑。●石塔。

いしぶし (名) 川魚の名。はぜに似たる魚。◎川中の石に伏して居る故の名。

いしぶし (副) ぐずく。●にはきずに。

いしこ 石粉(名) 石の粉。……燧石の類。

いしころ 石塊(名) いしくれの訛り。

いしこづめ 石子詰(名) 生ながら小石の下に人を埋むる刑罰。

いしあはせ 石合(名) 石を左右合せて勝負をする古代の戯。(散木)

いしあやめ 石菖蒲(名) 菖蒲に似たる草。=石菖(せきしやう)に同じ。

いしあぶら 石油(名) 石炭より出づる油。=石油(せきゆ)に同じ。

いしざか 石坂(名) 石の多き坂。●石を敷きたる坂。

いしき 石櫃(名) 石棺のおほひを云ふ。……上古屍を埋るに用ひしもの。

ねしき 違式(名) 法式に違ふ事。

ねしき 居敷(名) 〔一〕座する所。●席。●座。〔二〕臀(さらひ)。●尻。◎すわる時敷く處なれば名づく。

いしきり 石切(名) 石を切る職業。●石を切る事。〔二〕石を切るを業とする人。●石屋。●石工。

いしきりのみ 石切鑿(名) 石屋の用ふる鑿。

いしぎく 石菊(名) 〔一〕くさびらいしの一種。〔二〕菊

の花摸樣ある堅き石。

いしゆ　意趣(名)　〔一〕心の趣く所。●意の向ふところ。〔二〕遺恨。●うらみ。○「意趣を晴らす」

いしゆがへし　意趣返(名)　仇を返す事。●恨みを報ゆる事。

いじつ　醫術(名)　病を癒やす術。●醫師の技術。

いじつ　異術(名)　怪しき方術。●魔法。●妖術。

いしゆく　畏縮(名)　畏れて小さくなる事。△(動)―畏縮す。

いしゆぎり　意趣切(名)　遺恨によりて人を刃物にて傷つくる事。

いしゆみ　石弓(名)　石を敵陣に投ぐる古代の兵器。

いしめ　石目(名)　金の小槌にて金屬の表面を輕く叩きて附けたる痕を云ふ。……金工の詞なり。◎石を粗(あらそ)い叩(たたき)にしたるものに似たる故に此名あり。

いしめこもん　石目小紋(名)　小紋の一種。石目の形を染め出だし又は織り出だしたるもの。

いしみ　(名)　小さき籠。○散木「いしみゆすりて洗ふ根芹ぞ」

いしみかはり　杠板歸(名)　汁は傷藥となる蔓草の名。

いしみけ　(名)　小さき籠。●いしみに同じ。

いしひ　石樋(名)　石造の竇。○夫木「まゆせつる石樋の水の下にのみ」

いしびや　石火矢(名)　大砲の種類。……近古に行はれたる兵器。

いしもち　(名)　〔一〕鯽に似たる小魚の名。◎頭に石の如きものある故に云ふ。〔二〕いしぶしの一名。

いしもちごもん　石持小紋(名)　小紋の一種。石を積みあげたる如きもの。略していしもちとのみも云ふ。

いしずり　石摺(名)　〔一〕墨を以て石碑などの文字を摺り寫す事。〔二〕上の如くして寫し取りたるもの……〔轉じて〕黑地白文に摺る事。また黑地白文に摺りたる書畫。

いしずゑ　礎(名)　石据の意。◎土臺の石。

いしずみ　石炭(名)　せきたんに同じ。

いしすずり　石硯(名)　石の硯。……木硯。瓦硯等に對して云ふ。

ゐび　萎靡(名)　萎れ靡(なび)く事。●衰ふる事。●弱る事。△(動)―萎靡す。

いひる
いへヒョう　（他動四段）　うるさく責むる。（俗）

意表（名）　思ひしより上越したる事。●意外。

飯櫃（名）　●案外。●存外。　●橢圓形。●小判形。◎飯櫃の形より起れる詞。

いびつ

いびつばら　飯櫃薔薇（名）　草の名。鶯の猿垣の一名。

いびつなり　飯櫃形（名）　飯櫃の形。●橢圓。●小判形。

いびく　鼾（自動四段）　鼾をかく。

いびき　鼾（名）　睡眠中呼吸の加減にて出づゝ響。○「高いびき」「いびきかく」

いも　芋（名）　〔一〕根又は葉を食用とする野菜の名。種類多し。里芋。蓮芋。山の芋。八頭。薩摩芋。唐芋の類。〔二〕特に山の芋を云ふ。〔三〕特に里芋を云ふ。〔四〕特に薩摩芋を云ふ。

いも　妹（名）　男より女を親しみて呼ぶ詞。〔一〕妻。●情婦。●色女。〔二〕いもと。

いも　痘痕（名）　じゃんこ。●菊石。

いもひィ　齋（名）　いみを延べたる詞。◎物忌する事。●精進潔齋。

いもね　齋居（名）　物忌をなして居る事。

いもねのみやこ　齋居都（名）　伊勢の齋宮の御所を云ふ。

いもと　妹（名）　いもうとに同じ。

いもとわれ　妹與我（名）　催馬樂の曲名。

いもるもり　蟶蟾（名）　井戸。池などに住む蝦蟆に似たるもの。◎井守の意。

いもがひィ　芋貝（名）　貝の名。形芋の子に似たるもの。

いもがいへュに　（枕）　妹が家に行くの意にていくといふ文字にかゝる枕詞。○萬葉「妹が家に伊久理の森の躑躅の花」

いもかはゥどん　芋川饂飩（名）　平打の饂飩。訛りてはひもかは又はひぼかはと云ふ。◎もと尾張の芋川と云ふ處より打ち出だして鳴海邊の名物なりしより起れる名。

いもがり　妹許（名）（副）　妹のもとへ。●情婦の處へ。○拾遺「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の川風さむみ千鳥なくなり」

いもがりと　（枕）　いもらがりに同じ。此詞は萬葉集に妹等許と書きてあるを妹許等の轉倒ならんとて此く讀む説もあるなり。

いもがほォ　（名）　痘痕のある顔。●菊石面。

いもがかど　妹門（名）　催馬樂の曲名。

いもがかど　（枕）　妹が門を入り出づるの意。にていり

いづみ川にかゝる枕詞。○萬葉「妹が門いりいづみ川のとこなめに」

いもがかみ

（枕）　妹が髪を上ぐるとかゝる枕詞。○萬葉「妹が髪上小竹葉野の放駒」

いもがそで

（枕）　妹が袖をまくとかゝる意詞。まくとは卷きて枕にする意なり。○萬葉「妹が袖卷向山の」

いもがら

芋莖（名）　芋の莖の干したるもの。

いもかけどうふ

芋掛豆腐（名）　料理の名。ところゝ汁をかけたる豆腐。

いもがける

（枕）　妹が着る笠とかゝる枕詞。○萬葉「妹がける三笠の山の」

いもかご

零餘子（名）　零餘子の一名。

いもがてを

（枕）　妹が手を取るとかゝる枕詞。ところも取るの通音なれば是にも續けたり。○萬葉「妹が手を取りて引きよぢ打ち手折り君がさすべき花さけるかも」同「妹が手をところしの池の」

いもがさ

疱瘡（名）　皮膚に出來る傳染病の一つ。●ばうさう。●天然痘。

いもがきる

（枕）　いもがけるに同じ。

いもがゆ

芋粥（枕）　〔一〕山の芋を入れたる粥。（宇治）〔二〕薩摩芋を入れたる粥。

いもがめを

（枕）　妹が目を疾く見ん見まく欲りするなどの意にかけたる枕詞。○萬葉「妹が目を跡見の崎なる」同「妹が目を見まく堀江のさゝれ波」

いもがしら

芋頭（名）　里芋の根の大なるもの。

いもがひも

（名）　妹が紐を解くむすぶゆふなどゝかゝる枕詞。○萬葉「妹が紐とくとむすぶと立田山」同「妹が紐結八河内を」

いもたけ

芋茸（名）　菌の名。

いもだこ

芋蛸（名）　料理の名。芋と蛸との甘煮。

いもづる

芋蔓（名）　芋の蔓。

いもなろ

（名）　たゞ妹といふに同じ。（萬葉）

いもなね

（名）　妹を敬愛して云ふ詞。（萬葉）

いもなます

芋鱠（名）　料理品の名。煮たる薩摩芋を入れたる鱠。

いもらがり

（枕）　妹の許にの意。故に其戀人の處に今來と言ひかけ。また行くを轉じていことも言ひかけたり。○萬葉「妹らがり今木の嶺に」同「妹らがり馬に鞍おきて生駒山うち

こえくれば紅葉ちりつゝ」

いもむし 芋虫(名) 虫の名。野菜の葉など害する形醜きもの。後蛹となり又化して美しき蝶となる。

いもふ 齋(自動四段) いむを延べたる詞。◎物忌する。●精進潔齋する。

いもうと 妹(名) いもぴとの音便。◎〔一〕已より後に生れたる女の同胞。〔二〕男兄弟より姉を呼ぶ詞。(雅)

いもの 鑄物(名) 金屬を溶かし鑄型に注ぎて造りたるもの。

いものはは 芋の母(名) 芋頭に同じ。

いものし 鑄物師(名) 鑄物を造る職工。

いもでんがく 芋田樂(名) 里芋を串に刺し味噌を附けて燒きたるもの。

いもあん 芋餡(名) 薩摩芋にて作りたる餡。

いもざけ 芋酒(名) 山の芋を磨り込みたる酒。

いもきぐさ (名) 草の名。龍膽の一名。

いもめいげつ 芋名月(名) 八月十五夜の月の異名。此夜里芋を供物として月を祭り又芋汁を作りて月見の宴を開く事ある故に名づく。

いもめし 芋飯(名) 里芋又は甘藷を飯に交ぜて炊きたるもの。

いもし 薮(名) 芋莖の古名。

いもじ (名) ゆもじの轉。

いもじ (名) 鑄物師の略。(雅)

いもじ (名) 烏賊の異名。……御殿女中の詞。

いもじ 以文字(名) いといふ文字。

ゐもじ 爲文字(名) ゐといふ文字。

いもじり (名) 虫の名。いぼむしりの轉。

いもじる 芋汁(名) 〔一〕ところ汁に同じ。〔二〕里芋の味噌汁。

いもしんじょ 薯蕷薯(名) 料理の名。つくねいも又は山の芋を磨りて豆腐を加へゆでたるもの。

いもじうとめ 妹姑(名) 己が妻の姉妹。●小姑。

いもせ 妹脊(名) 〔一〕夫婦。〔二〕兄と妹。●姉と妹。

いもせどり 妹脊鳥(名) 時鳥の異名。

いせ 五十瀨(名) 數多くの川瀨。

いせい 異姓(名) 己れと異なりたる姓。他家の苗字。

ゐせい 威勢(名) たけき勢ひ。

ゐせい 遺精(名) 夢中に精液の漏出する事。●妄想。

いせはなび 伊勢花火(名) 草の名。一名岩桔梗。

いせばうふう　伊勢防風(名)　防風の事。◎伊勢より多く産せし故に名づく。

いせどうふ　伊勢豆腐(名)　ところろに鯛のすりみと玉子の白味とを加へ葛をかけて料理したる豆腐

いせなどり　伊勢踊(名)　伊勢音頭に合せてする踊。

いせたんご　伊勢音頭(名)　小唄節の名。伊勢の古市より流行せしもの。

いせをのあま　(名)　伊勢の海の海人。……を文字は助辭なりとも山の海に突き出でたる處の意なりとも云ひて詳なすず。○新續古今「玉藻刈る伊勢をの海士の袖ならば」

いせをのみや　(名)　伊勢の大神宮を云ふ。○夫木「月影も絶なず休まん鈴鹿川伊勢をの宮の世々の古道」

いせおしろい　伊勢白粉(名)　白粉の一種で伊勢の國の名産。參宮土産などにて昔より名高きもの。

いせわかめ　伊勢若和布(名)　伊勢より出づる若和布。

いせかはり　(名)　伊勢音頭に同じ。

いせつ　異說(名)　異なりたる解說。●普通にはづれたる議論。

いせつばき　伊勢椿(名)　椿の一種。花は八重にして大きなるもの。●一名蓮華椿。

いせん　緯線(名)　緯度の線。

いぜん　以前(名)　これよりまへ。●このまへ。●過ぎ去りし前。

いぜん　依然(形)　そのまゝ。●もとのまゝ。●少しも變らず。●△(又)―依然たる。(副)―依然として。

いぜんげん　已然言(名)　已に然るをいふ文法上の詞。……聞けば起くれば得れば見れば の如く文字に接する聞け起くれ得れ見れの類の詞。

いせのうみ　伊勢海(名)　催馬樂の曲名。

いせまゐり　伊勢參(名)　伊勢大神宮に參詣する事。

いせごひ　伊勢鯉(名)　目口赤くして形鯉に似たる魚の名。伊勢などにては目を取りてからすみに作る。●めなだ　あかめ　くちめとも云ふ。

いせごり　伊勢行李(名)　伊勢名産の柳行李。

いせえび　伊勢海老(名)　太平洋沿岸に産する巨大なる海老。常に煮て食す。味極めて美なり。◎伊勢産のもの早く名を得し故に此稱あり。＝鎌倉海老と同物。

いせあみがさ 伊勢編笠(名) 伊勢の國の名産なる編笠。

いせさんぐう 伊勢參宮(名) 伊勢大神宮へ參詣する事。

いせざくら 伊勢櫻(名) 櫻の一種。花は八重にして紅なる櫻。

ゐせき 堰。井關(名) 田の水を堰き留めたる所。

ゐせき 遺跡(名) (一)昔し名高き出來事のありたる跡。●舊蹟。(二)死したる人の跡。

いせびと 伊勢人(名) 風俗歌の曲名。

いす 椅子(名) 西洋風の腰掛。

いすろこぶ (自動四段) 心が荒び進む。○祝詞式「神達のいすろこび荒びますを言ひ直し和しまして」

ゐすわり 居座(名) ゐすわる事。●すわりたる儘にて動かぬ事。

ゐすわる 居座(自動四段) すわる。●座する。●すわりて動かぬ。

いすか 鵖(名) 鳥の名。其嘴の上下くひちがひてあはぬ鳥。故に物事の齟齬する喩に多く引かる。……(轉じて)あとさきのあはぬ爲を云ふ事。

いすくはし 勇細(枕) 極めて勇ましき意にて鯨にかけて云ふ。○紀「いすくはし鯨さやる」

いずくまる (自動四段) すわりてすくむ。

ゐずまひ 居住(名) 居樣。●すわりやう。●座作。

いずず 五十鈴(名) 多くの鈴。

いすすぐ (自働四段) 驚き騷ぐ。○記「立ち走りいすゝぎき。」(古)

いすすぎ (名) いすゝぐ事。○祝詞式「夜目のいすゝぎいづつしき事なく」(古)